

渋野遺跡

渋野遺跡

県道八多法花線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

埋蔵文化財発掘調査報告書
県道八多法花線改良事業に伴う

二〇一二

2012

徳島県教育委員会
公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

徳島県教育委員会
公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

渋野遺跡

県道八多法花線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

徳島県教育委員会
公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

序 文

本書は、県道八多法花線の改良に伴い、平成21年度及び22年度に公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センターが実施した渋野遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものであります。

当遺跡は、徳島市南部の三ッ岩山塊の南裾が多々羅川が形成した沖積地に接する地域に位置し、古墳時代には、国史跡「渋野丸山古墳」（県指定史跡「渋野の古墳」）や新宮塚古墳が築造された地域に該当します。渋野丸山古墳は、墳長118mを測る墳丘に造出や盾形周濠が伴い、墳丘には円筒埴輪や器財埴輪が樹立されており四国で第二の規模を誇る前方後円墳です。古墳時代中期には徳島県内で大型古墳が築造される地域として注目されています。今回の発掘調査では、弥生時代の遺構や中世の遺構が確認されました。大型古墳が築造される以前の当該地域の実態を一部ではありますが明らかにすることが出来たことは、地域史の中で大きな成果となります。

なお、埋蔵文化財発掘調査の実施及び報告書の作成に当たり、多くの地元の皆様と関係機関の方々にご理解・ご協力並びにご教授をいただきましたことに深く感謝いたします。

2013年3月

公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
理事長 佐野義行

例　　言

- 1 本書は県道八多法花線改良事業に伴い、平成21年（2009）度から平成22（2010）年度にかけて調査を実施した渋野遺跡（徳島市渋野町所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は徳島県道路整備課から徳島県教育委員会が委託契約を承け、徳島県教育委員会からの委託契約により、公益財團法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査及び報告書作成期間は次の通りである。

・発掘調査期間	平成21年度：平成22年1月1日～平成22年3月31日
	平成22年度：平成22年4月1日～平成22年5月31日
・報告書作成期間	平成24年度：平成24年4月1日～平成24年9月30日
- 4 遺構の表示は（公財）徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による記号を用いた。

凡例
SA：掘立柱建物　SK：土坑　SO：窯　SP：柱穴　ST：墓　SX：性格不明遺構
遺構番号は、基本的に4桁で表示している。4桁目の番号は遺構面数を表し、以下の3桁が遺構の通し番号を表す。
- 5 方位は世界測地系座標軸に、高さは東京湾標準潮位（T.P.）に準拠する。
- 6 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色町』2011年度版に準拠する。
- 7 遺物番号は、遺構毎での通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
- 8 第5図の遺跡分布図は、『徳島県遺跡地図』徳島県教育委員会を転載・改編したものである。
- 9 調査に当たっては次の機関の指導・協力を得た。

徳島県道路整備課　徳島市
- 10 遺物の掲載サイズは、弥生土器・土師器・須恵器は1/4、石器は1/2を基本とし、須恵器・陶器・磁器の片辺資料（展開図）は、3/4で掲載している。

遺構の掲載サイズは、1/30を基本とし、大型遺構は1/50～1/80で掲載している。
- 11 本書の執筆は、I-1を徳島県教育委員会教育文化政策課が、その他を栗林誠治が担当し、全体の編集は栗林が行った。遺構写真は調査担当者が、遺物写真は栗林が担当した。

12 本書に収録した遺物及び写真・図版などの記録の一切は、徳島県板野郡板野町大伏字平山86-2
に所在する徳島県立埋蔵文化財総合センターに保管している。

本文目次

I 調査の経緯.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 調査の経緯.....	4
(1) 調査の経過.....	4
(2) 調査区の配置とグリッドの設定.....	4
(3) 調査日誌抄.....	5
II 遺跡の立地と環境.....	7
1 沼野遺跡をめぐる環境.....	7
(1) 地理的環境.....	7
(2) 歴史的環境.....	8
III 調査成果.....	12
1 基本層序.....	12
2 遺構・遺物.....	12
(1) 第1遺構面遺構配置.....	12
(2) 第1遺構面の遺構と遺物.....	12
(3) 第2遺構面遺構配置.....	44
(4) 第2遺構面の遺構と遺物.....	44
IVまとめ.....	103

挿図目次

第1図 洋野遺跡発掘調査地点図	1	第31図 第1遺構面 SK, SP 遺構図(8)	38
第2図 洋野遺跡位置図	2	第32図 SP1065 出土遺物図	42
第3図 洋野遺跡グリッド配置図 (S = 1/1000)	4	第33図 第1包含層出土遺物図	43
第4図 洋野遺跡周辺地域地質図	7	第34図 第2遺構面遺構配置図	44
第5図 洋野遺跡周辺遺跡分布	9	第35図 SR2001 及び周辺 SK, SP 遺構図	45
第6図 第1遺構面遺構配置図	12	第36図 SR2002, 2003 遺構図	46
第7図 SO1001 遺構図及び周辺遺構平面図	13	第37図 SR2002 遺物出土状況図(1)	47
第8図 遺物出土状況図	14	第38図 SR2002 遺物出土状況図(2)	47
第9図 SO1001 出土遺物図	14	第39図 SR2002 出土遺物図(1)	48
第10図 SO1002 及び周辺 SK, SP 遺構図	15	第40図 SR2002 遺物出土状況図(3)	49
第11図 第1遺構面 SK, SP 遺構図(1)・SK1001 遺物図	17	第41図 SR2002 出土遺物図(2)	50
第12図 第1遺構面 SK, SP 遺構図(2)・SK1006 遺物図	20	第42図 SR2002 出土遺物図(3)	51
第13図 SP1049 出土遺物図	21	第43図 SR2002 出土遺物図(4)	52
第14図 SP1055 出土遺物図	22	第44図 SR2003 遺物出土状況図及び出土遺物図	
第15図 SD1001, 1002 遺構図	23	第45図 SR2004 遺物出土状況図(1)	55
第16図 SD1001, 1002 遺物出土状況図	24	第46図 SR2004 出土遺物図(1)	56
第17図 SD1001, 1002 出土遺物図	25	第47図 SR2004 出土遺物図(2)	57
第18図 SD1003, 1004 及び周辺 SK, SP 遺構図	26	第48図 SR2004 出土遺物図(3)	58
第19図 SD1003, 1004 遺物出土状況図	27	第49図 SR2006 遺物出土状況図(1)	59
第20図 SD1003 出土遺物図	28	第50図 SR2006 遺物出土状況図(2)	60
第21図 SD1004 出土遺物図	29	第51図 SR2006 出土遺物図(1)	60
第22図 SK1008 出土遺物図	30	第52図 SR2006 遺物出土状況図(3)	61
第23図 第1遺構面 SK, SP 遺構図(3)	31	第53図 SR2006 出土遺物図(2)	62
第24図 SD1005 及び周辺 SK, SP 遺構図	31	第54図 SR2006 出土遺物図(3)	64
第25図 SD1005 出土遺物図	32	第55図 SR2006 出土遺物図(4)	65
第26図 第1遺構面 SK, SP 遺構図(4)	33	第56図 SR2006 出土遺物図(5)	67
第27図 SP1080 出土遺物図	33	第57図 SR2006 出土遺物図(6)	69
第28図 第1遺構面 SK, SP 遺構図(5)	34	第58図 SR2006 出土遺物図(7)	70
第29図 第1遺構面 SK, SP 遺構図(6)	36	第59図 SR2006 出土遺物図(8)	72
第30図 第1遺構面 SK, SP 遺構図(7)	37	第60図 SR2006 出土遺物図(9)	73
		第61図 SR2006 出土遺物図(10)	74
		第62図 SR2006 出土遺物図(11)	76
		第63図 SR2006 出土遺物図(12)	77
		第64図 SR2006 出土遺物図(13)	78

第65図	SR2007 遺物出土状況図	79	第74図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(8)	90
第66図	SR2007 出土遺物図	79	第75図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(9)	91
第67図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(1)	80	第76図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(10)	93
第68図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(2)	81	第77図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(11)	95
第69図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(3)	82	第78図	第2 包含層出土遺物図(1)	97
第70図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(4)	83	第79図	第2 包含層出土遺物図(2)	98
第71図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(5)	85	第80図	第2 包含層出土遺物図(3)	99
第72図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(6)	87	第81図	第2 包含層出土遺物図(4)	100
第73図	第2 遺構面 SK, SP 遺構図(7)	89	第82図	第2 包含層出土遺物図(5)	102

図版目次

P L. 1	発掘調査前状況	5	P L. 21	SD1001 全景	32
P L. 2	機械掘削作業状況	5	P L. 22	第1 遺構面全景 1	41
P L. 3	発掘調査風景 1	5	P L. 23	第1 遺構面全景 2	41
P L. 4	発掘調査風景 2	5	P L. 24	第2 遺構面 SR 出土状況 1	53
P L. 5	体験発掘風景	6	P L. 25	第2 遺構面 SR 出土状況 2	53
P L. 6	発掘調査風景 3	6	P L. 26	第2 遺構面 SR 出土状況 3	53
P L. 7	渋野丸山古墳を望む	6	P L. 27	第2 遺構面 SR 出土状況 4	53
P L. 8	埋戻作業状況	6	P L. 28	第2 遺構面 SR 出土状況 5	56
P L. 9	SO1001 完掘状況 1	13	P L. 29	第2 遺構面 SR 出土状況 6	59
P L. 10	SO1001 完掘状況 2	13	P L. 30	第2 遺構面 SR 出土状況 7	59
P L. 11	SO1001 出土状況 1	14	P L. 31	第2 遺構面 SR 出土状況 8	60
P L. 12	SO1001 出土状況 2	14	P L. 32	第2 遺構面 SR 出土状況 9	60
P L. 13	SO1002 検出状況	16	P L. 33	第2 遺構面 SR 出土状況 10	61
P L. 14	SO1002 炭化材・焼土 1	16	P L. 34	第2 遺構面 SR 出土状況 11	61
P L. 15	SO1002 炭化材・焼土 2	16	P L. 35	第2 遺構面 SR 出土状況 12	62
P L. 16	SO1002 作業面 1	16	P L. 36	第2 遺構面 SR 出土状況 13	62
P L. 17	SO1002 作業面 2	16	P L. 37	第2 遺構面 SR 出土状況 14	64
P L. 18	SD1001 出土状況	24	P L. 38	第2 遺構面 SR 出土状況 15	64
P L. 19	SK1008 出土状況 1	26	P L. 39	第2 遺構面 SR 出土状況 16	77
P L. 20	SK1008 出土状況 2	26	P L. 40	第2 遺構面 SR 出土状況 17	77

觀察表目次

第1表 土器觀察表	105
第2表 石器觀察表	123
第3表 鐵器觀察表	124

I 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

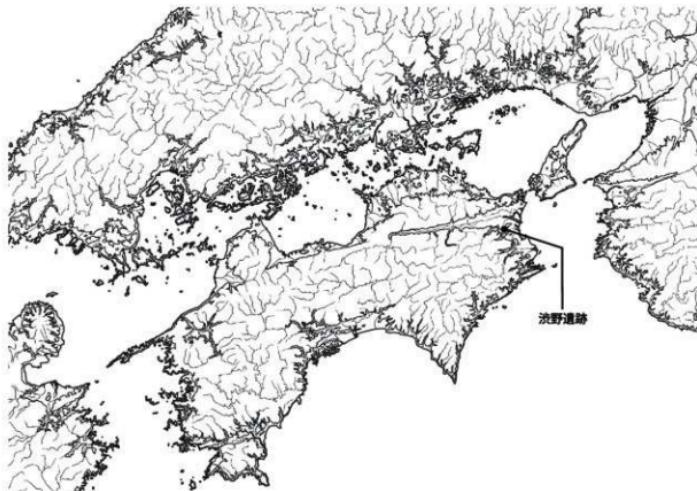
(1) 調査に至る経緯

一般県道八多法花線は、徳島市八多町八多を起点として徳島市八万町法花に至る約7kmの地域生活道路であり、市道丈六洪野線を経由して勝浦町と徳島市街地を結ぶ重要な路線である。当該路線は、バスの路線であるが現道は幅員狭小かつ線形不良で円滑な交通に支障を来している状況であり、また、県南部から徳島動物園・植物園へのアクセス道路ともなっていることから、早急な整備が必要となつていている。

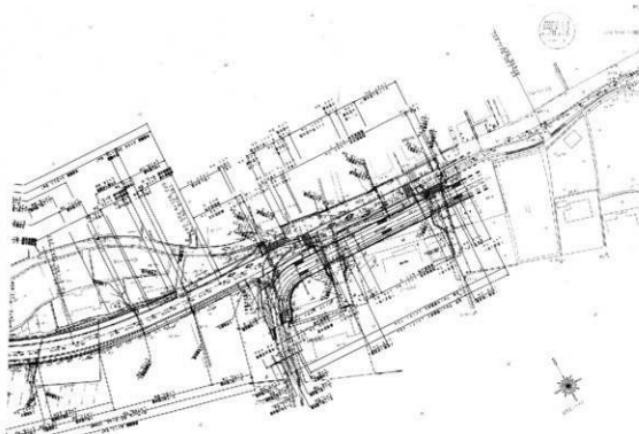
平成10年度から県単独事業により、道路整備に着手し、平成21年度までに計画区間約0.7kmの内、270mは供用を開始している。平成21年度からは、補助事業により整備を進め、平成24年度に計画区間の供用を完成している。

徳島県教育委員会文化財課（現教育文化政策課）が平成20年度に開発部局への事業照会を実施した際、東部県土整備局より文化財課へ一般県道八多法花線地内（徳島市方上から八多町の間、約6,800m）の埋蔵文化財の有無と取り扱いについて照会があった。これを受け、文化財課は当該地が徳島県遺跡地図における周知の埋蔵文化財包蔵地（散布地・201-553他）に含まれていることを確認するに至った。

徳島市洪野町は国史跡である洪野丸山古墳を中心に、数基の古墳が近接しており古墳時代中期の古墳



第1図 洪野遺跡発掘調査地点図



第2図 渋野遺跡位置図

群が形成されている。また、平地部の渋野遺跡では弥生時代～中世の遺物散布が知られているなど、遺跡が多く所在する地域である。このことから一般県道八多法花線路線においても埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いことが容易に想定された。そこで文化財課では、平成21年5月26日と同年10月1日の2回にわたり試掘調査（実調査面積40m²）を実施した。この結果、渋野工区の一部において、弥生時代と中世の遺構・遺物を確認するに至った。試掘調査の結果を受け、文化財課と東部県土整備局は協議を重ね、路線整備により遺跡が損なわれる部分については工事着手前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることで合意した。

発掘調査については、徳島県県土整備部道路局道路整備課より配当替えを受け、徳島県教育委員会文化財課を事務局として徳島県が財團法人徳島県埋蔵文化財センター（現公益財團法人徳島県埋蔵文化財センター）に委託して実施した。平成22年1月1日から同年3月31日の3ヶ月間に600m²（延べ1,200m²）の調査を、平成22年4月1日から同年5月31日の2ヶ月間に380m²（延べ760m²）の調査を行った。発掘調査では、試掘調査で確認したように中世と弥生時代の遺構・遺物を確認し、コンテナ70箱分の遺物が出土している。

遺物の整理作業については、発掘調査同様に徳島県県土整備部道路局道路整備課より配当替えを受け、徳島県教育委員会教育文化政策課を事務局として徳島県が公益財團法人徳島県埋蔵文化財センターに委託して実施する運びとなり、平成24年4月1日より同年9月30日にかけて遺物整理及び報告書作成にあたることとなった。

(2) 発掘調査体制及び報告書作成体制

発掘調査体制及び報告書作成体制は以下の通りである。

発掘調査

平成 21 年度

理事長	福家清司 県教育委員会教育長
専務理事兼所長	阿部修三
常務理事兼事務局長	近松克仁
総務課長	三好修基
事業課長	石井伸夫
庶務係長	氏家敏之
事務主任	野田登記子
調査係調査 1 係長	藤川智之
調査係調査 2 係長	原 芳伸
発掘調査担当	原芳伸・佐藤俊祐

平成 22 年度

理事長	福家清司 県教育委員会教育長
専務理事兼所長	平尾恭二
常務理事兼事務局長	菅原康夫
総務課長	三好修基
事業課長	藤川智之
庶務係長	氏家敏之
事務主任	圓藤早知子
調査係調査 1 係長	原 芳伸
発掘調査担当	原 芳伸・矢野壯和

報告書作成

平成 24 年

理事長	福家清司（～平成 24 年 6 月 5 日）・佐野義行（平成 24 年 6 月 6 日～）
専務理事兼所長	小西 孝
常務理事兼事務局長	菅原康夫
次長兼総務課長	漆川明彦
事業課長	藤川智之
庶務係長	大橋育順
事務主任	圓藤早知子
整理係専門研究員	近藤 瑞
整理担当	山下智美（～平成 24 年 4 月 30 日） 栗林誠治（平成 24 年 5 月 1 日～9 月 30 日）

2. 調査の経過

(1) 調査の経過

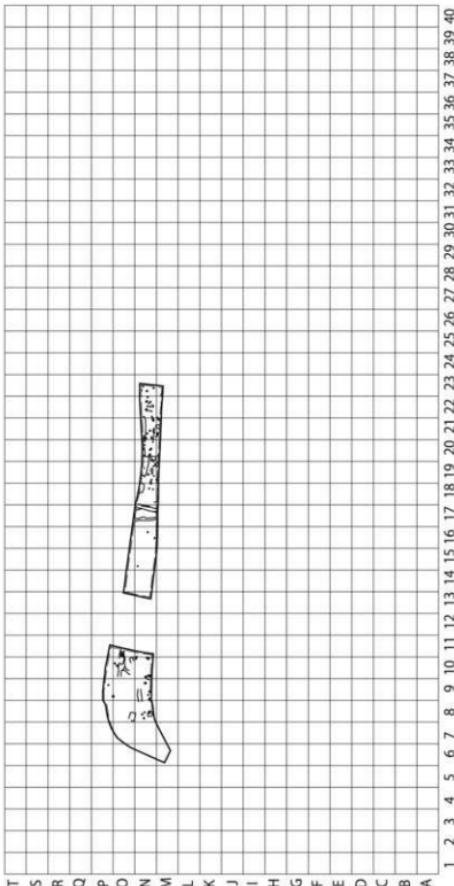
平成 21 年及び 22 年度度県単道路局部改良事業（八多法花線）関連埋蔵文化財発掘調査は、現多々羅川に沿う形で平成 21 年度より東隅の地点から着手され、翌平成 22 年度には南西隅の地点に調査区を設定する形で進行した。各年度において調査都合上、東側と西側に分割して発掘調査を実施した。

発掘調査対象地は、現多々羅川や県道八多法花線が隣接するなどの状況から、現地説明会を開催することが出来なかった。しかし、平成 22 年度には徳島市立渋野小学校や徳島市立渋野幼稚園を対象にした見学会を開催したり、各年度には徳島県立埋蔵文化財総合センターにて開催された「発掘とくしま」において調査成果の紹介に努めた。

(2) 調査区の配置とグリッドの設定

発掘調査期間は総計 2 ヶ年度を費やし、合計 2 ヶ所の調査区が設定された。調査都合上各調査区は東西もしくは南北に分割して発掘調査が実施された。これらを総括して、平成 21 年度調査区と平成 22 年度調査区に項目別調査区名を与えることなく一括して報告することとする。

徳島県教育委員会教育文化政策課を通じて事業者より入手した測量基準が第Ⅳ系国土座標軸に基づくデータであった事や、先述の如く発掘調査期間が複数年度に渡ることから測



第 3 図 渋野遺跡グリッド配置図 (S = 1/1000)

量基準を統一する必要があることから、世界測地系座標へと変換を行い測量基準とした。本報告においても世界測地系座標軸に統一して記載する。

各グリッドの設定にあたっては、世界測地系 X = 112300.000、Y = 94800.000 の交点を基点とした。公益財団法人徳島県埋蔵文化財センターの発掘調査では、100 m 単位の大グリッドを設定し、その内側を 5 m 単位の小グリッドを設定することを基本としているが、渋野遺跡の発掘調査にあたっては調査制約上、大グリッドの設定は行わず、基点より 5 m 毎の小グリッドを設定した。基点より東西方向に西から 1, 2, 3, 4, 5, …25、南北方向に A, B, C, D, E, …T の名称を与えて、A1, B2, D10, Q18, T25 等の表記とした。

(3) 調査日誌抄

平成 21 年度発掘調査

平成 21 年

11月31日 平成21年度調査対象地発掘調査出。

平成22年

1月4日 仕事始。調査対象地現況確認。調査準備。

1月5日 調査対象地安全査定打設。周辺検査。

1月6日 東区表土及び現代整地層機械削除。

1月7日 東区表土及び現代整地層機械削除。測量用基準杭打設。

1月8日 発掘作業員安全教育。東区機械第 1 包含層人力掘削。

1月12日 東区調査区グリッド杭打設。東区第 1 通構面通構内削除。

1月13日 東区第 1 通構面通構状況写真撮影・測量。第 1 通構面通構内削除。

1月18日 東区第 1 通構面全層写真撮影。

1月19日 東区第 2 包含層人力掘削。第 2 通構面削除。第 2 通構面削除状況写真撮影。

1月20日 東区第 2 通構面通構内削除・測量。

1月22日 東区第 2 通構面全層写真撮影・測量。

1月25日 東区第 2 通構面削除。第 2 通構面以下の土層堆積状況確認トレンチ調査。

1月27日 東区埋め戻し。

1月29日 東区埋め戻し完了。

2月2日 西区表土及び現代整地層機械削除。

2月3日 西区表土及び現代整地層機械削除。第 1 包含層人力掘削。

2月5日 西区第 1 通構面通構削除。第 1 通構面削除状況及び全層写真撮影・測量。

2月8日 西区第 1 通構面通構内削除・写真撮影・測量。

2月16日 西区第 2 包含層人力掘削。



PL. 1 発掘調査前状況



PL. 2 機械掘削作業状況



PL. 3 発掘調査風景 1



PL. 4 発掘調査風景 2

- 2月17日 西区第2道横面道路検出。検出状況全量写真撮影・測量。
- 2月18日 西区第2道横面道路内面削・測量。
- 2月23日 西区第2道横面道路内面削・測量。
- 2月24日 徳島市立浜野公民館共催現地説明会開催。測量。
- 2月25日 徳島市立浜野保健衛生対象地発掘調査会議を開催。PL5測量。
- 2月28日 平成22年度調査対象地発掘調査提出。
- 3月1日 西区第2道横面以下地層堆積状況確認トレンチ調査。
- 3月5日 埋め戻し
- 3月18日 東・西区埋め戻し。調査手順が復旧完了。
- 3月26日 現場事務所等撤収。周辺整備。
- 3月31日 発見箇所提出。平成21年度調査対象地発掘調査終了。



P L . 5 体験発掘風景

平成 22 年度発掘調査

平成 22 年

- 4月 1 日 発掘調査準備。
- 4月 7 日 徳島県道路整備課、徳島県教育委員会教育文化政策課、公益財団法人徳島県埋蔵文化財センターによる 6 施設協議。
- 4月12日 発掘調査対象地安全確認等打設。
- 4月13日 南区表土及び現代整地層機械削除、測量用基準杭打設。
- 4月19日 発掘調査作業員安全教育。南区第1号含蓄人力掘削、グリッド机打設。
- 4月21日 第1道横面道路検出。
- 4月23日 南区第2号含蓄人力掘削。
- 4月24日 南区第2号含蓄人力掘削、道横検出。第2道横面道路検出状況写真撮影。
- 4月26日 南区第2道横面道路内削削・測量。
- 4月30日 南区第2道横面全量写真撮影・測量。
- 5月 6 日 南区埋め戻し、北区表土及び現代整地層機械削除。
- 5月11日 北区機械削削完了。第1号含蓄人力掘削、第1道横面道路検出。
- 5月13日 北区第1道横面道路検出状況全量写真撮影・測量。
- 5月14日 北区第1道横面道路内削削、第1道横面全量写真撮影・測量。
- 5月15日 北区第2号含蓄人力掘削、道横検出。第2道横面道路検出状況全量写真撮影。
- 5月17日 北区第2道横面道路内削削。
- 5月18日 北区第2道横面全量写真撮影・測量。
- 5月20日 北区第2道横面以下地層堆積状況確認トレンチ調査。
- 5月21日 南・北区埋め戻し。
- 5月25日 南・北区埋め戻し完了。安全帯等撤去。
- 5月31日 現場事務所等撤収。周辺整備、発見箇所提出。平成22年度発掘調査終了。



P L . 6 発掘調査風景 3



P L . 7 渋野丸山古墳を望む



P L . 8 埋戻作業状況

II 遺跡の立地と環境

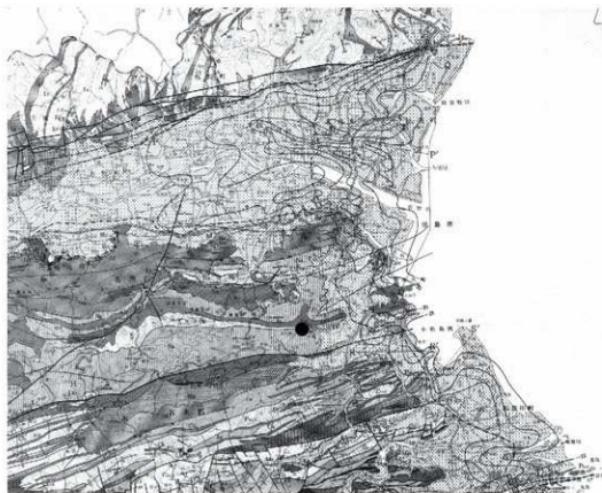
1. 渋野遺跡をめぐる環境

(1) 地理的環境

渋野遺跡が所在する渋野町は、徳島市内で最も大きな面積を有する多家良地区の一角を占め、旧勝浦郡渋野村は、明治22年、本庄（現在の丈六町）・飯谷（現在の飯谷町）・宮井（現在の多家良町）・八多（現在の八多町）の各村と合併し、勝浦郡多家良村を構成し、昭和26年、多家良村は徳島市と合併し、現在に至る。

徳島は面積約80%が山地であり、北から讃岐山脈、四国山地、海部山地等が東西方向に連なっている。吉野川北岸に沿って東西に延びる中央構造線により、北側の西南日本内帯と南側の西南日本外帯とに分けられる。北側（内帯）は中生代の和泉層群を主体とする讃岐山脈が、南側（外帯）は北から順に三波川変成帯、御荷鉢変成帯が、御荷鉢構造線を挟み中世紀の砂岩泥岩互層の秩父帶北帯や黒瀬川構造帯や三宝山帯で構成される秩父帶が、仏像構造線を挟み中生代から古第三紀にかけて堆積した砂岩泥岩互層の四万十帯が配列し、四国山地、海部山地を形成している。

渋野遺跡が展開する徳島平野は、主に吉野川沖積平野と勝浦川沖積平野から構成されている。四国最大の河川で別名「四国三郎」と称される吉野川は、高知県瓶ヶ森山南方を水源とし、四国山地から中央構造線に沿って東流し、紀伊水道に注いでおり、総延長は194km、流域面積は3,750km²に及ぶ。その吉



第4図 渋野遺跡周辺地域地質図

野川下流域に楔形に細長く広がる沖積平野が徳島平野であり、河口付近は網目状に発達した三角州と自然堤防、海浜ラグーンからなる。勝浦川は、秩父帯北帯を東流する河川で、総延長49.6km、流域面積は224kmに及ぶ。中生代ベルム紀中古世剣山層群の砂岩層である勝浦郡上勝町剣山地雲早山東方を水源とし、上勝町域では中生代ベルム紀中古世剣山層群の砂質泥岩層や泥岩層を穿ちながら曲流・蛇行し、勝浦町域では中世白亜紀有田世羽ノ浦層を蛇行しながらも北東方向へ貫流し、勝浦盆地内では中世白亜紀中古世藤川層を貫流しながら低位段丘や沖積地を形成し、勝浦町沼江附近で北流に転じ、剣山層群砂岩層や徳島市飯谷地区的チャート層や凝灰岩層を穿ち、横谷を形成する。徳島市飯谷町や小松島市田浦町付近より沖積平野を形成し、徳島市津田町地域南部で東に向きを変え紀伊水道に注ぐ。勝浦川が現在の河道に固定されたのは、17世紀に徳島藩が旧勝浦郡田野村（現小松島市田野町）井口から旧勝浦郡大原浦（現徳島市大原町）千代ヶ丸にかけて前原堤を築堤したからであり、現在の小松島市田浦町や新居見町を東流する神田瀬川や芝生川は、勝浦川の旧河道もしくは支流である。吉野川や勝浦川河口部の汀線は、海面変動により歴史的に大きく変動してきた。ヴュルム氷河期最末期にあたる約28,000～18,000年前には、海面の高さは現在よりも100m前後低かったと想定され、当時の四国島は本州島と陸続きであったばかりでなく、日本列島自体が大陸と陸続きであったと考えられる。その後の温暖化により海面が次第に上昇し、繩文海進のピークにあたる約6,000年前には、吉野川や勝浦川河口部の汀線は現地標高5m付近の内陸部まで進入していたと推定されている。その後、弥生時代以降の寒冷化により、海面の低下と各河川により運ばれる土砂の堆積によって、デルタが発達した。吉野川河口部には近世初頭までラグーン状の入り江がみられたが、以後の新田開発によって次第に陸地化され、今日の徳島平野が形成された。

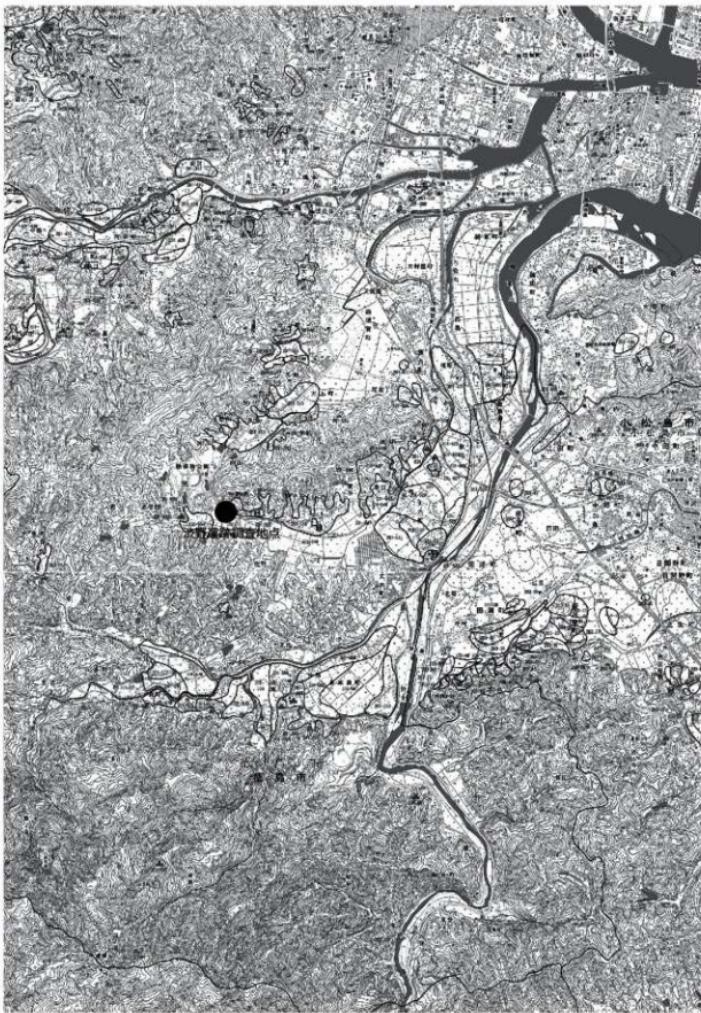
渋野町は、勝浦川下流左岸の西方に該当し、北・西・南の三方向を山塊に囲まれ、その中央部を西から東へ流れる多々羅川が形成した沖積地該当する。方上町との境に、ほぼ東西方向に延びる山塊に、三ツ時山がある。多々羅川は無点紋結晶片岩層の内、塙基性片岩と泥質片岩の互層もしくは泥質片岩層から構成される三波川帶最南部の地域を東方向へ貫流する河川である。三ツ時山は、山頂部は無点紋結晶片岩層の内、赤鉄鉱や石英片岩と泥質片岩の互層で構成され、山裾部は塙基性片岩で構成される。

渋野遺跡は、多々羅川北岸から三ツ時山塊裾部にかけて展開する遺跡と推定され、今回の調査地点は、多々羅川現河道北岸に位置する。

(2) 歴史的環境

ここでは、勝浦川が形成する沖積平野とその周辺部に立地する遺跡を取り上げ、歴史的環境を概観する。旧石器時代の遺跡は、当該地では確認されていない。繩文時代の遺跡として知られるものには小松島市新居見遺跡がある。新居見遺跡は勝浦川支流の南側に「展開し、支流旧河道に面した微高地縁辺部より、腹部から脚部にかけて遺存する上半身を欠損した土偶が出土した。遺存土偶は残存長7.6cm、最大厚2.5cmを測り、分割塊製作法により製作された寸胴でやや平板な胴部を持つが、胴部と脚部の境、脚部と踝部の境、尻部、背中部凹みなどが沈線によって表現されているが、正中線や腹部、臀部の表現はみられない。胸に該当する箇所はベンガラによる赤色塗彩されている。分析の結果、ベンガラを塗布していることがわかった。

弥生時代の遺跡分布に関しては、既往調査事例としては鮎喰川流域の遺跡が著名であり、勝浦川流域ではあまり知られていない。しかし、大正期に勝浦郡多家良村地区より銅鐸が出土したことが伝えられ



第5図 渋野遺跡周辺遺跡分布

ている（梅原 1927）。1987 年に実施された徳島県教育委員会による分布調査では徳島市多家良町にて弥生土器や石器が採取されている。勝浦川北岸の徳島市丈六町においては徳島市教育委員会による発掘調査では弥生土器や石器が出土した。また、（財）徳島県埋蔵文化財センターの分調査では、多家良町の勝浦川左岸微高地において下川津 B 類と推定される高松平野から搬入された弥生土器片が採取されている（近藤 2004）。勝浦川南岸では、新居見遺跡において弥生時代中期後半の遺構や遺物が確認されている。

古墳時代になると、眉山山麓や徳島市国府町から石井町に延びる気延山に古墳が数多く築かれるが、中期には勝浦川流域における古墳の築造が増加する。勝浦川北岸の三ッ時山麓には、マンジョ塚 2 号墳が築造された後に、渋野丸山古墳が築造される。その後、新宮塚古墳や天王の森古墳などが築造される。丈六寺山には結晶片岩製組合式箱形石棺を埋葬主体に持つ丈領古墳が築造される。勝浦川南岸の田野山地の前山には、古墳時代中期初頭（5 世紀初頭）に築造された前山古墳・人物埴輪や円筒埴輪が出土した前山遺跡などが所在する。一方、東側尾根先端には、古墳時代後期（6 世紀末）に築造された弁慶の岩屋古墳が立地する。新居見遺跡では古墳時代後期に属する小型埋葬施設群が確認されている。なお、元禄 14 年に千代ヶ丸（徳島市大原町）觀音山頂上より「石櫃」に納められた人骨・鉄刀・鉄槍・鉄鋤が出土した事が伝えられており、鳥居龍藏や笠井新也が千代ヶ丸の古墳として報告した結晶片岩製組合式箱形石棺と推定される。

古代には徳島市国府町域に国府が営まれる。政庁跡の確認は現段階では明確でないものの觀音寺付近が有力となってきている。律令制下では勝浦川流域は勝浦郡に属し、勝浦川北岸の旧勝浦郡多家良村宮井・本庄・勝古地区では真北から西に 42 度振った連続式の坪並式の条里遺構が確認される。勝浦郡内では、篠原郷・託羅郷・新居郷・余戸郷が設置される。「和名抄」（高山寺本・伊勢本・東急本）において「之乃波良」と記載される篠原郷は丈六・本庄・渋野（徳島市多家良地区）・大松・大谷・方上・西須賀（徳島市勝古地区）・小松島市前原に比定される。「和名抄」（高山寺本・伊勢本・東急本）において「多加良」と記載される託羅郷は、勝浦川下流域北岸平野部の宮井・飯谷・八多（徳島市多家良地区）に比定される。「和名抄」（高山寺本・伊勢本・東急本）において「连比乃為」・「尔比乃井」と記載される新居郷は、勝浦川下流域南岸平野部の田浦・新居見・田野・芝生・前原・江田（小松島市）に比定される。「余戸郷」は、小松島市中田町・中郷町から徳島市大原町にかけての勝浦川河口部に比定されている。文献史料からは、8 世紀中頃には、造東大寺司の新島庄が名方郡内に成立し、10 世紀頃には庄内に勝浦莊が成立している。東大寺に伝えられた絵図類を通してその所在地が検討されるとともに、吉野川河口付近での低湿地の開発のあり様をうかがわせる。その後、平安時代後期には、安楽寿院（京都府伏見区）領名東庄に発展する。新居見遺跡において大型区画溝や掘立柱建物群で構成される遺構が確認されており、新居郷や田奈保に関連する可能性が指摘されている。

中世には、春日神社領富田莊・石清水八幡宮領萱島莊などが立庄される。勝浦川北岸地域には京都仁和寺領篠原庄・勝浦庄や国衙領としての方上保が、勝浦川南岸地域には紀州高野山勝蓮花院領太奈保が成立する。鎌倉時代に成立した保である。現在の田野町を遷称地とし、新居見町を含む地域に比定される。徳島市丈六町丈領に所在する丈六寺は、白鳳期に創建されたと伝えられ、京都仁和寺の末寺であった可能性や篠原庄に勢力をを持つ田口氏に保護された可能性が指摘されている。明応元年（1492）年阿波國守護細川成之により桂林寺金剛用兼を開山とし曹洞宗寺院として再興された。この丈六寺境内において確認された丈六寺境内遺跡からは、12 世後半の掘立柱建物群や池状遺構が、16 世紀代の盛土整地層、

16世紀末から17世紀にかけての土壘状遺構や溝状遺構が確認されている。掘立柱建物群は丈六寺前身の寺院関連の遺構ではなく中世村落関連遺構と推定される。勝浦川下流域には中世城館が分布する。徳島市大原町千代ヶ丸には芝山城跡（別称千代ヶ丸城跡）、徳島市大松町には高田屋敷跡、徳島市勝占町片志には片志城跡、徳島市丈六町高木には熊山城跡（別称本庄城跡・桜間城跡・勝浦城跡）、徳島市丈六町行正には田林寺宮跡、徳島市渋野町入道には渋野城山城跡と渋野城居館跡、徳島市多家良町小路には宮井城跡、徳島市八多町には八多城跡（別称亭ヶ丸）、徳島市多家良町中津には中津峰城跡、徳島市飯谷町には飯谷城（別称山分城跡・俊平城跡・長柱城跡）や源長政別館跡、小松島市中田町には中田城跡、小松島市中郷町字秦地には中郷城跡（別称秦地城跡・藤原兼時屋敷跡）、小松島市田浦町には田浦城跡、小松島市新居見町字東山下には新居見城跡（天神山城跡）が分布する。

1585年、豊臣秀吉は四国討伐に従い功績のあった蜂須賀氏に、阿波国17万5千石を与えた。父正勝に変わり蜂須賀家政が領有することになり、当初は徳島市一宮町に所在する一宮城を居城に据えていたが、すぐに徳島城に移転した。徳島入部に伴い、城下町の建設も平行して進められた。城下町は吉野川分流の新町川、寺島川、助任川、福島川、沖州川等の網状河川を利用した「島普請」により建設され、これらの河川により形成された三角州上に、城郭の置かれた徳島をはじめ、出来島、寺島、福島、営三島、住吉島の6つの島と、それらの島を取り囲むように配置された新町地区、富田地区、佐古地区、前川・助任地区が建設された。その後、徳島藩は国替えもなく幕末まで蜂須賀氏25万石による支配が連続と続いた。現在の徳島城鷺の門を起点に整備された各種街道のうち土佐街道（土佐本道・土佐往還）は、本道23里で鷺の門から通町を西進し新町橋を渡り、南に折れ大工町から大道を通り二軒屋へ至り、ここで徳島城下町を抜け、下八万・大谷・方上・西須賀を経由し勝浦川を渡り前原・日開野を南進した。

III 調査成果

1. 基本層序

調査区の現況は渋野小学校跡地であり、現在の多々羅川の南側に位置する。現地盤高は標高 890 m 前後である。第1 遺構面は標高約 8.00 m、第2 遺構面は標高約 7.80 m で検出された。

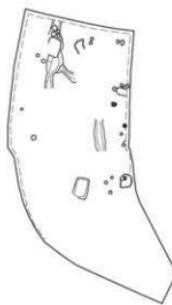
現地盤下約 40cm は客土による盛土整地層で、盛土整地層下において近代期以降の旧耕作土・床土層が検出された。旧耕作土・床土の層厚は約 30cm を測る。これら盛土整地層と旧耕作土層は発掘調査対象外として機械により掘削した。それらの下に、マンガンを全体に含むにぶい黄色粘性砂質土層が約 15cm 前後堆積しており、これが第1 遺物包含層となるが、遺物の含有量は少ない。その下に、少量の炭化物及び全体にマンガン粒を多く含む暗灰黄色粘性砂質土層が 20cm 前後堆積している。この上面が第1 遺構面となる。そして、この第1 遺構面下がそのまま第2 遺物包含層（弥生時代終末期）となるが、遺物の含有量は粗である。第2 遺構面は第1 遺構面下約 20cm で、直径 5mm のマンガン粒を全体に含む細砂混じりにぶい黄色粘性砂質土層の上面となる。層厚は約 20cm である。第2 遺構面下の土層堆積状況は扇状地性の自然堆積であり、 $\phi = 1\text{ mm}$ 程度の粗砂及び、直径約 10mm の円礫混じりの礫層が堆積する。層厚は不安定で、遺構及び遺物は確認されなかった。調査区南では部分的に扇状地性の砂礫層の堆積がみられる。その他の層序は調査区全域ではほぼ対応する。



2. 遺構・遺物

(1) 第1 遺構面遺構配置 (第6図)

旧多々羅川に面した南側高湿地縁辺に位置する対象地においても、主な遺構は対象地北側部分を中心検出された。検出された遺構は、炭窯 (SO) 2基、土坑 (SK) 10基、柱穴・小穴 (SP) 91基、自然流路 (SR) もしくは遺構面の落ち込み (SR として表記) 10条である。柱穴群および土坑は、主に1号溝状遺構・2号溝状遺構より東側の調査区東半 (グリッド N - 19 から E) において検出された。この地点においては2基の炭窯と土坑や柱穴が集中して検出された。

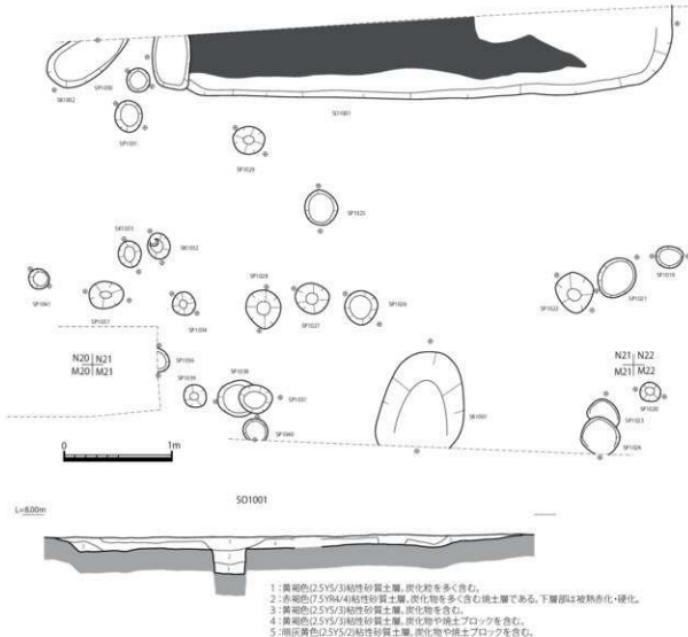


(2) 第1 遺構面の遺構と遺物

1号炭窯 SO1001 (第7~9図)

N17 グリッドにて検出。検出全長 3m、肩部幅 2m、裾部幅 15m を 第6図 第1 遺構面遺構配置図

測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。北側約1/3は調査対象外地へと広がる。突出部の方向は、N-76°-Wを指向する。深度は突出部で0.3m、窓体中央部で0.2mを測る。床面は突出部から西端にかけて約1°の緩い勾配を持つ。窓体内の被熱状況は窓体床面中寄りと側壁が著しい。小ビット等は未検出である。



第7図 SO1001構造図及び周辺構造平面図



P.L. 9 SO1001 完掘状況 1



P.L. 10 SO1001 完掘状況 2



第9図 SO1001 出土遺物図

遺構覆土は5層に分層できる。1層は炭化粒を多く含む黄褐色粘性砂質土層である。廃棄後の流れ込み土層もしくは製品を取り出した後に窯体を埋め戻した際の堆積土と推定される。2層は赤褐色(7.5YR4/4)粘性砂質土層で、炭化物を多く含む焼土層である。特に層下面部は被熱による赤化・硬化が著しい。焼成時の天井部と推定され、製品取り出し後に、埋め戻し土として転用されたと推定される。3～5層は、炭化物や焼土ブロックを含む黄褐色粘性砂質土層である。埋め戻した際の堆積土と推定される。

9-1は覆土下層より出土した瓦質土器捏ね鉢である。内外面共にナデが施されている。胎土中には結晶片岩が含まれている。14世紀～15世紀の年代を与えることができる。

9-2は覆土下層より出土した須恵器捏ね鉢である。復原口径は17cmを測る。体部内面には横方向の板ナデが施される。魚住窯の可能性があり、13世紀～15世紀の年代を与えることができる。

9-3は覆土下層より出土した土師質土器杯である。底部のみの出土である。底部内面はナデが、外面には静止系切りが施されている。13世紀の年代を与えることができる。

第8図 遺物出土状況図



P.L. 11 SO1001 出土状況 1



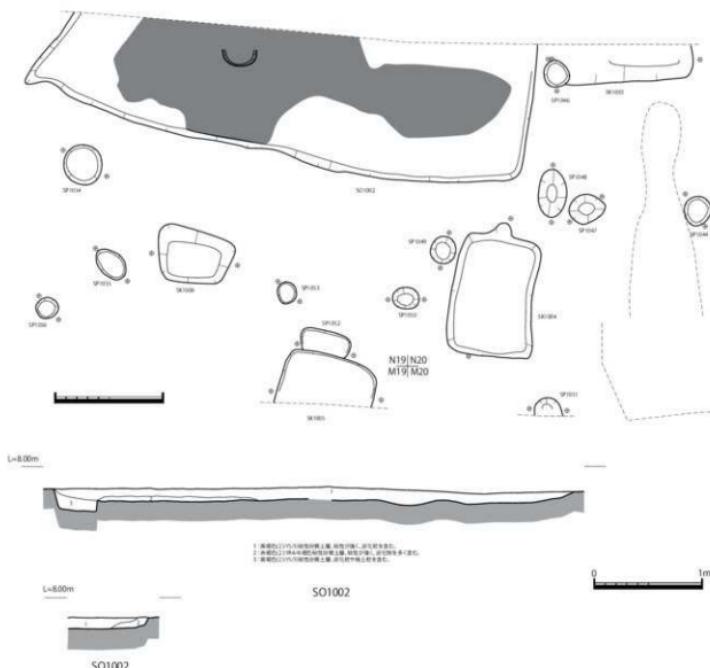
P.L. 12 SO1001 出土状況 2

2号炭窯 SO1002 (第10図)

N16グリッドにて検出。検出全長2.7m、肩部幅1.6m、裾部幅1.5mを測る。平面形態は隅丸長方形を呈する。北側約1/3は調査対象外地へと広がる。突出部の方向は、N - 76° - Wを指向する。深度は突出部で0.2m、窯体中央部で0.2mを測る。床面は突出部から西端にかけて約1°の緩い勾配を持つ。窯体内の被熱状況は窯体床面中寄りと側壁が著しい。小ピット等は未検出である。

遺構覆土は3層に分層できる。1層は黄褐色(2.5Y5/3)粘性砂質土層。粘性が強く、炭化粒を含む。2層は赤褐色(2.5YR4/4)褐色粘性砂質土層。粘性が強く、炭化物を多く含む。3層は黄褐色(2.5Y5/3)粘性砂質土層。炭化粒や焼土粒を含む。いずれも製品を取り出した後に窯体を埋め戻した際の堆積土と推定される。

遺構内からは、遺物は出土していない。



第10図 SO1002 及び周辺SK, SP遺構図



P L. 13 SO1002 検出状況



P L. 14 SO1002 炭化材・焼土 1



P L. 15 SO1002 炭化材・焼土 2



P L. 16 SO1002 作業面 1



P L. 17 SO1002 作業面 2

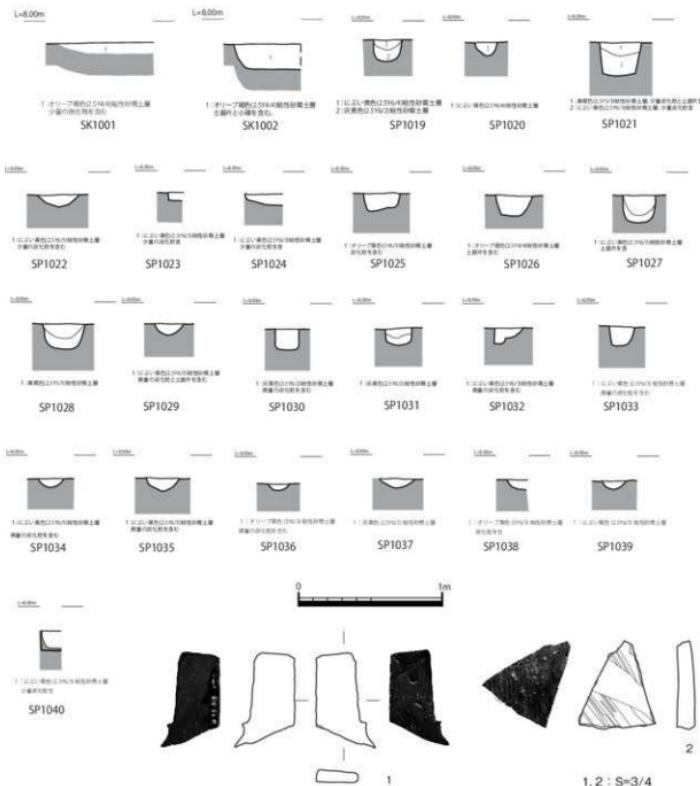
1号土坑 SK1001（第11図）

N21, M21 グリッドにて検出。検出長軸 0.9 m、短軸 0.8 m、深度 10cmを測る。遺構覆土は少量の炭化粒を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

11-1は瓦質土器の蓋である。近世瓦質土器の可能性がある。11-2は陶器壺の体部である。外面にはイナデが、内面にはハケが施されている。備前焼である。近世初頭の年代を与えることができる。

2号土坑 SK1002（第11図）

N20, N21 グリッドにて検出。検出長軸 0.3 m、短軸 0.6 m、深度 24cmを測る。遺構覆土は、土器片や小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。



第11図 第1遺構面SK, SP遺構図(1)・SK1001遺物図

19号柱穴 SP1019 (第11図)

M22グリッドにて検出。長軸0.26m、短軸0.2m、深度20cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（2Y6/4）粘性砂質土層。

20号柱穴 SP1020 (第11図)

M22グリッドにて検出。長軸0.2m、短軸0.19m、深度12cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（2Y6/4）粘性砂質土層。土器片を含む。

21号柱穴 SP1021（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.4m、短軸0.24m、深度30cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。少量の炭化粒と土器片を含む。

22号柱穴 SP1022（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.38m、短軸0.24m、深度12cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層。少量の炭化粒を含む。

23号柱穴 SP1023（第11図）

M21グリッドにて検出。長軸0.3m、検出短軸0.18m、深度8cmを測る柱穴である。

24号柱穴 SP1024（第11図）

M21グリッドにて検出。長軸0.36m、短軸0.34m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は、オリーブ黄色（25Y6/3）粘性砂質土層。炭化粒を含む。

25号柱穴 SP1025（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.33m、短軸0.32m、深度16cmを測る柱穴である。遺構覆土は、オリーブ褐色（5Y6/3）粘性砂質土層。炭化粒を含む。

26号柱穴 SP1026（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.31m、短軸0.3m、深度18cmを測る柱穴である。遺構覆土は、オリーブ褐色（25Y4/4）粘性砂質土層。土器片を含む。

27号柱穴 SP1027（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.32m、短軸0.28m、深度25cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層。土器片を含む。2層覆土は不明。

28号柱穴 SP1028（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.36m、短軸0.24m、深度24cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。2層覆土は不明。

29号柱穴 SP1029（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.26m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒と土器片を含む。

30号柱穴 SP1030（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.22m、深度19cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色（25Y6/2）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

31号柱穴 SP1031（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.26m、深度16cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色（25Y6/2）粘性砂質土層である。

32号柱穴 SP1032（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.26m、短軸0.22m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

33号柱穴 SP1033（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.25m、短軸0.22m、深度18cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

34号柱穴 SP1034（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.21m、深度8cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

35号柱穴 SP1035（第11図）

N21グリッドにて検出。長軸0.32m、短軸0.25m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

36号柱穴 SP1036（第11図）

N21,M21グリッドにて検出。長軸0.22m、検出短軸0.12m、深度6cmを測る柱穴である。遺構覆土は、オリーブ黄色（5Y6/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

37号柱穴 SP1037（第11図）

M21グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.32m、深度9cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色（25Y6/2）粘性砂質土層。

38号柱穴 SP1038（第11図）

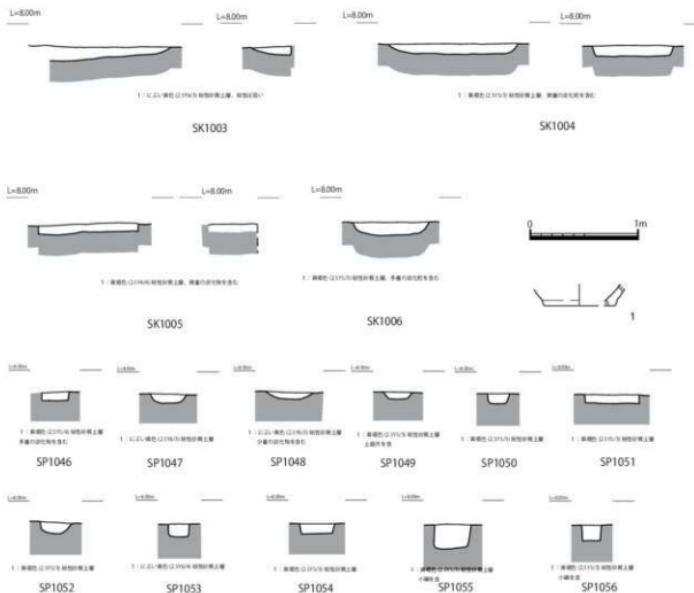
M21グリッドにて検出。長軸0.34m、検出短軸0.2m、深度9cmを測る柱穴である。遺構覆土は、オリーブ黄色（5Y6/3）粘性砂質土層。炭化粒を含む。

39号柱穴 SP1039（第11図）

M21グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.21m、深度7cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層。

40号柱穴 SP1040（第11図）

M21グリッドにて検出。長軸0.24m、検出短軸0.22m、深度18cmを測る柱穴である。遺構覆土は、



第12図 第1遺構面SK・SP遺構図(2)・SK1006遺物図

にぶい黄色（2.5Y6/3）粘性砂質土層。少量の炭化粒を含む。

3号土坑SK1003（第12図）

N20グリッドにて検出。長軸1.26m、検出短軸0.38m、深度14cmを測る土坑である。遺構覆土は、にぶい黄色（2.5Y6/3）粘性砂質土層。粘性は弱い。

4号土坑SK1004（第12図）

N20グリッドにて検出。長軸1.24m、短軸0.74m、深度10cmを測る土坑である。遺構覆土は、黄褐色（2.5Y5/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

5号土坑SK1005（第12図）

N19, M19グリッドにて検出。長軸0.9m、検出短軸0.46m、深度10cmを測る土坑である。遺構覆土は、黄褐色（2.5Y4/4）粘性砂質土層微量の炭化物を含む。

6号土坑 SK1006 (第12図)

N19グリッドにて検出。長軸0.74m、短軸0.7m、深度12cmを測る土坑である。遺構覆土は、黄褐色(25Y5/3)粘性砂質土層。多量の炭化粒を含む。12-1は土師質土器杯である。13~14世紀の年代を与えることができる。

46号柱穴 SP1046 (第12図)

N20グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.24m、深度8cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色(25Y5/4)粘性砂質土層。多量の炭化物を含む。

47号柱穴 SP1047 (第12図)

N20グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.26m、深度9cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色(25Y6/3)粘性砂質土層。

48号柱穴 SP1048 (第12図)

N20グリッドにて検出。長軸0.44m、短軸0.26m、深度6cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色(25Y6/3)粘性砂質土層。少量の炭化物を含む。

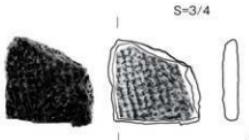
49号柱穴 SP1049 (第12, 13図)

N20グリッドにて検出。長軸0.26m、短軸0.24m、深度7cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色(25Y5/3)粘性砂質土層。土器片を含む。

13-1は覆土上層より出土した瓦質土器壺である。内外面共に摩耗のため調整は不明であるが、外面には格子目タキ痕が、内面には當て具痕をナデ消しの痕跡が観察される。胎土中には雲母片と白色粒が含まれている。十亜産の可能性があり、13世紀後半~14世紀の年代を与えることができる。

50号柱穴 SP1050 (第12図)

N19, N20グリッドにて検出。長軸0.2m、短軸0.2m、深度9cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色(25Y5/3)粘性砂質土層。



第13図 SP1049出土遺物図

51号柱穴 SP1051 (第12図)

M20グリッドにて検出。検出長軸0.28m、検出短軸0.18m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色(25Y5/3)粘性砂質土層。

52号柱穴 SP1052 (第12図)

N19グリッドにて検出。長軸0.48m、検出短軸0.2m、深度9cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色(25Y5/3)粘性砂質土層。

53号柱穴 SP1053（第12図）

N19グリッドにて検出。長軸0.2m、短軸0.18m、深度12cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/4）粘性砂質土層。

54号柱穴 SP1054（第12図）

N19グリッドにて検出。長軸0.38m、短軸0.36m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。

55号柱穴 SP1055（第12、14図）

N19グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.24m、深度23cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。小礫を含む。

14-1は覆土上層より出土した陶器の小型鉢である。口径は10cmを測り、直線上に開く体部を有する。

56号柱穴 SP1056（第12図）

N19グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.19m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。小礫を含む。

1号溝状遺構 SD1001（第15～17図）

N17グリッドにて検出。検出長4.7m、検出幅1.7m、深度32cmを測り、断面形態は浅い隅丸逆台形を呈し、南北方向に延びる溝状遺構である。遺構覆土は、極小細砂を多く含む黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層や、粗砂を含む黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層である。

17-1は鉄製釘である。全長5.4cm、重量8.48gを測り、頭部形状は方形を、脚部断面は矩形を呈する。年代は中世後半～近世にかけてと推定される。

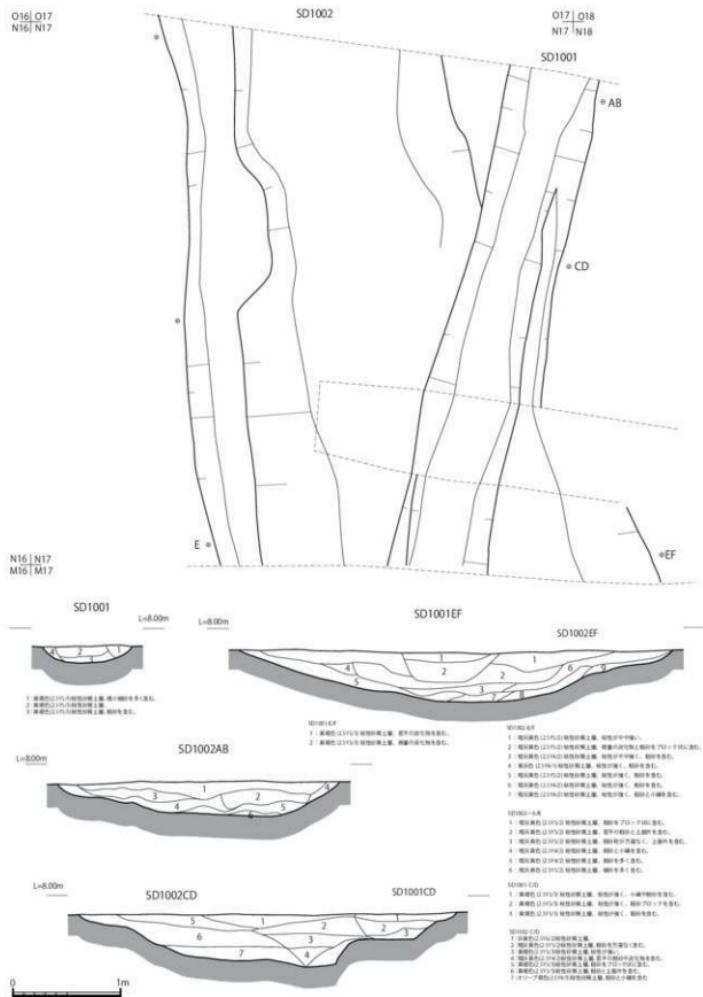


第14図 SP1055出土遺物図

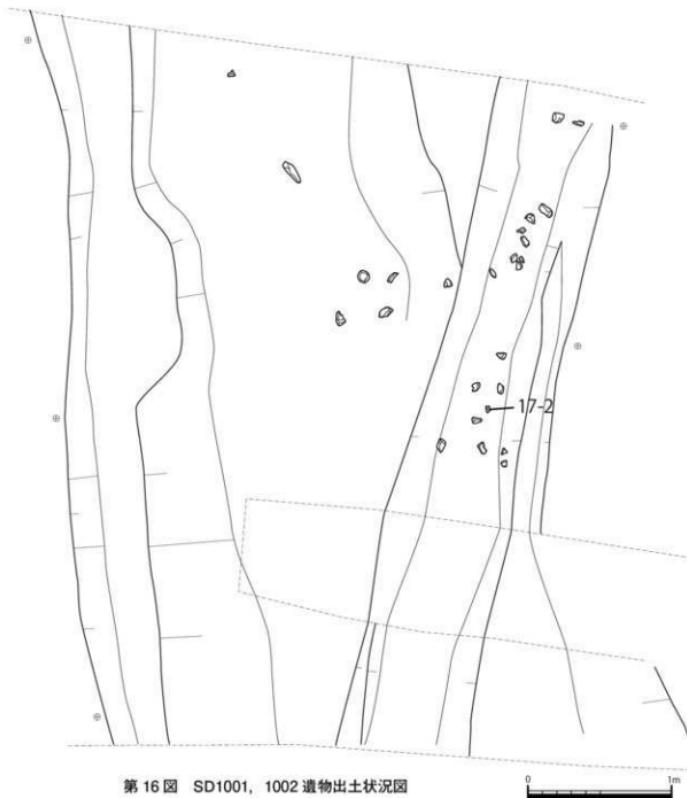
2号溝状遺構 SD1002（第15～17図）

N17、N18グリッドにて検出。検出長4.92m、検出幅4.44m。深度cmを測り、断面形態は舟底形を呈し、南北方向に延びる溝状遺構である。遺構覆土は、上層は粗砂をブロック状に含む暗灰黄色粘性砂質土層、中層は若干の粗砂と土器片を含む暗灰黄色粘性砂質土層、下層は粗砂と小礫を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

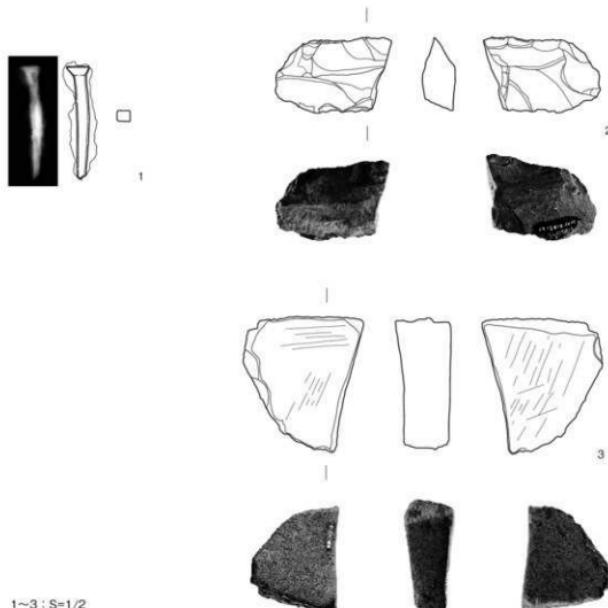
17-2は覆土最下層より出土したサヌカイト製楔形石器である。残存長4.05cm、高2.6cm、厚1.15cmを測る。上端部には階段状剥離が観察される。全体的に風化が進んでいる。本来ならば第2遺構面の遺構もしくは包含層に伴うものである。17-3は覆土最下層より出土した砂岩製砥石である。残存長4.65cm、厚1.9cm、重量46.67gを測る。主要な紙面は表（A）裏（B）面で、A面では左右方向と上下方向の擦痕が観察される。B面では右上方から左下方への擦痕が観察される。上部側面にも擦痕が観察されることから砥面として使用されていたと考えられる。弥生時代に属する紙石で、本来ならば第2遺構面の遺構もしくは包含層に伴うものである。



第15図 SD1001, 1002遺構図



P.L. 18 SD1001 出土状況



第17図 SD1001, 1002出土遺物図

3号溝状遺構 SD1003 (第18~20図)

O10グリッドにて検出。検出長1.92m、検出幅1.42m、深度24cmを測り、断面形態は浅い円弧を呈し、南北方向に延びる溝状遺構である。遺構覆土は、粘性が強く、炭化物を含む黄褐色粘性砂質土層である。

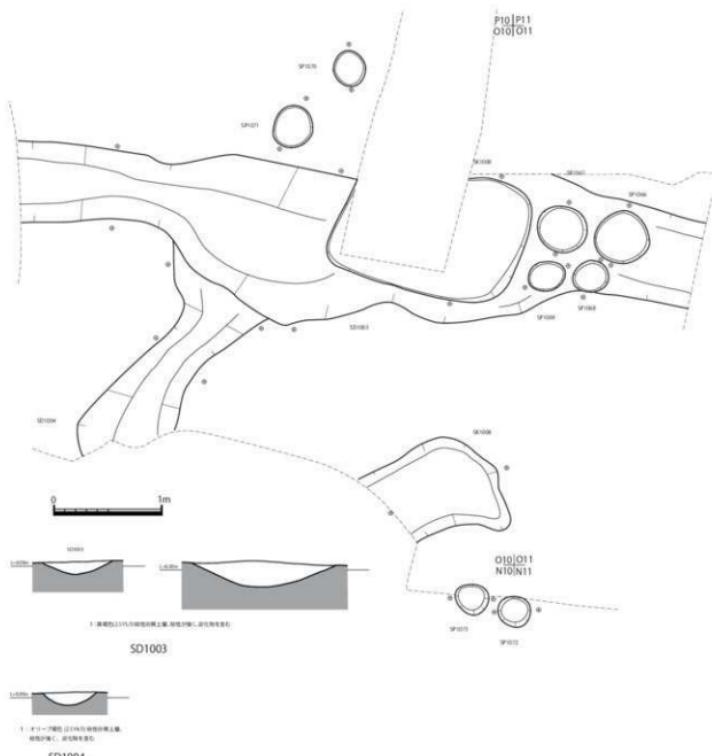
20-1は覆土中層中より出土した土師質土器杯である。復元口径11.7cm、器高3.75cmを測る。直線上に立ち上がる体部を有する。外面のハケはイタナデによるものと推定され、胎土中の赤色斑粒が多いのが特徴である。13世紀~14世紀の年代を与えることができる。

20-2は覆土上層中より出土した陶器甕の体部である。外面にはハケが施されている。備前焼と推定され、14世紀代の年代を与えることができる。

20-3は覆土上層中より出土した陶器甕の体部である。内外面共にハケが施されている。備前焼であり、14世紀~15世紀の年代を与えることができる。

20-4は覆土下層中より出土した恵器甕の体部である。外面には格子目タタキが施されている。6世紀後半の年代を与えることができる。

20-5は覆土上層中より出土した陶器甕の体部である。内外面共にナデが施されている。備前焼で



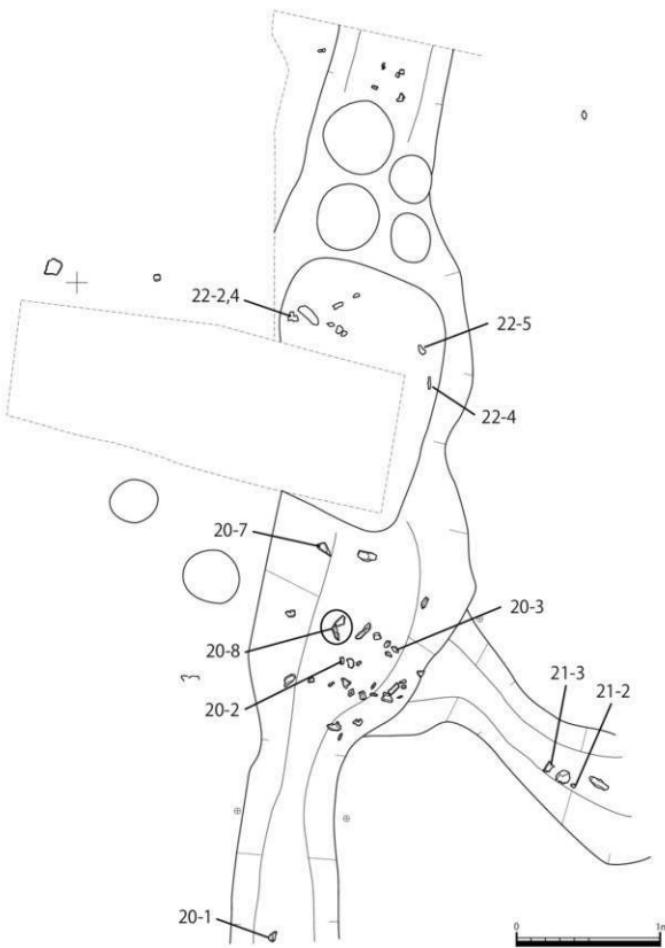
第18図 SD1003, 1004 及び周辺 SK, SP 遺構図



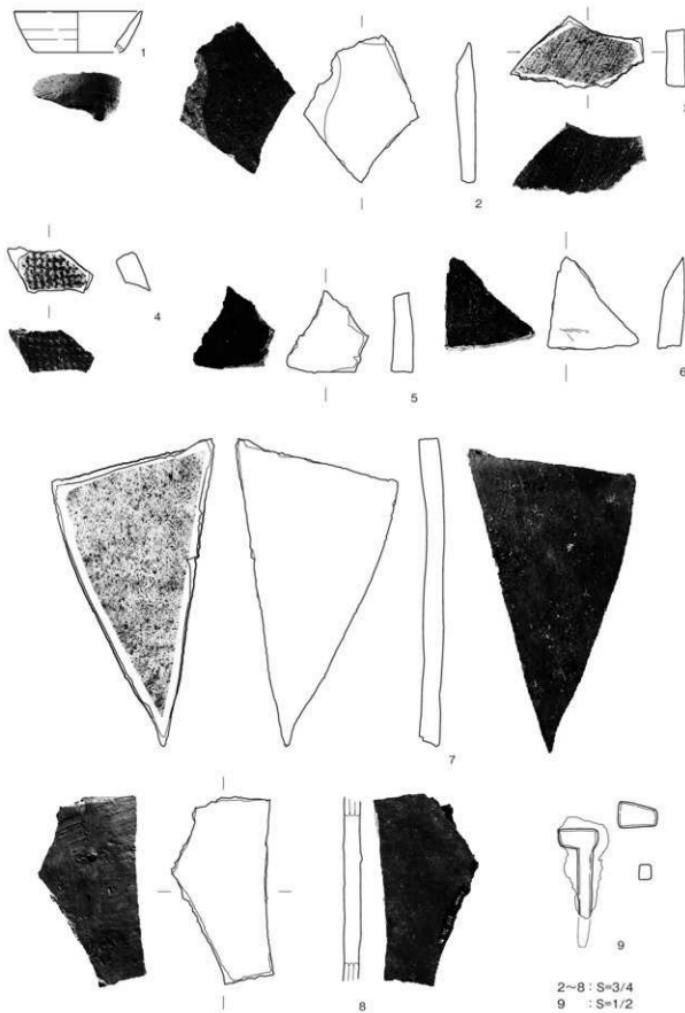
P.L. 19 SK1008 出土状況 1



P.L. 20 SK1008 出土状況 2



第19図 SD1003, 1004 遺物出土状況図



第20図 SD1003出土遺物図

2~8 : S=3/4
9 : S=1/2

あり、14世紀～15世紀の年代を与えることができる。20-6は覆土上層中より出土した陶器壺の体部である。内外面共にナデが施されている。備前焼であり、14世紀～15世紀の年代を与えることができる。

20-8は覆土上層中より出土した陶器壺の体部である。内外面共にイタナデが施されている。17世紀代の年代を与えることができる。

20-9は鉄製の釘である。全長3.5cm、重量8gを測り、頭部形状は台形を、脚部断面は方形を呈する。年代は中世後半～近世にかけてと推定される。

4号溝状遺構 SD1004（第18～21図）

O10グリッドにて検出。検出長1.56m、検出幅0.9m。深度0.12cmを測り、断面形態は浅い円弧を呈し、から方向に延びる溝状遺構である。遺構覆土は、粘性が強く、炭化物を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

21-1は覆土中層中より出土した瓦器椀口縁部である。復元口径は11.6cmを測る。13世紀の年代を与えることができる。

21-2は覆土中層中より出土した土師質土器杯の底部である。内外面共に摩滅のため調整は不明瞭である。底部はナデ整形である。

21-3は覆土上層中より出土した中世須恵器壺の体部である。内外面共にハケが施されている。と東播系と推定され、13世紀の年代を与えることができる。

7号土坑 SK1007

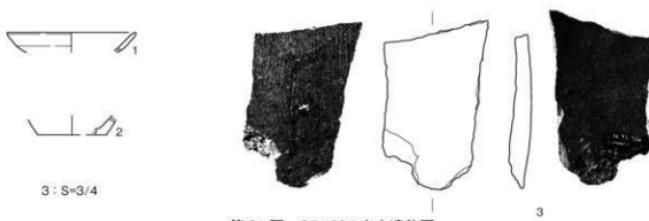
N18,N19グリッドにて検出。長軸2.34m、検出短軸0.82m、深度14cmを測る土坑である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。粘性が強い。

8号土坑 SK1008（第22, 23図）

O10,O11グリッドにて検出。長軸1.68m、短軸1.2m、深度18cmを測る土坑である。遺構覆土は、オリーブ褐色（25Y4/3）粘性砂質土層。砂性が強く、炭化粒を含む。

22-1は中世須恵器捏ね鉢の体部である。東播系である。13世紀の年代を与えることができる。

22-2は陶器壺である。外面には板ナデが、内面にはハケが施されている。備前焼と推定され、14



第21図 SD1004出土遺物図

世紀～15世紀の年代を与えることができる。

22-3は陶器甕である。外面には板ナデが、内面にはハケが施されている。備前焼と推定され、14世紀～15世紀の年代を与えることができる。

22-4は陶器甕である。外面には板ナデが、内面にはハケが施されている。備前焼と推定され、14世紀～15世紀の年代を与えることができる。

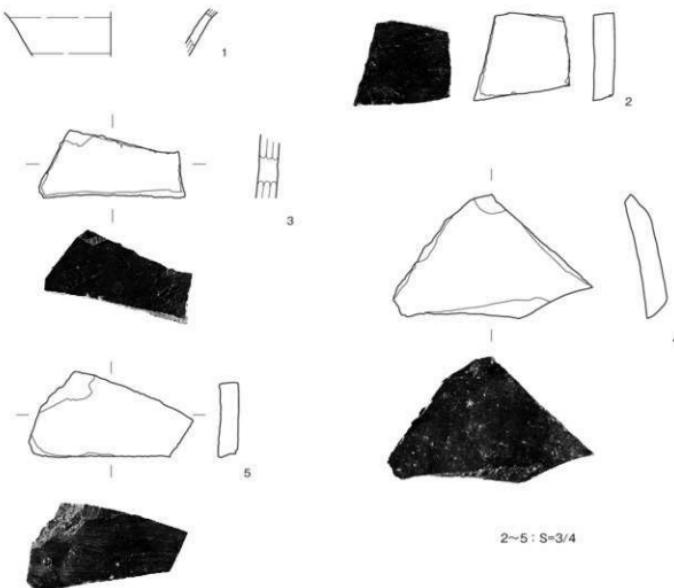
22-5は陶器甕の体部である。外面にはイタナデが、内面にはハケが施されている。

9号土坑 SK1009 (第23図)

O10グリッドにて検出。検出長軸0.1m、短軸1.06m、深度6cmを測る土坑である。遺構覆土は、黄褐色(25Y5/4)粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒を含む。

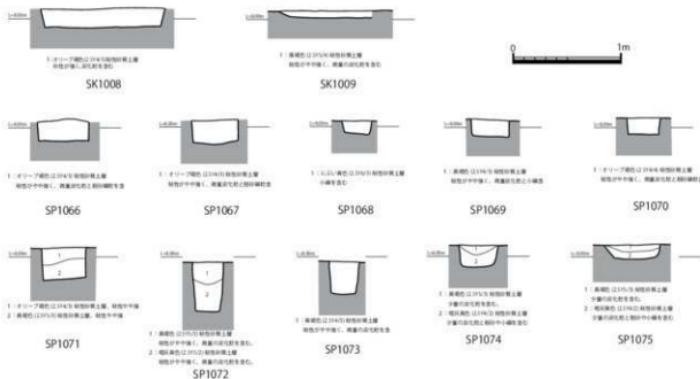
10号土坑 SK1010 (第24図)

N9、N10グリッドにて検出。検出長軸1.02m、短軸0.6m、深度16cmを測る土坑である。遺構覆土は黄褐色(25Y5/3)粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒を含む。

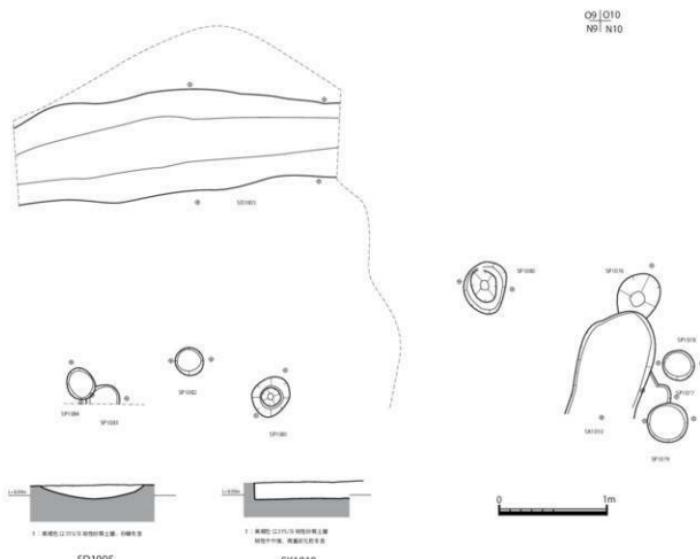


2~5: S=3/4

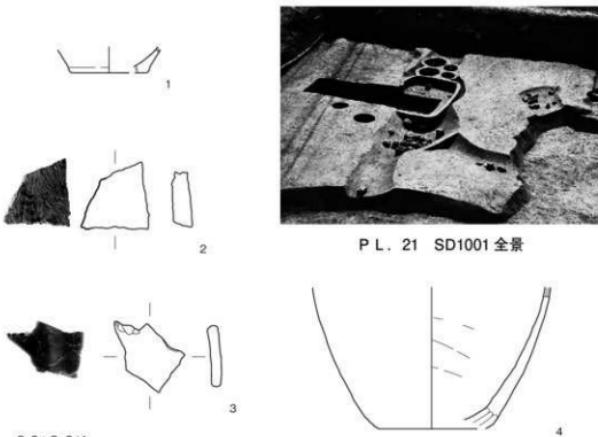
第22図 SK1008出土遺物図



第23図 第1遺構面SK, SP遺構構図(3)



第24図 SD1005及び周辺SK, SP遺構構図



第 25 図 SD1005 出土遺物図

66 号柱穴 SP1066 (第 23 図)

O11 グリッドにて検出。長軸 0.5 m、短軸 0.48 m、深度 20cm を測る柱穴である。遺構覆土は、オリーブ褐色 (25Y4/3) 粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒と粗砂礫粒を含む。

67 号柱穴 SP1067 (第 23 図)

O11 グリッドにて検出。長軸 0.46 m、短軸 0.44 m、深度 22cm を測る柱穴である。遺構覆土は、オリーブ褐色 (25Y4/3) 粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒と粗砂礫粒を含む。

68 号柱穴 SP1068 (第 23 図)

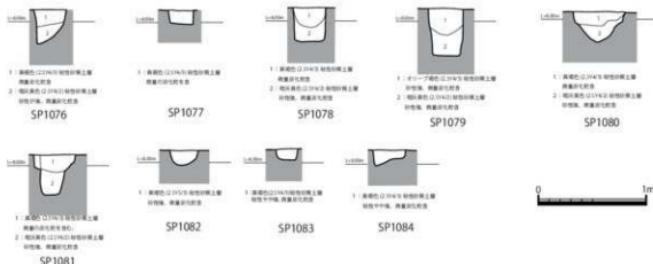
O11 グリッドにて検出。長軸 0.32 m、短軸 0.3 m、深度 12cm を測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色 (25Y6/3) 粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒と小礫を含む。

69 号柱穴 SP1069 (第 23 図)

O11 グリッドにて検出。長軸 0.36 m、短軸 0.28 m、深度 15cm を測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色 (25Y4/3) 粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒と小礫を含む。

70 号柱穴 SP1070 (第 23 図)

P70 グリッドにて検出。長軸 0.34 m、短軸 0.3 m、深度 16cm を測る柱穴である。遺構覆土は、オリーブ褐色 (25Y4/4) 粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒と粗砂礫粒を含む。



第26図 第1構造面 SK, SP 構造図 (4)

71号柱穴 SP1071 (第23図)

O10 グリッドにて検出。長軸 0.38 m、短軸 0.36 m、深度 30cm を測る柱穴である。遺構覆土は、1 層はオリーブ褐色 (25Y4/3) 粘性砂質土層。粘性がやや強い。2 層は黄褐色 (25Y5/3) 粘性砂質土層。粘性がやや強い。

72号柱穴 SP1072 (第23図)

N10, N11 グリッドにて検出。長軸 0.3 m、短軸 0.28 m、深度 46 cm を測る柱穴である。構造覆土は、1 層は黄褐色 (2.5Y5/3) 粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒を含む。2 層は暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒を含む。

72 吳桂安 SP1072 (第 22 圖)

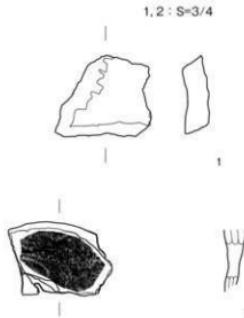
N10 グリッドにて検出。長軸 0.32 m、短軸 0.28 m、深度 30cm を測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25YR 4/2）、粘性砂質土層、粘土質砂質土層、微量の炭化物を含む。

74 号柱 定 SB1074 (第 23 圖)

N10グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.3m、深度20cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層は黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。少量の炭化粒を含む。2層は暗灰黄色（25Y4/2）粘性砂質土層。小量の炭化粒と粗砂や小礫を含む。

75 條柱穴 SB1075 (第 22 圖)

N10グリッドにて検出。長軸0.54m、短軸0.34m、深度12cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層は黄褐色（2.5Y5/3）粘性砂質土層。少量の炭化粒を含む、2層は暗灰黄色（2.5Y4/2）粘性砂質土層。小量の炭化粒と粗砂を含む。



第27図 SP1080 出土遺物図

5号溝状遺構 SD1005 (第24, 25図)

N8, N9グリッドにて検出。検出長0.3m、検出幅1.52m。深度12cmを測り、断面形態は浅い円弧を呈し、東西方向に延びる溝状遺構である。遺構覆土は、砂礫を含む黄褐色(25Y5/3)粘性砂質土層である。

25-1は覆土中層より出土した土師質土器杯である。底径は6.8cmを測る。内面はナデガ、体部下半外面には回転ナデガ、底部は回転糸切りが施されている。胎土中には結晶片岩粒が含まれている。13世紀代の年代を与えることができる。

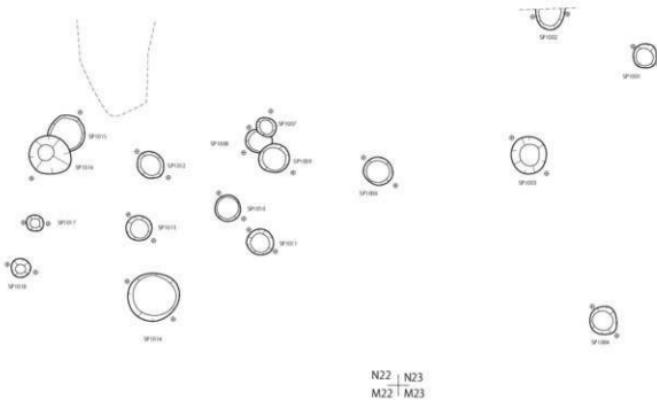
25-2は覆土上層より出土した青磁碗の体部である。龍泉窯系と推定され、13世紀～14世紀の年代を与えることができる。

25-3は覆土上層より出土した陶器壺の体部である。外面にはネコガキが施されている。備前産と推定されるが、やや焼成が不良である。14～15世紀の年代を与えることができる。

25-4は弥生土器壺の体部下半である。第2包含層に伴う遺物もしくは、埋没過程において紛れ込んだものと推定される。

76号柱穴 SP1076 (第26図)

N10グリッドにて検出。長軸0.38m、短軸0.38m、深度32cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層は黄褐色(25Y4/3)粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。2層は暗灰黄色(25Y4/2)粘性砂質土層。砂性が強く、微量の炭化粒を含む。



第28図 第1遺構面 SK, SP 遺構図 (5)

77号柱穴 SP1077（第26図）

N10グリッドにて検出。検出長軸0.48m、検出短軸0.28m、深度12cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層は黄褐色（25Y4/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。2層は暗灰黄色（25Y4/2）粘性砂質土層。砂性が強く、微量の炭化粒を含む。

78号柱穴 SP1078（第26図）

N10グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.28m、深度31cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層は黄褐色（25Y4/3）粘性砂質土層。少量の炭化粒を含む。2層は暗灰黄色（25Y4/2）粘性砂質土層。少量の炭化粒と粗砂や小礫を含む。

79号柱穴 SP1079（第26図）

N10グリッドにて検出。長軸0.38m、短軸0.38m、深度44cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層はオリーブ褐色（25Y4/3）粘性砂質土層。砂性が強く、微量の炭化粒を含む。2層は暗灰黄色（25Y4/2）粘性砂質土層。砂性が強く、微量の炭化粒を含む。

80号柱穴 SP1080（第26図）

N9グリッドにて検出。長軸0.48m、短軸0.38m、深度28cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層は黄褐色（25Y4/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。2層は暗灰黄色（25Y4/2）粘性砂質土層。砂性が強く、微量の炭化粒を含む。

27-1は結晶片岩剥片である。器種等は不明である。27-2は土師質土器杯の底部である。底面は回転糸切りである。13世紀～14世紀の年代を与えることができる。

81号柱穴 SP1081（第26図）

N9グリッドにて検出。長軸0.38m、短軸0.32m、深度37cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層は黄褐色（25Y4/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。2層は暗灰黄色（25Y4/2）粘性砂質土層。砂性が強く、微量の炭化粒を含む。

82号柱穴 SP1082（第26図）

N9グリッドにて検出。長軸0.26m、短軸0.26m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。砂性が強く、微量の炭化粒を含む。

83号柱穴 SP1083（第26図）

N9グリッドにて検出。検出長軸0.32m、検出短軸0.2m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は黄褐色（25Y4/3）粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒を含む。

84号柱穴 SP1084（第26図）

N9グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.24m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は黄褐色（25Y4/3）粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒を含む。

1号柱穴 SP1001 (第 28, 29 図)

N23 グリッドにて検出。長軸 0.24 m、短軸 0.24 m、深度 32cm を測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色 (25Y6/2) 粘性砂質土層。粘性は弱い。2 層覆土は不明。

2号柱穴 SP1002 (第 28, 29 図)

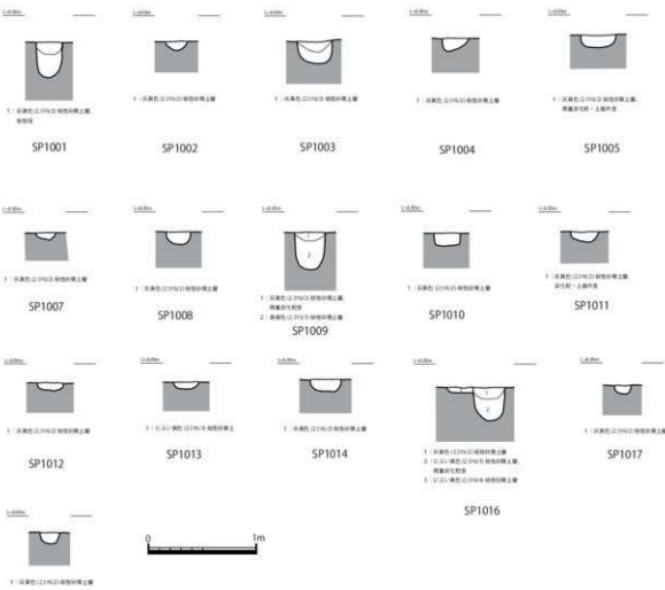
N23 グリッドにて検出。長軸 0.16 m、検出短軸 0.2 m、深度 8cm を測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色 (25Y6/2) 粘性砂質土層である。

3号柱穴 SP1003 (第 28, 29 図)

N23 グリッドにて検出。長軸 0.36 m、短軸 0.34 m、深度 20cm を測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色 (25Y6/2) 粘性砂質土層である。2 層覆土は不明。

4号柱穴 SP1004 (第 28, 29 図)

N23 グリッドにて検出。長軸 0.18 m、短軸 0.18 m、深度 12cm を測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色 (25Y6/2) 粘性砂質土層である。



第 29 図 第 1 遺構面 SK, SP 遺構図 (6)

5号柱穴 SP1005(第28、29図)

M22 グリッドにて検出。長軸 0.38 m、検出短軸 0.12 m、深度 10cm を測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色（25Y6/2）粘性砂質土層。微量の炭化粒と土器片を含む。

6号柱穴 SP1006

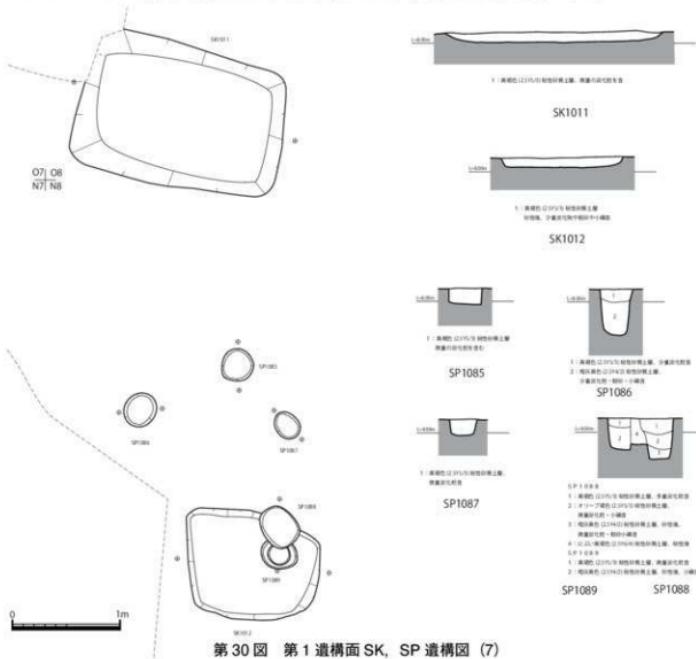
N23グリッドにて検出。長軸0.16m、短軸0.16m、深度8cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色（25Y6/2）粘性砂質土層である。

7号柱穴 SP1007(第28、29図)

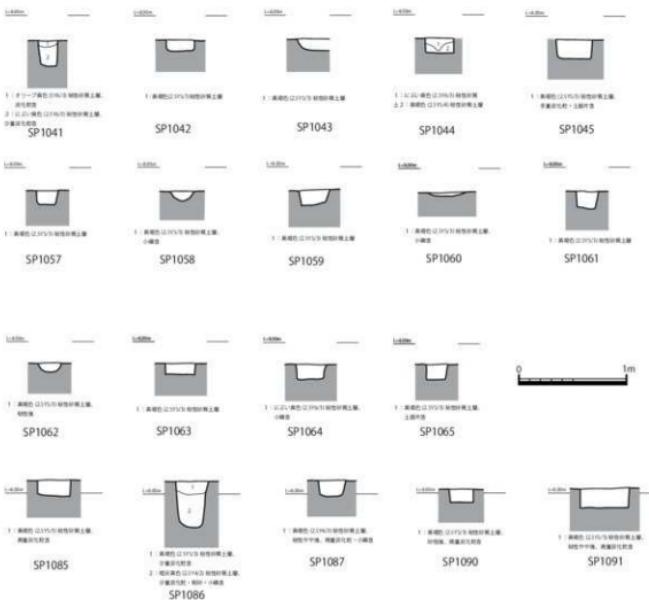
N22 グリッドにて検出。長軸 0.2 m、短軸 0.18 m、深度 6cm を測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色(25Y6/2) 粘性砂質土層である。

8号柱穴 SP1008 (第28、29図)

N22 グリッドにて検出。長軸 0.26 m、検出短軸 0.18 m、深度 12 cm を測る柱穴である。



第30図 第1構造面 SK, SP構造図(7)



第31図 第1遺構面SK, SP遺構図(8)

9号柱穴 SP1009 (第28, 29図)

N22グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.18m、深度34cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色(25Y6/2)粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

10号柱穴 SP1010 (第28, 29図)

N22グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.24m、深度12cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色(25Y6/2)粘性砂質土層である。

11号柱穴 SP1011 (第28, 29図)

N22グリッドにて検出。長軸0.16m、短軸0.14m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色(25Y6/2)粘性砂質土層。炭化粒と土器片を含む。灰黄色(25Y6/2)粘性砂質土層である。

12号柱穴 SP1012 (第28, 29図)

N22グリッドにて検出。長軸0.28m、短軸0.14m、深度8cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色(25Y6/2)粘性砂質土層である。

13号柱穴 SP1013（第28、29図）

N22グリッドにて検出。長軸0.16m、短軸0.14m、深度6cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層である。

14号柱穴 SP1014（第28、29図）

N22グリッドにて検出。長軸0.48m、短軸0.44m、深度12cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色（25Y6/2）粘性砂質土層である。

15号柱穴 SP1015（第28、29図）

N22グリッドにて検出。長軸0.32m、検出短軸0.26m、深度6cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色（25Y6/2）粘性砂質土層。炭化物を含む。

16号柱穴 SP1016（第28、29図）

N22グリッドにて検出。長軸0.42m、短軸0.36m、深度30cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

17号柱穴 SP1017（第28、29図）

N22グリッドにて検出。長軸0.16m、短軸0.14m、深度8cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色（25Y6/2）粘性砂質土層である。

18号柱穴 SP1018（第28、29図）

N22グリッドにて検出。長軸0.18m、短軸0.18m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は、灰黄色（25Y6/2）粘性砂質土層である。

11号土坑 SK1011（第30図）

N8、O8グリッドにて検出。検出長軸1.98m、短軸2.1m、深度10cmを測る土坑である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

12号土坑 SK1012（第30図）

N8グリッドにて検出。長軸1.4m、短軸0.86m、深度8cmを測る土坑である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。砂性が強く、少量の炭化物や粗砂や小礫を含む。

85号柱穴 SP1085（第30図）

N8グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.3m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

86号柱穴 SP1086（第30図）

N8グリッドにて検出。長軸0.33m、短軸0.3m、深度42cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層は

黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。2層は暗灰黄色（25Y4/2）粘性砂質土層。少量の炭化粒と粗砂や小礫を含む。

87号柱穴 SP1087（第30図）

N8グリッドにて検出。長軸0.28m、短軸0.22m、深度15cmを測る柱穴である。遺構覆土は黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。微量の炭化粒を含む。

41号柱穴 SP1041（第31図）

N20グリッドにて検出。長軸0.2m、短軸0.19m、深度23cmを測る柱穴である。遺構覆土は、オリーブ黄色（5Y6/3）粘性砂質土層。炭化粒を含む。

42号柱穴 SP1042（第31図）

N20グリッドにて検出。長軸0.26m、短軸0.26m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層である。

43号柱穴 SP1043（第31図）

N20グリッドにて検出。検出長軸0.3m、短軸0.32m、深度11cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層である。

44号柱穴 SP1044（第31図）

N20グリッドにて検出。長軸0.28m、短軸0.26m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層である。

45号柱穴 SP1045（第31図）

N20グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.32m、深度18cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。多量の炭化粒と土器片を含む。

57号柱穴 SP1057（第31図）

N19グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.22m、深度12cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層である。

58号柱穴 SP1058（第31図）

N19グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.2m、深度9cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。小礫を含む。

59号柱穴 SP1059（第31図）

N19グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.26m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。

60号柱穴 SP1060（第31図）

N19, N20グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.3m、深度3cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。小蝶を含む。

61号柱穴 SP1061（第31図）

N18グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.24m、深度16cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層である。

62号柱穴 SP1062（第31, 32図）

N18グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.2m、深度8cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層である。

32-1は、渡来銭である北宋錢の元豊通宝（篆書）である。元豊通宝は裏面を合わせて2枚重なり固着した状況で出土した。外縁部を削られており、法量が小型のタイプである。「元豊」は神宗の治世に用いられた年号であり1078～1085年に該当する。

63号柱穴 SP1063（第31図）

N16グリッドにて検出。長軸0.28m、短軸0.28m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層である。

64号柱穴 SP1064（第31図）

N16グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.27m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は、にぶい黄色（25Y6/3）粘性砂質土層で小蝶を含む。

65号柱穴 SP1065（第31図）

N16グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.22m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は、黄褐色（25Y5/3）粘性砂質土層。土器片を含む。



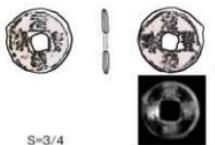
P.L. 22 第1遺構面全景1



P.L. 23 第1遺構面全景2

88号柱穴 SP1085 (第31図)

N8グリッドにて検出。長軸0.4m、短軸0.3m、深度27cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層は黄褐色(2.5Y5/3)粘性砂質土層。多量の炭化粒を含む。2層はオリーブ褐色(2.5Y5/3)粘性砂質土層。微量の炭化粒と小礫を含む、3層は暗灰黄色(2.5Y4/2)粘性砂質土層。砂性が強く、微量の炭化粒と粗砂や小礫を含む。



第32図 SP1065出土遺物図

89号柱穴 SP1087 (第31図)

N8グリッドにて検出。長軸0.36m、検出短軸0.24m、深度28cmを測る柱穴である。遺構覆土は、1層は黄褐色(2.5Y5/3)粘性砂質土層で、微量の炭化粒を含む。2層は暗灰黄色(2.5Y4/2)粘性砂質土層で、砂性が強く、小礫を含む。

90号柱穴 SP1090 (第31図)

P9グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.24m、深度12cmを測る柱穴である。遺構覆土は黄褐色(2.5Y5/3)粘性砂質土層で、砂性が強く微量の炭化粒を含む。

91号柱穴 SP1091 (第31図)

O9、P9グリッドにて検出。長軸0.48m、短軸0.44m、深度18cmを測る柱穴である。遺構覆土は黄褐色(2.5Y5/3)粘性砂質土層。粘性がやや強く、微量の炭化粒を含む。

第1包含層出土遺物 (第33図)

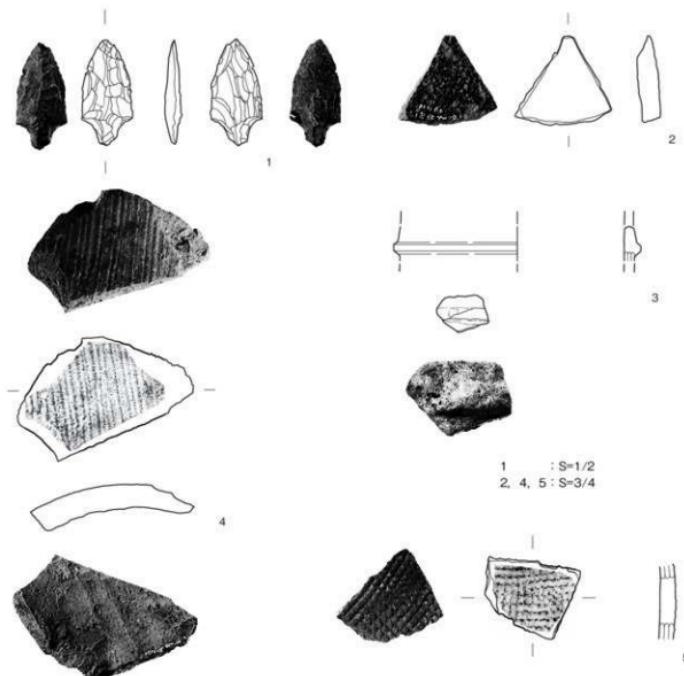
33-1はサヌカイト製石錠である。残存長3.6cm、長さ2.9cmを測る。中型の長三角形を呈する錠身部と凸形呈する茎部で構成される。錠身部厚は0.6cmを測りしっかりした造りである。弥生時代中期と推定される。

33-2は、瓦質土器甕である。内外面共に摩耗のため調整は不明であるが、外面には格子目タタキ痕が、内面には當て具痕をナデ消しの痕跡が観察される。胎土中には雲母片と白色粒が含まれている。十亀産の可能性があり、13世紀後半～14世紀の年代を与えることができる。

33-3は円筒埴輪辺である。復元径は22.8cmを測り、突帯は台形を呈する。突帶上部には円形透孔が観察される。内外面共に摩滅のため調整は不明瞭である。川西編年V期以降の年代を与えることができる。

33-4は、土師質管状土製品である。外面は板状工具による上下方向のナデが、内面にはケズリが施される。推定直径は約13cmに復原される。19世紀以降の年代を与えることができる。

33-5は須恵器甕の体部である。外面には格子目タタキが施されている。6世紀後半の年代を与えることができる。



第33図 第1包含層出土遺物図

(3) 第2遺構面遺構配置 (第34図)

第2遺構面では柱穴群、土坑、溝状遺構、自然流路及び落ち込み状不整形遺構が確認された。自然流路と落ち込み状の不整形遺構は調査区外に展開しており、全形は不明であるが、調査区北を流れていたと推定される多々羅川の旧河道へ流れ込む遺構であったと推定される。自然流路や落ち込み状遺構からは弥生土器がまとめて出土している。自然流路の南側は微高地の高所側に該当し、土坑や柱穴が展開する。堅穴住居等は未検出であり、想定される集落の外縁部に該当する。

(4) 第2遺構面の遺構と遺物

1号流路状遺構 SR2001 (第35図)

検出長36m、検出幅12m、深度20cmを測り、断面形態は緩く傾斜する。南東方向から北西方向に延びる溝状遺構である。遺構覆土は、黄褐色粘性砂質土層である。35-1は土師器杯の底部である。第1遺構面からの混入である。

2号流路状遺構 SR2002 (第36~43図)

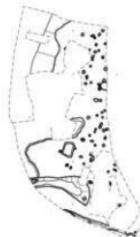
検出長11m、検出幅1,660m、深度cmを測り、断面形態は不整形な逆台形を呈し、南東方向から北西方向に延びる溝状遺構である。遺構覆土上層は、オリーブ褐色粘性砂質土層、中層は暗灰黄色粘性砂質土層、下層は黄褐色粘性砂質土層であり、中下層には粗砂紋を含むことから流水の可能性が想定される。

39-1は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は19.9cmを測る二重口縁壺である。内外面共に摩滅のため調整は不明瞭である。口唇部には円形竹管文が、擬口縁端部にはヘラ押さえによる割み目文が施されている。胎土中には直径2mm以下の細かい結晶片岩粒が含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性があるが、当該地では類例の少ない文様構成である。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

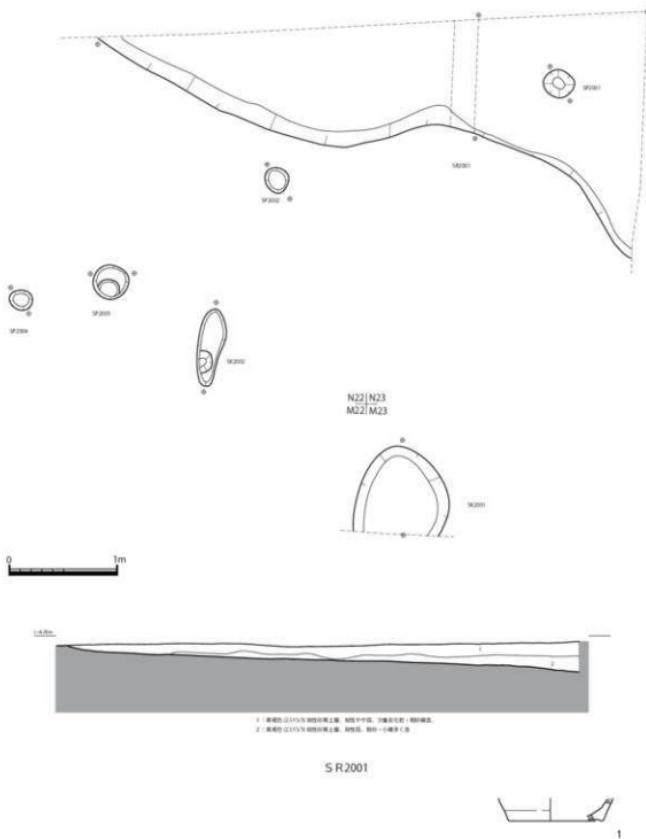
39-2は覆土下層中より出土した弥生土器広口壺の口頭部である。復元口径は18.9cmを測る。口縁部は強いヨコナデにより下方へ垂下する。頭部外面にはハケ施後にイタナデが、内面にはナデが施されている。胎土中には直径2mm程度の極小の結晶片岩粒や雲母片粒をわずかに含み、鮎喰川流域からの搬入品の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

39-3は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は13cmを測る。口縁部には強いヨコナデにより擬四線状のくぼみが施される。頭部外面はタタキ施後にハケが、内面にはユビナデとイタナデが施される。胎土中には直径4mm程度のやや粗い結晶片岩粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

39-4は覆土下層中より出土した弥生土器壺の頭部である。復元頭部径は



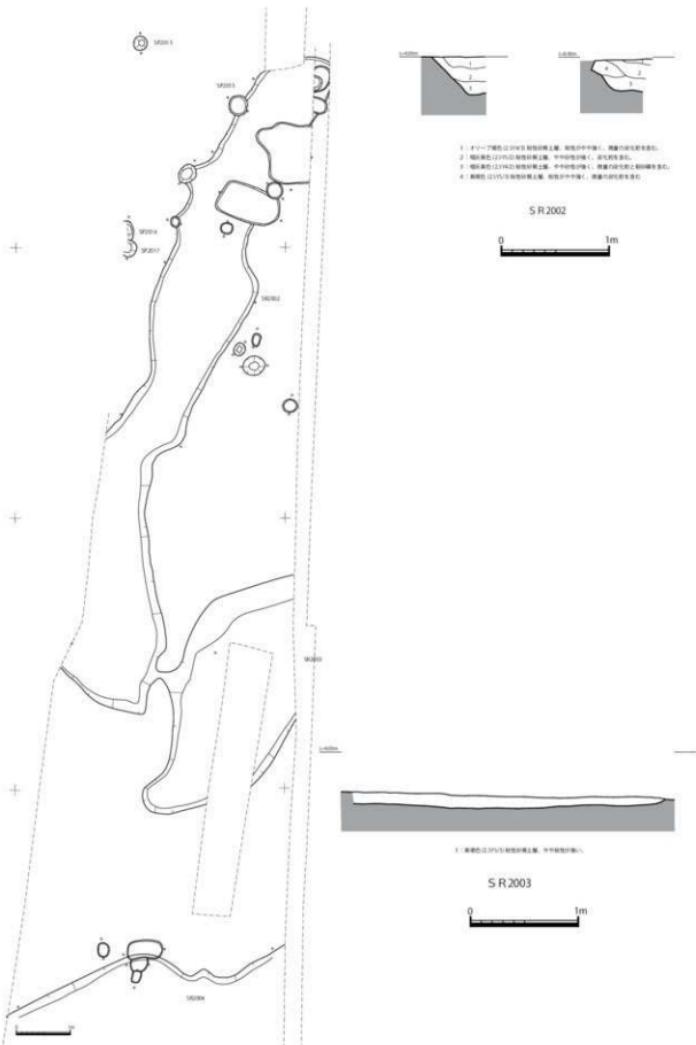
第34図 第2遺構面
遺構配置図



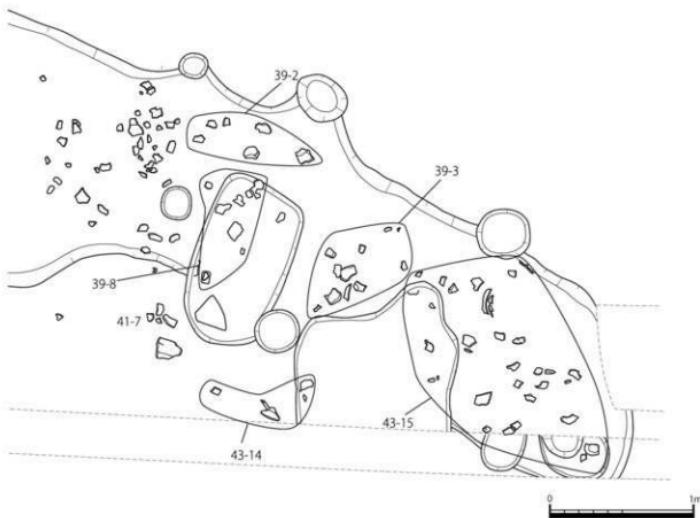
第35図 SR2001 及び周辺 SK, SP 遺構図

11.3cmを測る。外面はヘラミガキが、内面にはハケ施後にナデが施されている。内面のハケ調整は粗く、ヘラナデもしくはヘラケズリに近い。胎土中には直径7mm程度の粗い結晶片岩粒を含む。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

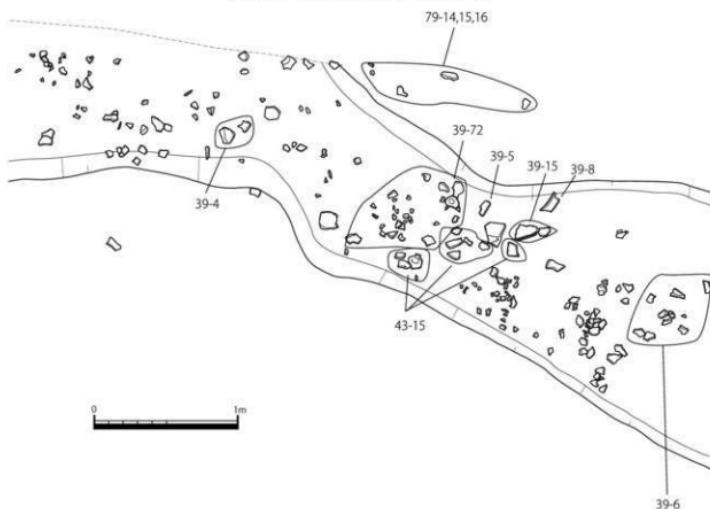
39-5は覆土下層中より出土した弥生土器細首壺の頭部である。復元頭部径は4.3cmを測る。外面にはヘラミガキが、内面には板ナデが施されている。胎土中には直径2mm以下の細かい結晶片岩粒が微量含まれており。



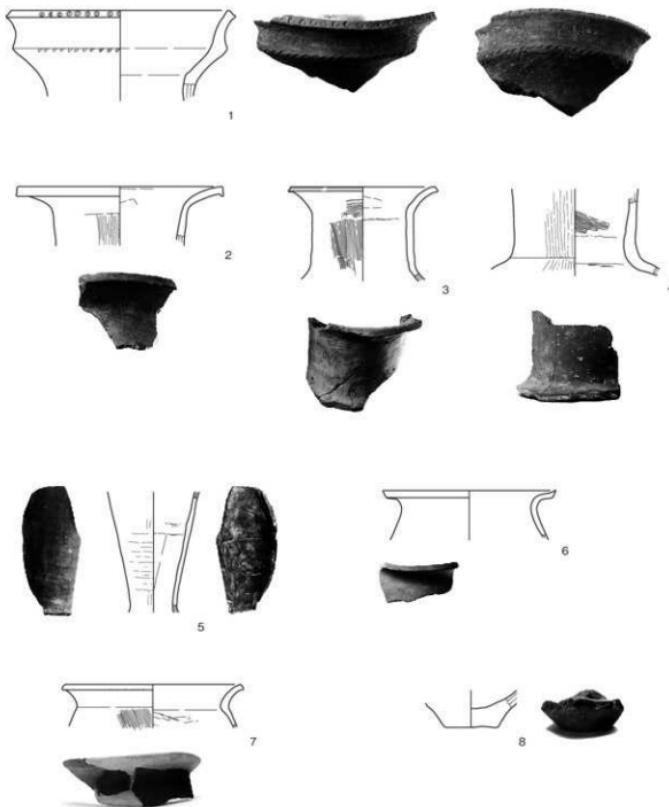
第36図 SR2002, 2003遺構図



第37図 SR2002遺物出土状況図(1)



第38図 SR2002遺物出土状況図(2)

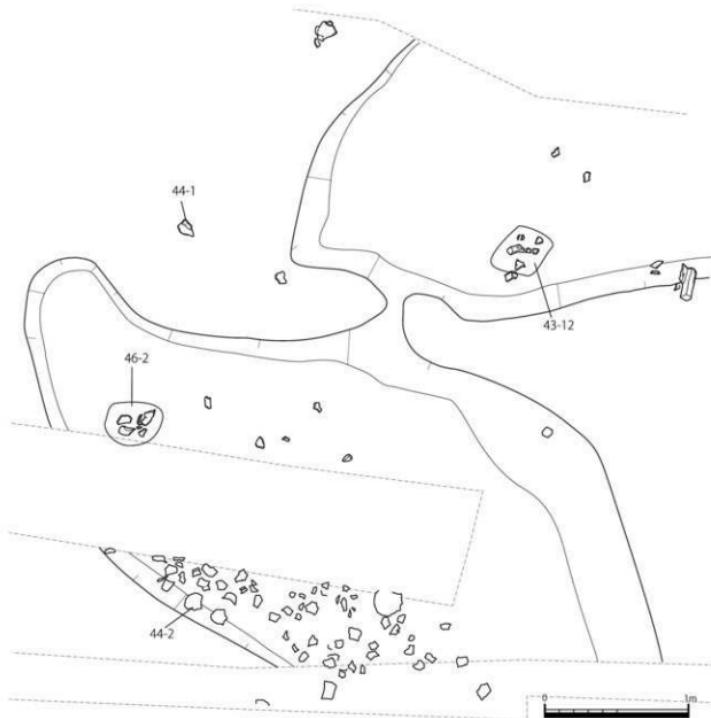


第39図 SR2002出土遺物図(1)

焼成も良好である。點噴川流域からの搬入品である。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

39-6は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は16cmを測る。内外面共に摩滅のため調整は不明瞭である。口唇部は上方へ摘み上げられる。胎土中には直径4mm程度の結晶片岩粒を含む。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

39-7は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は16.2cmを測る。口縁部外面にはハ

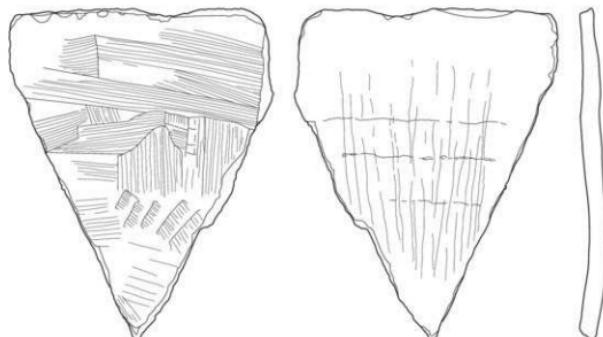


第40図 SR2002遺物出土状況図(3)

ケ施後にヨコナデが、胴部外面にはハケが、胴部内面にはヘラケズリが施されている。口縁端部は強いヨコナデにより下方へ垂下する。胎土中には胎土中には直径2mm以下の細かい結晶片岩粒が微量含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

39-8は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。底径は4.9cmを測り、中型壺の底部と推定される。平底底部の底面にはハケが、内面にはユビナデが施される。胎土中には直径16mm以下の粗い結晶片岩粒や長石粒を多く含むのが特徴である。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

41-9は覆土下層中より出土した弥生土器壺の胴部である。大型壺体部の下半である。外面にはミガキ施後にハケが、内面にハケが施されているが、接合痕も観察される。胎土中には直径3mm程度の結晶片岩粒や雲母片粒を含み、鮎喰川流域からの搬入品の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。



9



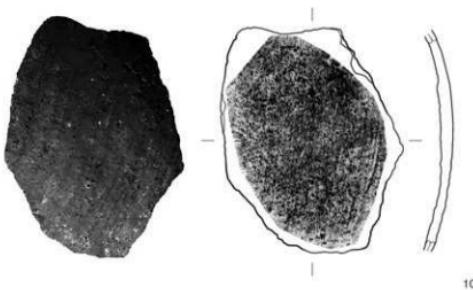
S=3/4

第41図 SR2002出土遺物図（2）

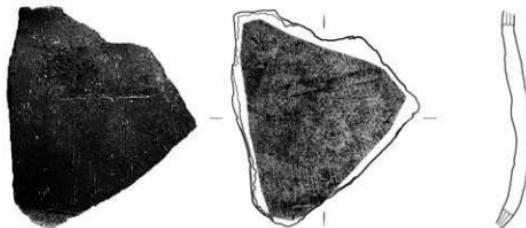
42 - 10は覆土下層中より出土した弥生土器壺の胴部である。外面にはハケ施後にヘラミガキが、内面にはヘラケズリ施後にナデが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小の角閃石粒や金雲母片粒を微量に含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

42 - 11は覆土下層中より出土した弥生土器壺の体部である。外面にはハケ施後にナデが、内面にはユビオサエ施後にヘラケズリが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい角閃石粒や金雲母片粒を含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

43 - 12は覆土下層中より出土した弥生土器高杯の脚部である。外面には脚端部まで丁寧なミガキが、内面



10



11

第42図 SR2002出土遺物図(3)

S=3/4

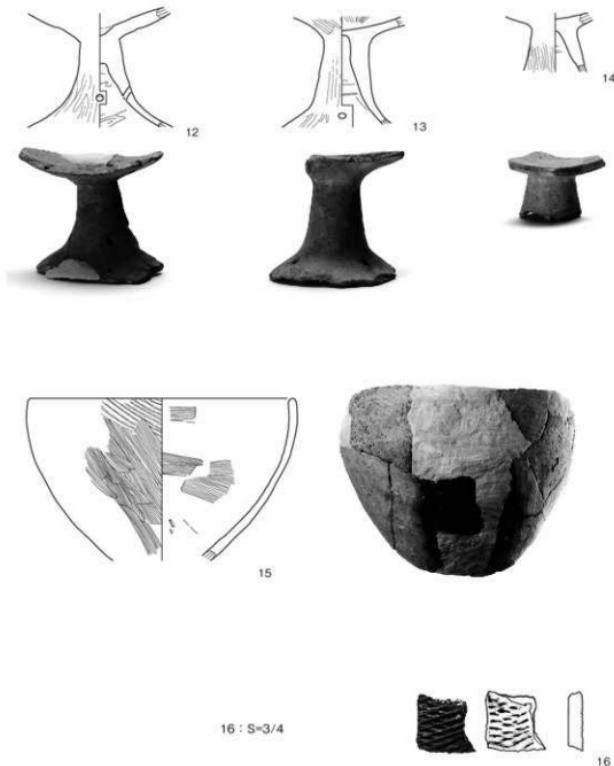
にはケズリが、端部付近にはミガキが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒が微量含まれている。鮎喰川流域からの搬入品の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

43-13は覆土下層中より出土した弥生土器高杯の脚部である。杯部内外面には丁寧なミガキが、脚部外面にはミガキが、内面にはケズリが施されている。胎土中には直径7mm程度の粗い結晶片岩粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

43-14は覆土下層中より出土した弥生土器高杯の脚部である。杯部内外面には丁寧なミガキが、脚部外面にはミガキが、内面にはケズリが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒が微量含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

43-15は覆土下層中より出土した弥生土器鉢である。復元口径24.4cm、器高15cmを測る大型鉢である。底部は欠損するが、平底もしくは縁い丸底と推定される。口縁部外面には粗いタタキ痕が残るが、体部外面にはタタキ施後にハケが、内面にはハケが施されている。胎土中には胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒が微量含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

43-16は覆土上層より出土した須恵器甕の胴部片である。外面には平行タタキが、内面はナデケシが施さ



第43図 SR2002出土遺物図(4)

れている。6世紀後半の年代を与えることができる。埋没後に第2包含層の堆積過程において流れ込んだものと推定される。

3号流路状遺構 SR2003(第36、44図)

SR2002に隣接する落ち込みである。検出長3.9m、検出幅25m、深度20cmを測り、緩い落ち込みである。造形覆土は黄褐色粘性砂質土層である。

44-1は覆土下層中より出土した弥生土器有孔鉢である。孔径は1.1cmを測り、単孔である。体部外面はタキ施後にナデが、体部内面はイタナデが施されている。胎土中には3mm程度の結晶片岩粒や雲母片粒が含まれる。

れている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

44-2は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。底径は5cmを測り、平底底部である。胴部との境は丸みを持ち、やや丸底化の傾向が認められる。底面にはハケが、外面はタタキ施後にイタナデが、内面はケズリが施されている。胎土中には3mm以下の角閃石と結晶片岩粒が含まれており、類例の少ない胎土である。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。



P.L. 24 第2遺構面 SR 出土状況 1

4号流路状遺構 SR2004（第36、45～48図）

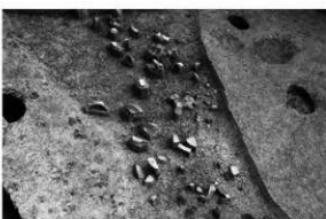
検出長4.5m、検出幅4.6m。深度30cmを測り、断面形態は緩い逆台形を底を呈し、南から北方向に広がる落ち込み状遺構である。遺構覆土は黄褐色粘性砂質土層である。

46-1は覆土下層より出土した弥生土器広口壺の口頭部である。頭部外面にはハケが、口縁部外面にはハケ施後にイタナデが、頭部内面にはイタナデ施後にユビナデが、口縁部内面にはハケが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鶴喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

46-2は覆土下層中より出土した弥生土器壺の頭部である。胴部外面二は丁寧なイタナデが、内面にはユビオサエ施後にナデが施されているが、接合痕が残る。胎土中には3mm以下の結晶片岩粒がわずかに含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

46-3は覆土下層中より出土した弥生土器壺底部である。47-12と同一個体の可能性がある。底部は平底であるが、胴部との境にはやや丸みを有する。底部外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鶴喰川流域からの搬入品である。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

46-4は覆土下層より出土した弥生土器壺の底部である。やや凹底の傾向がある。外面にはハケが、内面



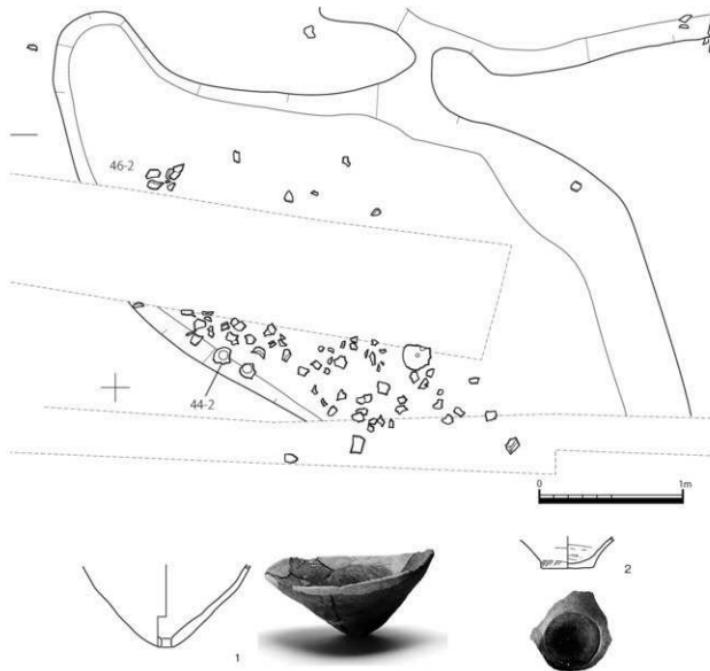
P.L. 25 第2遺構面 SR 出土状況 2



P.L. 26 第2遺構面 SR 出土状況 3



P.L. 27 第2遺構面 SR 出土状況 4



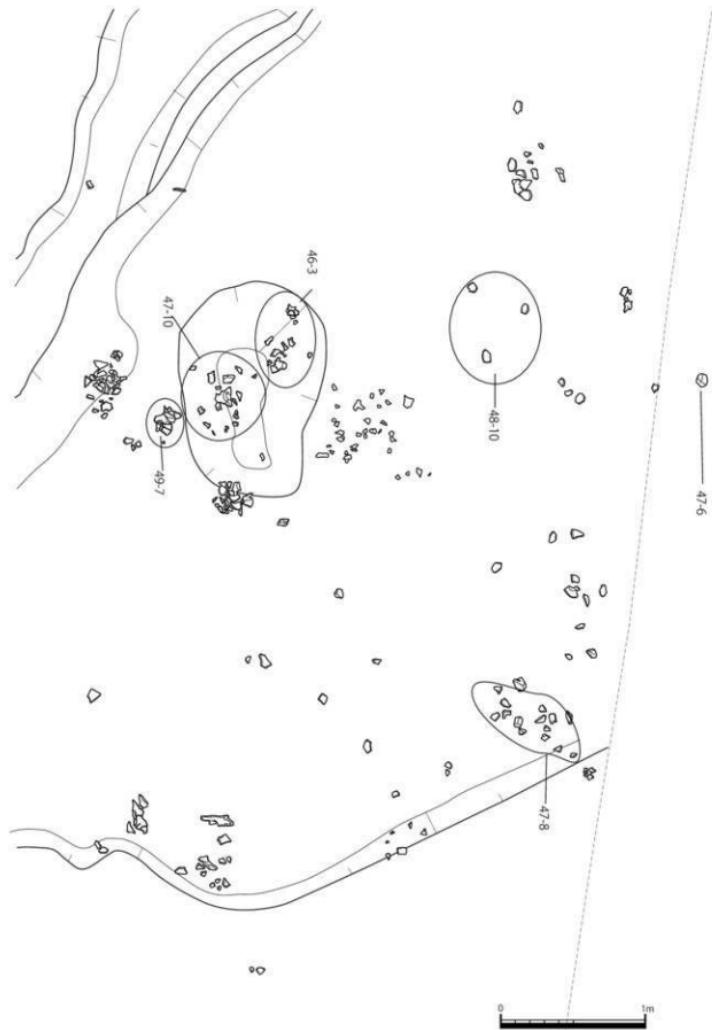
第44図 SR2003遺物出土状況図及び出土遺物図

にはケズリが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

46-5は覆土下層より出土した弥生土器壺の底部である。やや凹み底の傾向がある。底部外面には細かいハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

47-6は覆土下層より出土した弥生土器壺である。器高26cm、口径14.0cm、胴部最大径23cm、底径5.2cmを測る。底部外面にはハケが、底部内面にはユビオサエ施後にケズリが施されている。胴部外面にはハケ施後にナデ瓦、胴部内面にはユビオサエ施後にヘラケズリが施され、上半部にはユビオサエが明瞭に残る。口縁部外面にはユビナデが、口縁部内面にはハケが、口唇部には摘み上げが施されている。底部は平底であるがやや丸みを有する。胎土中には3mm以下の角閃石や金雲母を含み讃岐地域からの搬入品であり、下川津B類土器の範疇に含まれる。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

47-7は覆土下層より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は23.2cmと大型であるが、残存率は



第45図 SR2004遺物出土状況図(1)



P.L. 28 第2遺構面SR出土状況5

1/12である。口縁部には強いナデにより明瞭な稜が形成されている。胴部外面はハケが、胴部内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径4mm程度のやや粗い結晶片岩粒を含む。鰯川流域からの搬入品の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

47-8は覆土下層より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は14.8cmを測り、口唇部は上方に摘み上げ、1条の擬凹線が施されている。胴部外面はハケ施後にナデが、胴部内面はユビオサエ施後にヘラケズリが施されている。胎土中には4mm程度のやや粗い角閃石を含んでおり、讃岐地域からの搬入品であるが、角閃石の含有量が下川津B類土器やその周辺地域にて製作された土器群に比べて少ないので特徴である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

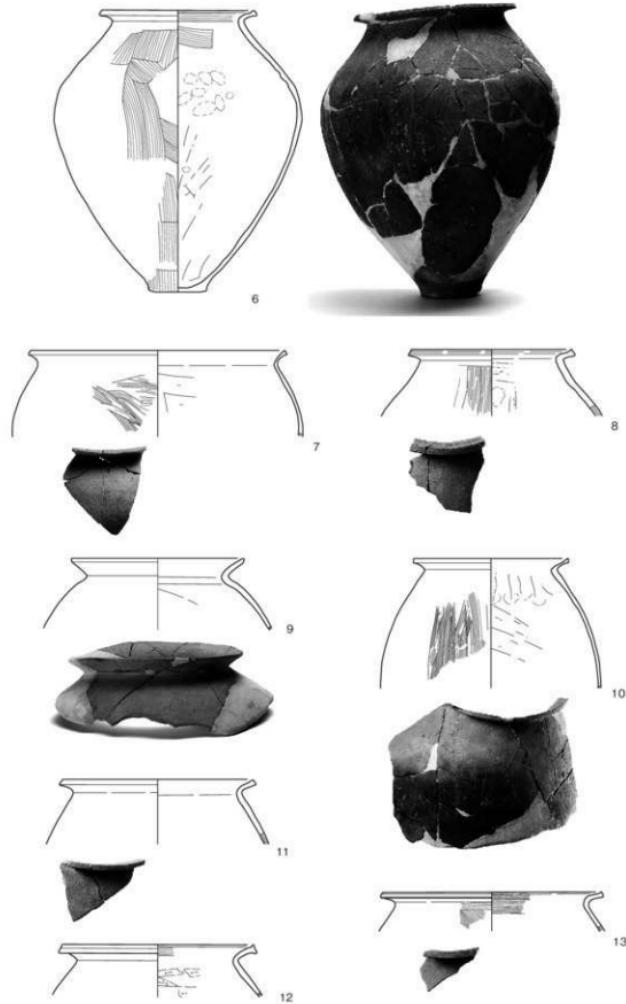
47-9は覆土下層より出土した弥生土器壺である。復元口縁部径は15.8cmを測り、摘み上げされていない口唇部はやや肥厚化しており、明瞭な稜を有しない。内外面共に摩滅のため調整は不明瞭であるが、胴部内面は頭部までヘラケズリが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鰯川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

47-10は覆土下層より出土した弥生土器壺の上半部である。復元口径は14.2cmを測り、口頭部にはナデが、胴部外面にはハケが、胴部内面にはヘラケズリが施されている。口唇部は上方に摘み上げられているが擬凹線は伴わない。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鰯川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

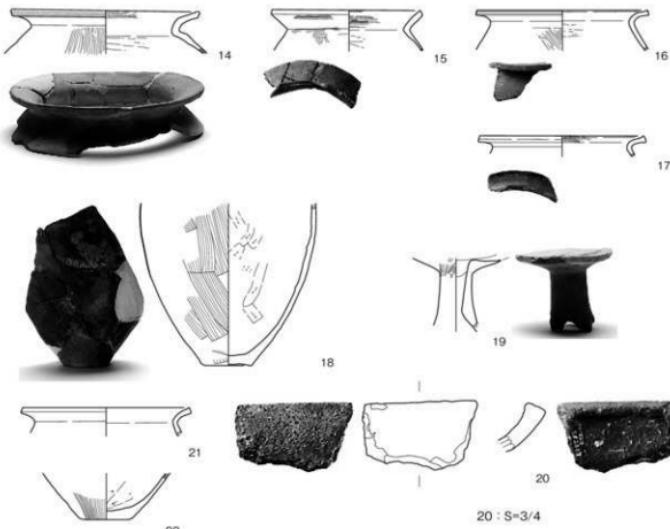
47-11はN17グリッドにて出土した弥生土器壺の上半部で



第46図 SR2004出土遺物図(1)



第47図 SR2004出土遺物図(2)



第48図 SR2004出土遺物図(3)

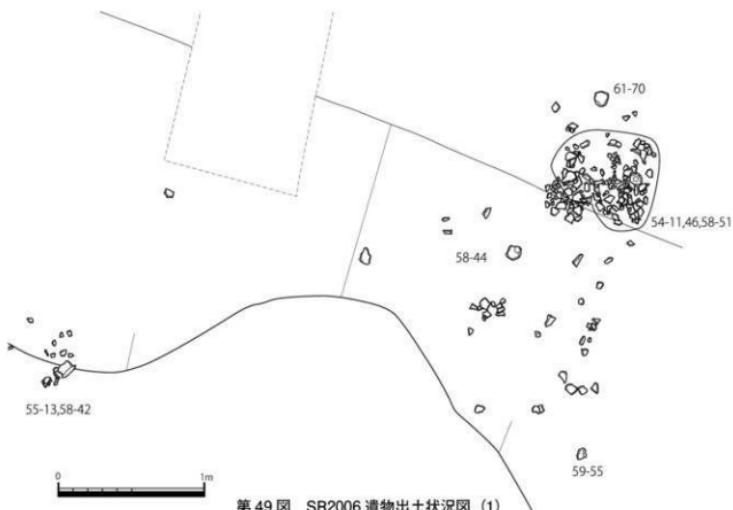
ある。復元口径は17.6cmを測る。口唇部には摘み上げは施されていないが、内面に強いユビナデが施されている。外面にはユビナデが施され、明瞭な稜が形成されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

47-12は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部と底部である。46-3と同一個体の可能性がある。復元口径は17.6cm、底径は3.8cmを測る。口唇部は上方への強い摘み上げが施され、外面には1条の擬凹線が施されている。頭部内面下半にはヘラケズリが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鮎喰川流域からの搬入品である。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

47-13は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は20.2cmを測り、上方に摘み上げた口縁端部には2条の擬凹線が、肩部外面にはハケが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

48-14は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は17cmを測り、口縁部には1条の擬凹線が、肩部外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施されている。口唇部はやや肥厚化しているのが特徴である。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

48-15は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は14.2cmを測り、摘み上げされて



第49図 SR2006 遺物出土状況図(1)



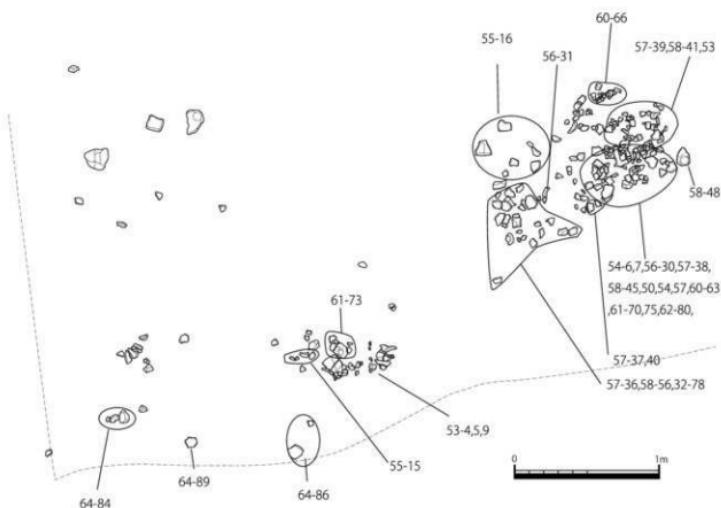
P.L. 29 第2遺構面SR出土状況6



P.L. 30 第2遺構面SR出土状況7

いよいよ口唇部はユビナデが施され明瞭な稜を有する。口頭部外面にはハケ施後にナデが、口縁部内面にはハケ施後にナデが、胴部内面にはケズリが施されている。胴部の器壁は厚約2~3mm程度まで丁寧なヘラケズリが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

48-16は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は15.8cmを測り、口唇部には挿み上げが施され、口縁部には2条の擬凹線が施されている。胴上半部外面にはハケ施後にイタナデが、口縁部内面にはユビナデが、頭部から下半にはヘラケズリが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。東阿波型土器の壺であり、鮎喰川流域からの搬入品である。弥生時代終末期前半・矢野様相5の年代を与えることができる。



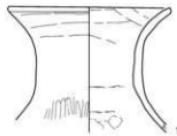
第50図 SR2006 遺物出土状況図（2）



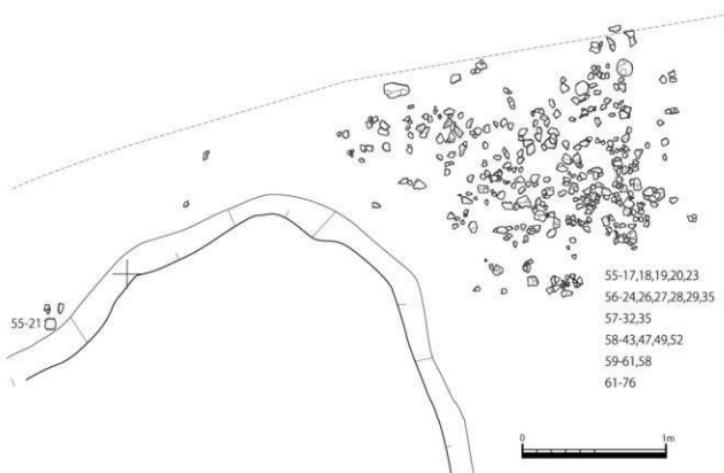
P L. 31 第2遺構面SR出土状況8



P L. 32 第2遺構面SR出土状況9



第51図 SR2006 出土遺物図（1）



第52図 SR2006遺物出土状況図(3)



P.L. 33 第2遺構面SR出土状況10



P.L. 34 第2遺構面SR出土状況11

48-17は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は15.2cmを測り、口唇部には摘み上げが、口縁部外面には1条の擬凹線が施される。口縁部内面にはハケが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。東阿波型土器の壺であり、鮎吹川流域からの搬入品である。弥生時代終末期前半・矢野様相5の年代を与えることができる。

48-18は覆土下層中より出土した弥生土器壺の胴下半部である。底部及び胴部外面にはハケが、底部内面にはケズリ施後にユビナデが、胴部内面にはケズリが施されている。胎土中には4mm以下の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

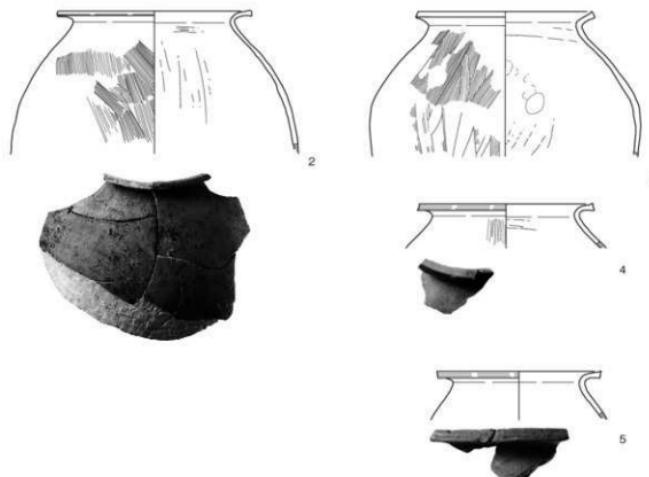
48-19は覆土下層中より出土した弥生土器高杯の脚部である。摩滅により外面の調整は不明瞭である。胎土中には3mm以下の角閃石や金雲母を含み讃岐地域からの搬入品と推定される。下川津B類土器であるかは不



P L. 35 第2遺構面 SR 出土状況 12



P L. 36 第2遺構面 SR 出土状況 13



第53図 SR2006 出土遺物図 (2)

明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

48 - 20は覆土上層より出土した土師質土器壺の口縁部である。胎土中には6mm程度の粗い結晶片岩粒を含む。9世紀～10世紀の年代を与えることができる。

48 - 22は覆土中層より出土した弥生土器壺の底部である。外面にはハケが、内面にはケズリが施されている。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

6号流路状遺構 SR2006（第49～64図）

検出長12m、検出幅5m。深度50cmを測り、断面形態は不整逆台形を呈し、東から西方向に延びる自然流路状遺構である。西側は擾乱により遺物のみの回収となり、東側は調査区外へと伸び、SR2004に連続すると想定される。遺構覆土は黄褐色粘性砂質土層である。

51-1は覆土下層より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は14.8cmを測る。垂直に立ち上がる頸部外面にはミガキが、粘土紐接合痕が観察される内面にはイタナデとユビオサエが施されている。直線上に広がる口縁部内外面にはイタナデが施されている。胎土中には直径8mm程度の粗い結晶片岩粒が多量に含まれており、勝浦流域での製作が想定された可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

53-2は覆土下層より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は17.8cmを測る。口縁部には1条の擬凹線状沈線が施されている。体部外面には細かいハケが、体部内面にはヘラケズリ施後にナデが施されている。胎土中には直径6mm程度のやや粗い結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域から搬入された東阿波形土器の粗型壺の可能性が高い。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

53-3は覆土下層より出土した弥生土器壺である。復元口径15.8cmを測る。口唇部は上方に摘み上げ、口縁部外面にはヨコナデが、体部外面にはハケ施後にイタナデが、頸部直下内面にはユビオサエ施後にナデが、胴部最大径以下にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小の角閃石粒や金雲母片粒を微量に含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当する。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

53-4は覆土下層より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は16cmを測る。口唇部には上方へ摘み上げが施され、口縁部には2条の擬凹線が施されている。体部外面にはハケが、内面頭部直下まではヘラケズリが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

53-5は覆土下層より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は15.2cmを測る。口唇部には上方へ摘み上げが施され、口縁部には2条の擬凹線が施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

54-6は覆土下層より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は18.2cmを測る。口縁部には2条の擬凹線状沈線が施されている。体部外面にはハケが、体部内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm程度の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域から搬入された東阿波形土器の粗型壺の可能性が高い。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

54-7は覆土下層より出土した弥生土器壺の底部である。底面及び体部外面にはハケが、体部内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の細かい角閃石粒や金雲母片粒を微量ながら含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

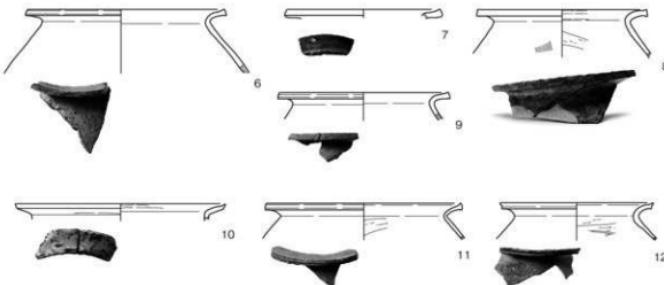
54-8は覆土下層より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は15.6cmを測る。口縁部にはヨコナデが、体部外面にはハケが、口頭部内面にはイタナデが、体部内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。



P L. 37 第2遺構面 SR 出土状況 14



P L. 38 第2遺構面 SR 出土状況 15



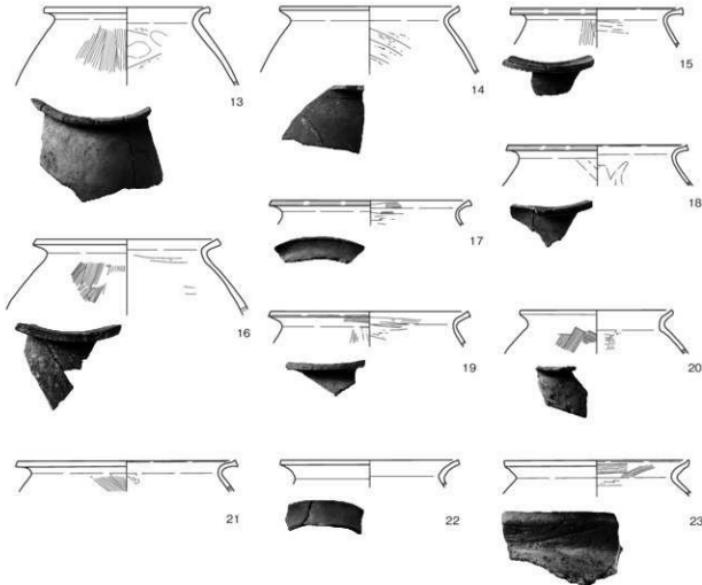
第54図 SR2006 出土遺物図 (3)

54 - 9は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は15.6cmを測る。口唇部には上方へ摘み上げが施され、口縁部には2条の擬凹線が施されている。体部外面にはハケが、内面頭部直下まではヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鯖喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

54 - 10は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は19.4cmを測る。口縁部内面の強いユビナデにより、口唇部が上方へ立ち上がる。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が含まれており、鯖喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

54 - 11は覆土中層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は18cmを測る。口唇部はやや肥厚化しているが、口縁部には2条の擬凹線が施されている。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鯖喰川流域からの搬入された東阿波型土器の壺と推定される。弥生時代終末期前半・矢野様相5の年代を与えることができる。

54 - 12は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は14.2cmを測る。口唇部は上方へ摘み上げられ、且つ肥厚化していない。胴部外面にはハケ施後にミガキが、胴部内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれおり、鯖喰川流域からの搬入



第55図 SR2006出土遺物図(4)

品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

55-13は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は15.1cmを測る。体部外には粗いハケが、内面にはユビオサエ施後にヘラケズリが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

55-14は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は16.4cmを測る。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。口唇部は上方に摘み上げられている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

55-15は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は15.8cmを測る。口唇部の摘み上げは肥厚化し、口縁部には2条の擬凹線が施されている。胴部外にはハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の細かい角閃石粒や金雲母片粒を微量ながら含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

55-16は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は16.6cmを測る。口縁部はヨコナデが、胴部外にはハケが、内面頭部直下までヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小角

閃石粒や金雲母片粒を微量ながら含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

55 - 17 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は18.2cmを測る。円弧を描いて外反する口縁部には2条の擬凹線状沈線が施される。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

55 - 18 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は16.6cmを測る。直線状の体部肩から円弧を描いて強く外反する口縁部には2条の擬凹線状沈線が施され、口唇部は強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がる。体部外面にはイタナデが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

55 - 19 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は18.2cmを測る。直線状の肩部外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施される。円弧を描いて外反する口縁部には1条の擬凹線状沈線が、内面には強いヨコナデが施され、口唇部は上方に摘み上げたように立ち上がる。胎土中には直径1mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である。東阿波型土器の粗形となる一群の壺の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

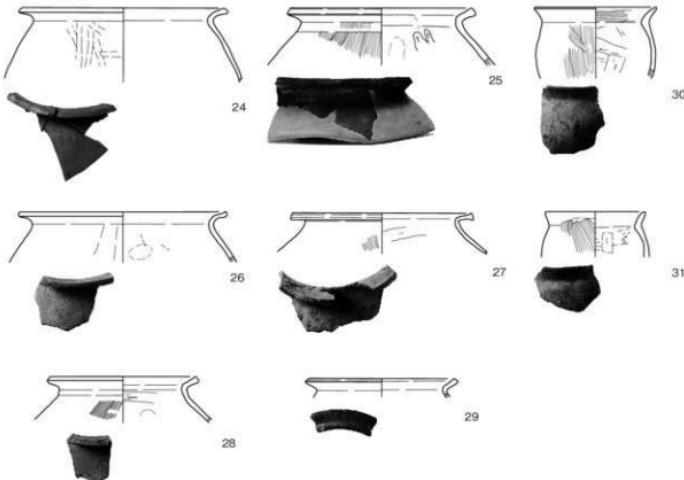
55 - 20 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は14cmを測る。緩い弧を描く肩部に、円弧を描いて直線状に立ち上がる口縁部が伴う。口唇部は強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がる。体部外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

55 - 21 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は20.2cmを測る。円弧を描いて強く外反する口縁部には1条の擬凹線状沈線が施され、口唇部は強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がる。体部外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

55 - 22 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は16.8cmを測る。強く外反する口縁部に、強いヨコナデにより明瞭な稜を有する口唇部が伴う。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

55 - 23 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は17cmを測る。緩い弧を描く肩部から円弧を描いて直線状に立ち上がる口縁部が伴う。口唇部は強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がる。体部外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

56 - 24 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は18.6cmを測る。緩い弧を描く肩部外面にはイタナデが、内面々にはユビオサエ施後にヘラケズリが施されている。円弧を描いて外反する口縁の内面には強いヨコナデが施される。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれ



第 56 図 SR2006 出土遺物図 (5)

ており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

56 - 25 は覆土下層中より出土した弥生土器甕の口縁部である。復元口径は 16.8cm を測る。口唇部は肥厚化している。胴部外側にはハケが、内面には頭部直下までヘラケズリが施されている。胎土中には直径 2mm 以下の極小の角閃石粒や金雲母片粒を微量に含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津 B 類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

56 - 26 は覆土下層中より出土した弥生土器甕の口縁部である。復元口径は 19.2cm を測る。緩い弧を描く肩部外側にはイタナデが、内面にはユビオサエ施後にイタナデが施されている。円弧を描いて外反する口縁の内面には強いヨコナデが施され、口唇部は上方に摘み上げたように立ち上がる。胎土中には直径 3mm 以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

56 - 27 は覆土中層中より出土した弥生土器甕の口頭部である。復元口径は 16.6cm を測り、肩部は直線状を呈する胴部に強く外反する口縁部の端部には 2 条の擬凹線状沈線が施され、口唇部内面に強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がる。体部外側には細かいハケが、内面には茎部直下までヘラケズリが施されている。胎土中には直径 2mm 以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入された東阿波型土器の甕である。弥生時代終末期前半・矢野様相 5 の年代を与えることができる。

56 - 28 は覆土中層中より出土した弥生土器甕の口縁部である。復元口径は 13.4cm を測る。肩部は直線状を呈する胴部に外反する口縁端部には擬凹線状沈線は伴わない。口唇部内面に強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がるが肥厚化している。体部外側には細かいハケが、内面には茎部直下までヘラケズリが施されている。

胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入された東阿波型土器の甕である。弥生時代終末期前半・矢野様相5の年代を与えることができる。

56-29は覆土下層中より出土した弥生土器甕の口縁部である。復元口径は13.4cmを測り、口縁部には1条の擬凹線状沈線が施されている。側面部内外面にはナデが施されている。口縁部内面に楕円形を呈する圧痕が観察され、記号文の可能性がある。胎土中には直径2mm以下の極小角閃石粒や金雲母片粒が僅かに含まれており、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

56-30は覆土下層中より出土した弥生土器甕の底部である。復元底径は3cmを測り、底面及び体部外面にはヘラミガキが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小角閃石粒や金雲母片粒を微量ながら含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

56-31は覆土下層中より出土した弥生土器甕である。体部下半を欠損する。復元口径9.2cmを測る小型甕である。口縁部にはユビナデが、体部外面にはハケが、体部内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径5mm程度のやや粗い結晶片岩粒を含む。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

57-32は覆土下層中より出土した弥生土器甕の体部である。綾い弧を描く肩部外面にはハケが、内面にはユビオサエ施後にヘラケズリが施されている。胎土中には直径4mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

57-33は覆土下層中より出土した弥生土器甕の胴部である。球形を呈する胴部の外面上にはタタキ施後にユビナデが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径5mm程度のやや粗い結晶片岩粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

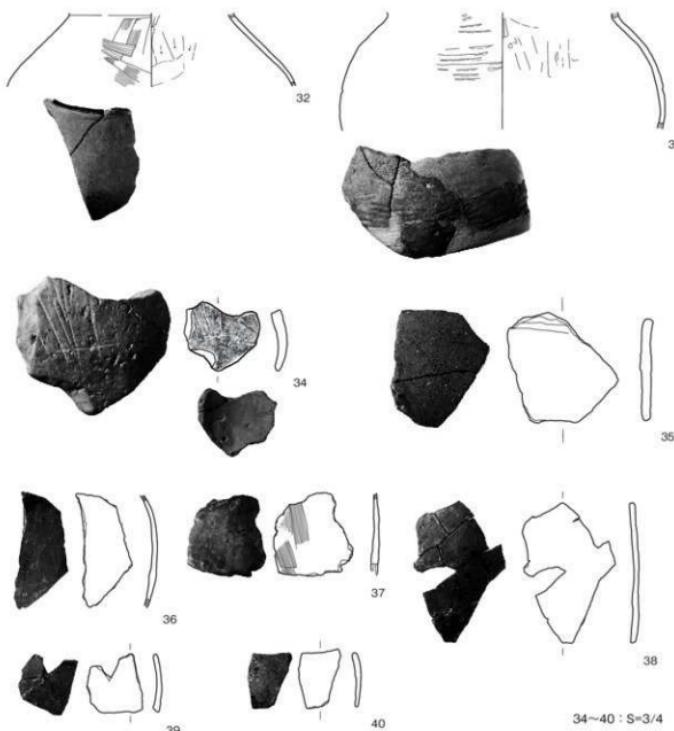
57-34は覆土下層中より出土した弥生土器甕の体部である。外面にはハケが、内面にはハケ施後にナデが施されている。外面にはヘラ描きによる数条の直線が観察されるが、記号もしくは絵画であるのかは不明である。胎土中には直径4mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。

57-35は覆土中層中より出土した弥生土器甕の体部である。外面には細かいハケが、内面にはユビオサエが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小の角閃石粒や金雲母片粒を微量に含み、讃岐地域からの搬入品である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

57-36は覆土下層中より出土した弥生土器甕の体部である。外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下のごく角閃石粒や金雲母片粒が微量含まれており、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

57-37は覆土下層中より出土した弥生土器甕の体部である。外面にはハケが、内面にはケズリが施されている。胎土中には直径3mm程度の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域から搬入された東阿波波形土器の粗型甕の可能性が高い。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

57-38は覆土下層中より出土した弥生土器甕の体部である。外面にはハケが、内面にはケズリが施されている。内面には炭化物・ススが付着する。胎土中には直径2mm以下の極小角閃石粒や金雲母片粒を微量ながら含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。



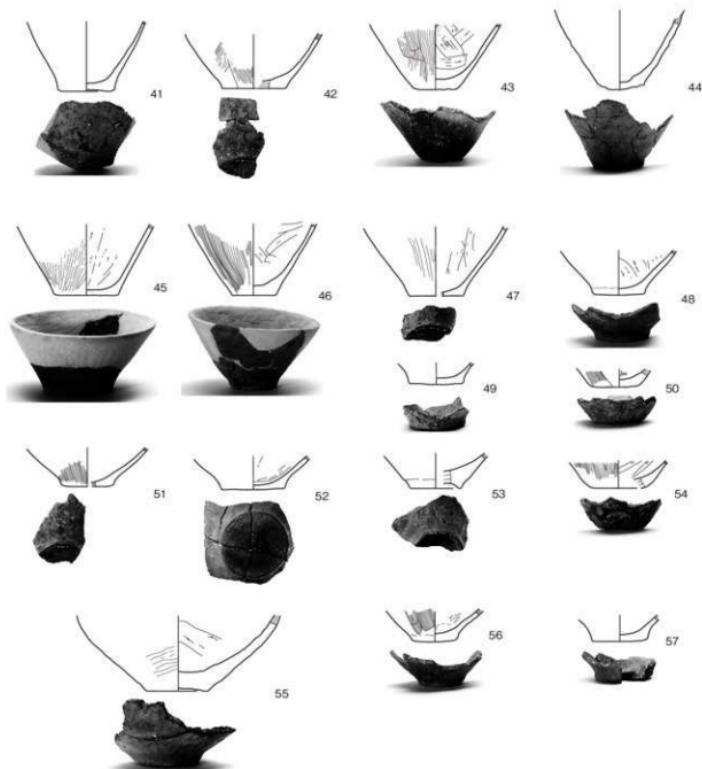
第 57 図 SR2006 出土遺物図 (6)

57~39は覆土下層中より出土した弥生土器甕の体部である。外面にはハケが、内面にはケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小角閃石粒や金雲母片粒を微量ながら含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

57~40は覆土下層中より出土した弥生土器甕の体部である。外面にはハケが、内面にはケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小角閃石粒や金雲母片粒を微量ながら含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

58~41は覆土下層中より出土した弥生土器甕の底部である。復元底径は4.4cmを測る。底部はやや凹底である。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径4mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が含まれており、駄吹川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相の年代を与えることができる。

58~42は覆土下層中より出土した弥生土器甕の底部である。復元底径は5.8cmを測る。明瞭な縦を有する平



第 58 図 SR2006 出土遺物図 (7)

底の底面にはハケが、体部外面にはハケが、体部内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径 2mm 以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

58 - 43 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。復元底径は 4cm を測る。やや丸底化の傾向が認められる平底の底面にはハケが、直線状に広がる側部外面にはハケが、内面にはケズリが施される。胎土中には直径 3mm 以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

58 - 44 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。底面は 2 次焼成による被熱剥離が激しく底面

形状は不明である。体部内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径8mm程度の粗い結晶片岩粒や雲母片粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

58-45は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は14.2cmを測り、摘み上げられた口唇部はやや肥厚化している。内外面共に摩滅のため調整は不明瞭である。胎土中には直径1mm以下の極小角閃石粒や金雲母片粒を微量ながら含み、讃岐地域からの搬入品である。下川津B類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

58-46は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。明瞭な後を有する平底である。復元底径は4cmを測る。底面と体部外面にはハケが、体部内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径4mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

58-47は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。復元底部径は5cmを測る。明瞭な後を有する平底底部の底面にはイタナデガ、体部外面にはミガキガ、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm程度の極小角閃石粒や金雲母片粒が微量含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である。下川津B類土器に該当すると推定される。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

58-48は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。底径は4.6cmを測る。底部はやや丸底化した平底である。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径5mm程度のやや粗い結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

58-49は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。復元底径5cmを測る。不整形な平底底部の底面にはハケが、内面にはケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

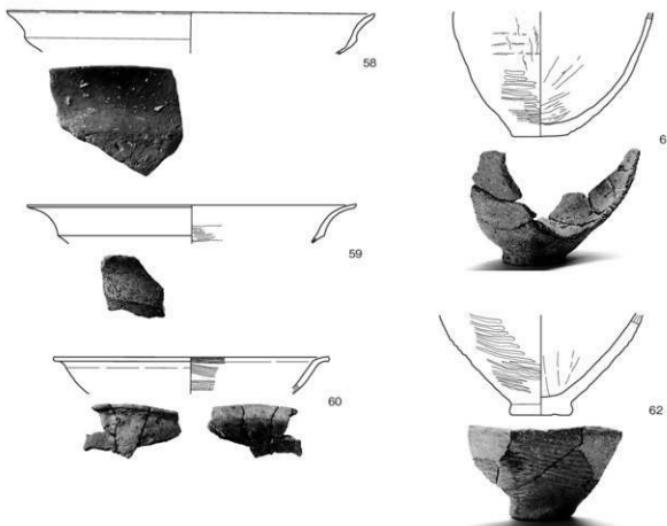
58-50は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。復元底径は4.4cmを測り、やや丸底化した平底底部である。体部外面にはハケが、体部内面にはユビオサエ施後にヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

58-51は覆土中層中より出土した壺の底部である。復元底径は4.8cmを測り、やや丸底化した平底である。体部と底面には細かいハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入された東阿波型土器の壺と推定される。弥生時代終末期前半・矢野様相5の年代を与えることができる。

58-52は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。復元底径5.8cmを測る。明瞭な後を有する平底底部の底面にはハケが、内面にはケズリが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

58-53は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。復元底径は4.6cmを測る。底部は凹底である。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径8mm程度の粗い結晶片岩粒や雲母片粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

58-54は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。復元底径は4.2cmを測り、やや丸底化した平



第59図 SR2006出土遺物図(8)

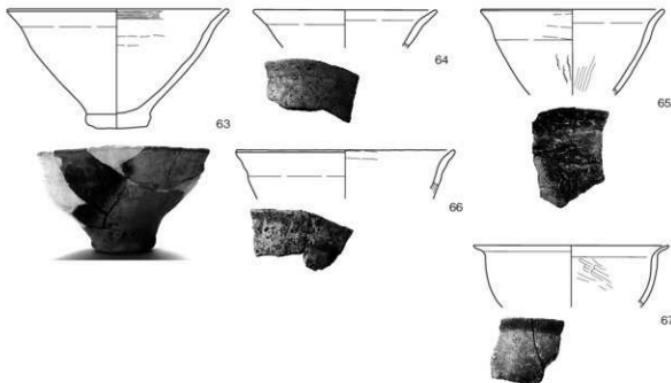
底底部である。体部外面にはハケが、体部内面にはユビオサエ施後にヘラケズリが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

58-55は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。復元底径は5.6cmを測り大型壺の凹底である。底面及び胴部外面にはヘラミガキが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径7mm程度の粗い結晶片岩粒が多量に含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

58-56は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。復元底径は4.1cmを測り、やや丸底化した平底底部である。体部外面にはハケが、体部内面にはユビオサエ施後にヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

58-57は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。復元底径は3.7cmを測り、やや丸底化した平底底部である。体部外面にはハケが、体部内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

59-58は覆土下層中より出土した弥生土器高杯の口縁部である。復元口径は34cmを測る大型高杯である。浅く内湾する体部に強く外反する口縁部が伴う。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径5mm程度のやや粗い結晶片岩粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。



第 60 図 SR2006 出土遺物図 (9)

59 - 59 は覆土下層中より出土した弥生土器高杯の口縁部である。復元口径は 30.4cm を測り、緩く広がる杯部に強く外反して広がる口縁部を有する。内外面共に摩滅により調整は不明瞭であるが M 外面にはミガキが、杯部内面にはハケ施後にナデが施されている。胎土中には直径 3mm 以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

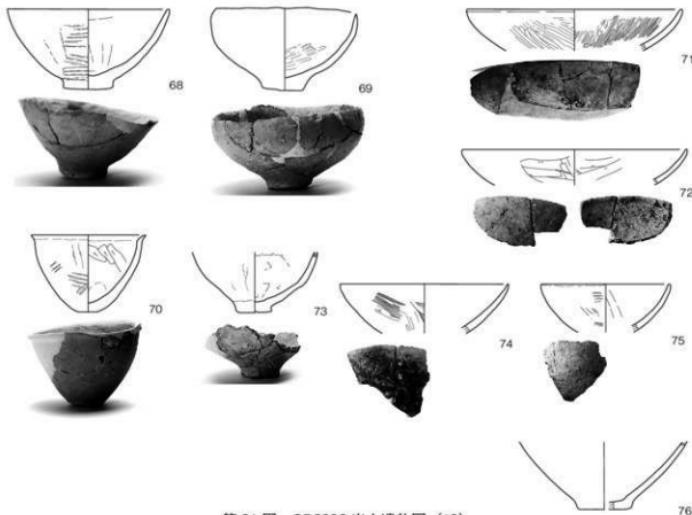
59 - 60 は覆土下層中より出土した弥生土器鉢の口縁部である。復元口径は 25.4cm を測る中型鉢である。広く内湾気味に立ち上がる体部に外反する口縁が伴う。口縁部は強いユビナデにより丸味を有する。胴部が内面にはハケが、口縁部内面には細かいハケが施されている。胎土中には 9mm 程度の粗い結晶片岩粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

59 - 61 は覆土下層中より出土した弥生土器甕の底部である。復元底径は 37cm を測る。やや丸底化の傾向が認められる平底の底面にはタタキ工具によるナデが、内湾して立ち上がる体部の外面にはタタキ施後にナデが、内面にはヘラケズリ施後にナデが施されている。胎土中には直径 6mm 程度の粗い結晶片岩粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

59 - 62 は覆土下層中より出土した弥生土器鉢の体部である。タタキ工具によるナデが施された厚みのある平底底部から内湾気味に立ち上がる体部の外面にはタタキが、内面にはイタナデが施されている。胎土中には直径 7mm 程度の粗い結晶片岩粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

60 - 63 は覆土下層中より出土した弥生土器甕である。復元口径は 11.2cm を測る小型甕である。口縁部はヨコナデが、体部外面にはハケが、体部内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径 2mm 以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

60 - 64 は覆土下層中より出土した弥生土器鉢の口縁部である。復元口径は 16.7cm を測る小型鉢である。緩い内湾気味の体部に直線状に広がる口縁部を有する。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。タタキ痕跡



第61図 SR2006出土遺物図（10）

は観察されず、造りは精製である。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

60-65は覆土下層中より出土した弥生土器鉢の体部である。復元口径は16.7cmを測る小型鉢である。縁内済気味の体部に外反する口縁部を有する。体部外面にはイタナデが施されているが、成形時のヒビワレが残る。体部内面にはヘラミガキが施されている。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

60-66は覆土下層中より出土した弥生土器鉢である。復元口径は20cmを測る。直線上に広がる体部に、屈曲後に直線上に広がる口縁部を有する。内外面共に摩擦により調整は不明瞭である。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

60-67は覆土中層中より出土した弥生土器鉢である。復元口径は18cmを測る中型鉢である。楕状に立ち上がる体部に外反する口縁部が伴う。体部外面にはタタキ施後に丁寧なナデが、内面にはミガキが施されている。直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代終末期前半・矢野様相5の年代を与えることができる。

61-68は覆土下層中より出土した弥生土器鉢である。復元口径15cm、底径4.6cm、器高7.3cmを測る中型鉢である。タタキが施された厚みのある平底底部から内済気味に立ち上がる体部の外面にはタタキ施後にユビナデが、内面にはイタナデが施されている。体部外面には成形時のヒビワレが残る。胎土中には直径4mm程度の

結晶片岩粒が僅かに含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

61-69は覆土下層中より出土した弥生土器鉢である。孔径129cm、底径2cm、器高7.5cmを測る小型鉢である。厚い平底底部に椀状を呈する体部が伴う。内外面共に摩滅により調整は不明瞭であるが体部内外面にはミガキが施されている。胎土中には直径7mm程度の粗い結晶片岩粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

61-70は覆土下層中より出土した弥生土器鉢である。復元口径10.6cm、底径1.6cm、器高7cmを測る小型鉢である。平底から内湾しながら立ち上がる体部に大きく広がる口縁部を有する。口縁部にはユビナデが、体部外面にはタクキ施後にユビナデが、内面にはヘラケズリ施後にナデが施されている。底面にはヘラケズリが施されている。体部外面には成形時のひび割れが残る。胎土中には直径4mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

61-71は覆土下層中より出土した弥生土器高杯の杯部である。復元口径は19.8cmを測る。浅く内湾気味に立ち上がる杯部外面にはヘラミガキが、内面には細かいヘラミガキが施されている。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

61-72は覆土下層中より出土した弥生土器高杯の杯部である。復元口径は20.8cmを測る。内外面共にケズリ施後にユビナデが施されている。口唇部はヨコナデにより丸みを持つ。胎土中には直径4mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

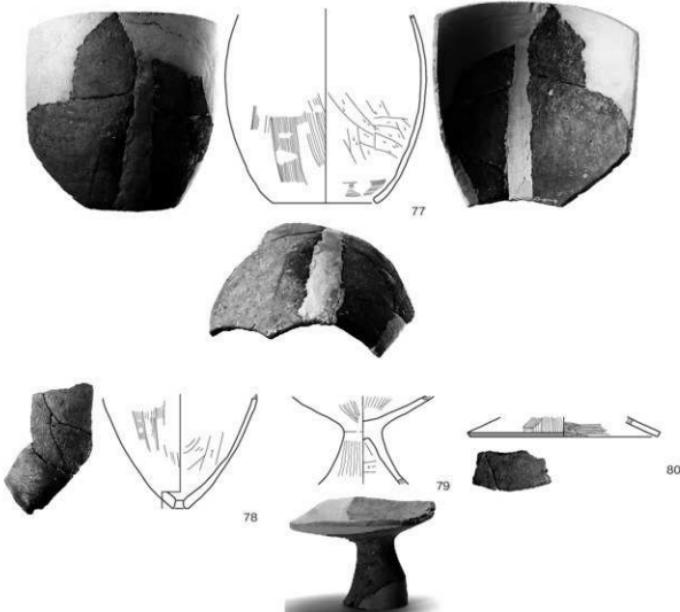
61-73は覆土下層中より出土した弥生土器鉢である。残存器高5.5cm、底径は3.1cmを測る。体部及び底部外面にはユビナデが、内面にはイタナデが施されている。外面には内面からのユビオサエによるヒビワレが観察される。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

61-74は覆土下層中より出土した弥生土器鉢の体部である。復元口径は15.6cmを測る小型鉢である。椀状を呈する杯部外面にはハケ施後にミガキが、内面にはナデが施されている。造りは精製である。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

61-75は覆土下層中より出土した弥生土器鉢である。復元口径は11.8cmを測る。内湾気味に広がる体部外面はタクキ施後にヘラケズリを施し、更にユビナデを施している。体部内面にはイタナデが施されている。胎土中には直径4mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

61-76は覆土下層中より出土した弥生土器甕の底部である。復元底径4.6cmを測り、平底底部から内湾気味に立ち上がる体部は、内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

62-77は覆土下層中より出土した弥生土器有孔鉢の体部である。胴部最大径は17.4cm、底径9.6cmを測り、底部孔は筒抜けタイプで瓶形状に類似する。体部外面にはハケが、体部内面にはヘラケズリが施される。孔部の仕上げは丁寧なユビナデ疊ヨコハケが施されており、土器甕のようなヘラ切り痕は観察されない。胎土中



第62図 SR2006出土遺物図(11)

には直径3mm以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もあるが、当該地域には類似器形は確認されていない。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

62-78は覆土下層中より出土した弥生土器有孔鉢である。口縁部を欠損する。底径は1.4cm、底部孔は0.9cmを測る。やや内湾気味に立ち上がる体部の外側には強いイタナデ施後にハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径4mm程度のやや粗い結晶片岩粒を含む。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

62-79は覆土下層中より出土した弥生土器高杯の脚部である。外反気味に広がる脚部外側にはミガキが、内面にはヘラケズリが施される。緩い段を有し直線状に広がる杯部外側にはミガキが、内面にはケズリ施後にミガキが施されている。胎土中には直径4mm程度の結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

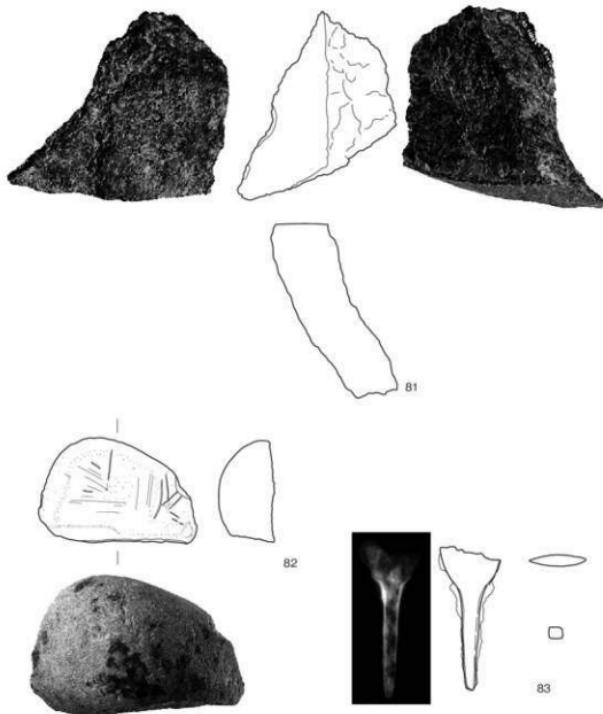
62-80は覆土下層中より出土した弥生土器高杯の脚端部である。復元端部形は17.2cmを測り、端部には1条の擬凹線状沈線が施されている。内外共にハケが施されている。胎土中には直径5mm程度のやや粗い結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性もある。弥生時代後期後半・矢野



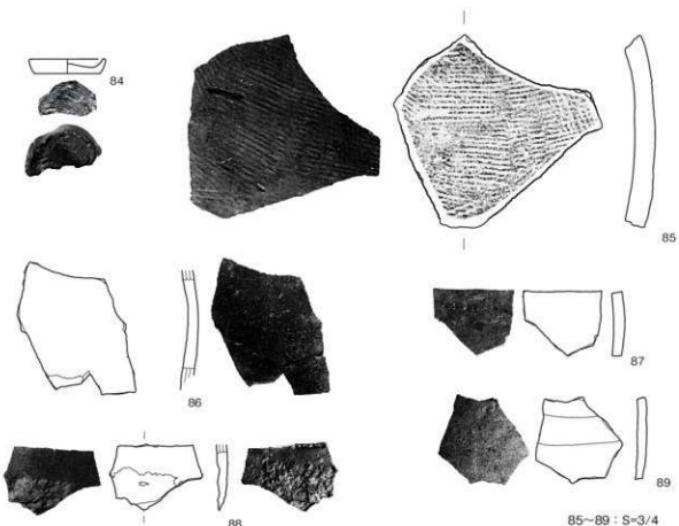
P L. 39 第2遺構面 SR 出土状況 16



P L. 40 第2遺構面 SR 出土状況 17



第63図 SR2006 出土遺物図 (12)



第64図 SR2006出土遺物図(13)

様4の年代を与えることができる。

63-81は覆土下層より出土した緑色岩製の台石である。欠損しており、機能面の残存率は僅かである。機能面には敲打痕と擦痕が観察されることから砥石の可能性も指摘される。

63-82は覆土下層より出土した砂岩製磨石である。残存長は4.85cm、重さは95gを測る。一部に鉄製刃器による夜擦痕が観察され、砥石としても使用されたと推定される。素材は古野川北岸地域からの搬入品である。

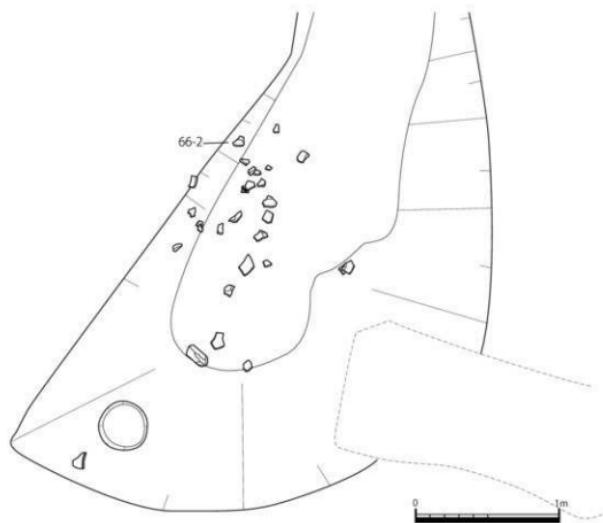
63-83は覆土下層より出土した鐵鏃である。鏃身部を欠損し、関部から茎部にかけて遺存する。緩い弧を描く撫間に厚みがあり3.5cmを測る長い茎部が伴う。鏃身部は椿葉形を呈すると推定される。弥生時代後期から終末期の年代を与えることができる。

64-84は覆土上層より出土した土師質土器小皿である。復元口径6.8cm、底径6cmを測る。口唇部は肥厚化した丸味を持つ。底面には回転糸切りが施されている。12世紀~13世紀の年代を与えることができる。

64-85は覆土上面より出土した須恵器壺の体部である。外面には平行タタキが施されている、6世紀後半の年代を与えることができる。

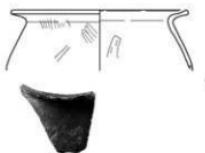
64-86は覆土正面より出土した陶器壺の体部である。備前焼である。14世紀~15世紀の年代を与えることができる。

64-88は覆土上面より出土した陶器壺の体部である。備前焼である。内外面には敲打痕が観察される。14世紀~15世紀の年代を与えることができる。



第 65 図 SR2007 遺物出土状況図

64 - 89 は覆土正面より出土した中世須恵器捏ね鉢である。東播系と推定され、13世紀～14世紀の年代を与えることができる。



7号流路状遺構 SR2007 (第 65, 66 図)

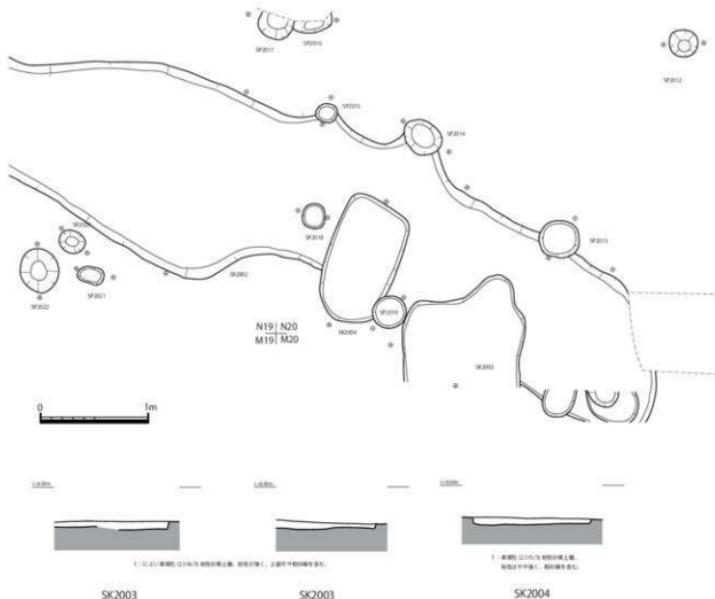
検出長 6.2 m、検出幅 22 m。深度 40cm を測り、断面形態は逆台形を呈し、南から北方向に延びる落ち込み状遺構である。遺構覆土は黄褐色粘性砂質土層である。

66 - 1 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の口頭部である。復元口径は 17cm を測る。口唇部はやや肥厚化している。口頭部外面はヨコナデ、胴部外面はハケ施後にミガキが、胴部内面は頭部直下までヘラケズリが施されている。胎土中には直径 3mm 程度の角閃石粒や金雲母片粒を微量に含んでおり、讃岐地域からの搬入品である。下川津 B 類土器に該当するかは不明である。弥生時代後期半の年代を与えることができる。



第 66 図 SR2007 出土遺物図

66 - 2 は覆土下層中より出土した弥生土器壺の底部である。底径は 5cm を測り、底面にはイタナデが、底部内面にはイタナデが施されている。胎土中には直径 2mm 以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに



第 67 図 第 2 遺構面 SK, SP 遺構図 (1)

含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

3号土坑 SK2003 (第 67 図)

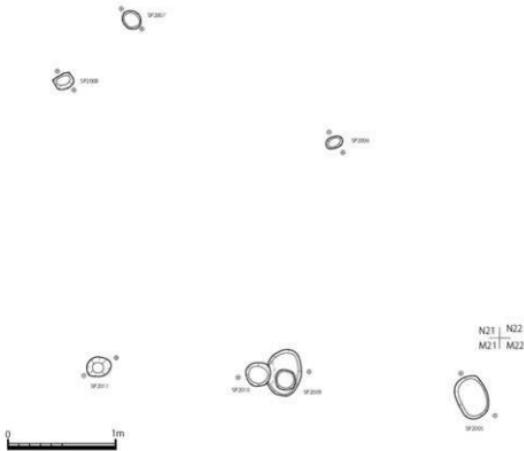
M20, N20 グリッドにて検出。検出長軸 1.16 m、検出短軸 1.02 m、深度 8cm を測る土坑である。遺構覆土は、粘性が強く土器片や粗砂礫を含むびい黄褐色粘性砂質土層である。

4号土坑 SK2004 (第 67 図)

N20 グリッドにて検出。長軸 1.14 m、短軸 0.66 m、深度 7cm を測る土坑である。遺構覆土は、粘性はやや強く粗砂礫を含む黄褐色粘性砂質土層である。

2号土坑 SK2001 (第 67 図)

M22, 23 グリッドにて検出。検出長軸 0.8 m、短軸 0.88 m、深度 6cm を測る土坑である。遺構覆土は粘性の弱い黄褐色粘性砂質土層である。



第 68 図 第 2 遺構面 SK, SP 遺構図 (2)

2号土坑 SK2002 (第 67 図)

N22 グリッドにて検出。長軸 0.62 m、短軸 0.24 m、深度 22cm を測る土坑である。遺構覆土は粗砂や小礫を多く含む黄褐色粘性砂質土層である。

5号土坑 SK2005 (第 67 図)

N17 グリッドにて検出。長軸 0.66 m、短軸 0.34 m、深度 14cm を測る土坑である。遺構覆土は、やや砂性が強く粗砂を多く含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

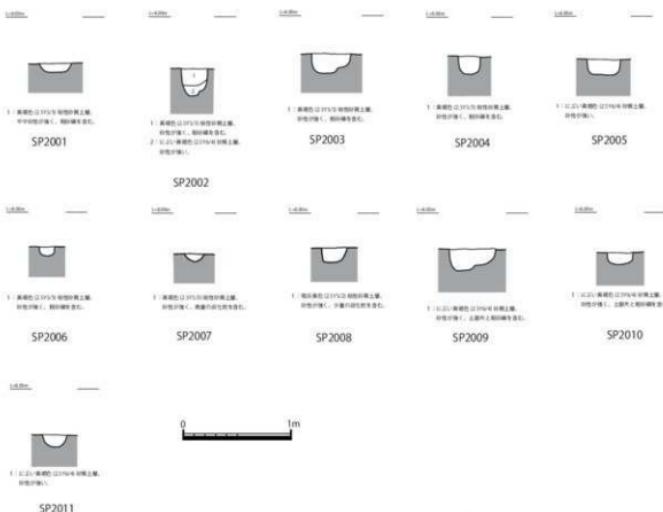
6号土坑 SK2006 (第 67 図)

N9 グリッドにて検出。検出長軸 0.74 m、短軸 0.92 m、深度 40cm を測る土坑である。遺構覆土は、1 層は微量の炭化粒や小礫を含む暗灰黄色粘性砂質土層、2、3 層はやや粘性が強く微量の炭化粒や小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

35-1 は覆土上層より出土した土師質土器杯である。復元底径は 8.6cm を測る。底面には回転糸切り施後にイタナデが施されている。13世紀～14世紀の年代を与えることができる。未検出の第 1 遺構面遺構もしくは流れ込みに伴う遺物である。

7号土坑 SK2007 (第 67 図)

N8、O8 グリッドにて検出。長軸 1.72 m、短軸 1.22 m、深度 20cm を測る土坑である。遺構覆土は、1 層はやや粘性が強く炭化粒を含むオリーブ褐色粘性砂質土層、2 層は黄褐色粘性砂質土層、3 層はにぶい黄褐色砂質土



第 69 図 第 2 遺構面 SK, SP 遺構図 (3)

層である。

1号柱穴 SP2001 (第 69 図)

N23 グリッドにて検出。長軸 0.28 m、短軸 0.26 m、深度 8cm を測る柱穴である。遺構覆土は、やや砂性が強く粗砂礫を含む黄褐色粘性砂質土層である。

2号柱穴 SP2002 (第 69 図)

N22 グリッドにて検出された柱穴である。遺構覆土は、やや砂性が強く粗砂礫を含む黄褐色粘性砂質土層である。

3号柱穴 SP2003 (第 69 図)

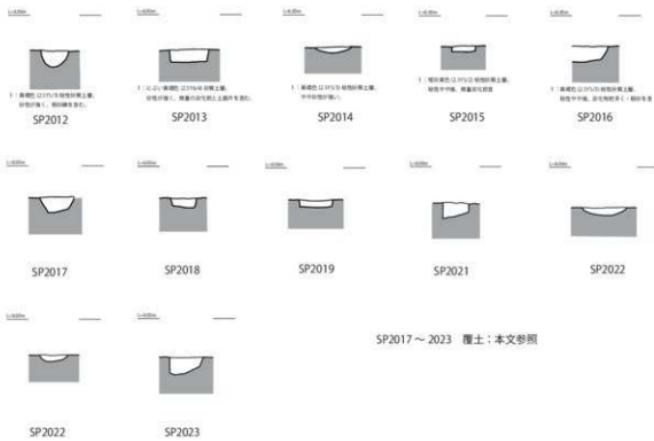
N22 グリッドにて検出された柱穴である。遺構覆土は、砂性が強く粗砂礫を含む黄褐色粘性砂質土層である。

4号柱穴 SP2004 (第 69 図)

N22 グリッドにて検出された柱穴である。遺構覆土は、砂性が強く粗砂礫を含む黄褐色粘性砂質土層である。

5号柱穴 SP2005 (第 69 図)

M21 グリッドにて検出。長軸 0.4 m、短軸 0.3 m、深度 14cm を測る柱穴である。遺構覆土は、砂性が強いに



第 70 図 第 2 造構面 SK, SP 造構図 (4)

ぶい黄褐色砂質土層である。

6号柱穴 SP2006 (第 69 図)

N21 グリッドにて検出。長軸 0.16 m、短軸 0.12 m、深度 8cm を測る柱穴である。造構覆土は、砂性が強く粗砂礫を含む黄褐色粘性砂質土層である。

7号柱穴 SP2007 (第 69 図)

N21 グリッドにて検出。長軸 0.22 m、短軸 0.16 m、深度 7cm を測る柱穴である。造構覆土は、砂性が強く、微量の炭化粒を含む黄褐色粘性砂質土層である。

8号柱穴 SP2008 (第 69 図)

N21 グリッドにて検出。長軸 0.16 m、短軸 0.14 m、深度 13cm を測る柱穴である。造構覆土は、砂性が強く少量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

9号柱穴 SP2009 (第 69 図)

M21 グリッドにて検出。長軸 0.44 m、検出短軸 0.3 m、深度 20cm を測る柱穴である。造構覆土は、砂性が強く、土器片と粗砂礫を含むにぶい黄褐色砂質土層である。

10号柱穴 SP2010 (第 69 図)

M21 グリッドにて検出。長軸 0.24 m、短軸 0.22 m、深度 10cm を測る柱穴である。造構覆土は、砂性が強く、土器片と粗砂礫を含むにぶい黄褐色砂質土層である。

11号柱穴 SP2011（第69図）

M21グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.2m、深度22cmを測る柱穴である。遺構覆土は砂性が強いにぶい黄褐色砂質土層である。

12号柱穴 SP2012（第70図）

N20グリッドにて検出。長軸0.26m、短軸0.26m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は砂性が強く粗砂礫を含む黄褐色粘性砂質土層である。

13号柱穴 SP2013（第70図）

N20グリッドにて検出。長軸0.38m、短軸0.38m、深度12cmを測る柱穴である。遺構覆土は、砂性が強く微量の炭化粒と土器片を含むにぶい黄褐色砂質土層である。

14号柱穴 SP2014（第70図）

N20グリッドにて検出。長軸0.4m、短軸0.32m、深度5cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや砂性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

15号柱穴 SP2015（第70図）

N20グリッドにて検出。長軸0.2m、短軸0.18m、深度5cmを測る柱穴である。遺構覆土は、粘性がやや強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

16号柱穴 SP2016（第70図）

N20グリッドにて検出。検出長軸0.36m、検出短軸0.24m、深度15cmを測る柱穴である。遺構覆土は、粘性がやや強く炭化物粒を多く粗砂を含む黄褐色粘性砂質土層である。

17号柱穴 SP2017（第70図）

N20グリッドにて検出。長軸0.34m、検出短軸0.22m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は、粘性がやや強く多くの炭化物粒や粗砂を含む黄褐色粘性砂質土層である。

18号柱穴 SP2018（第70図）

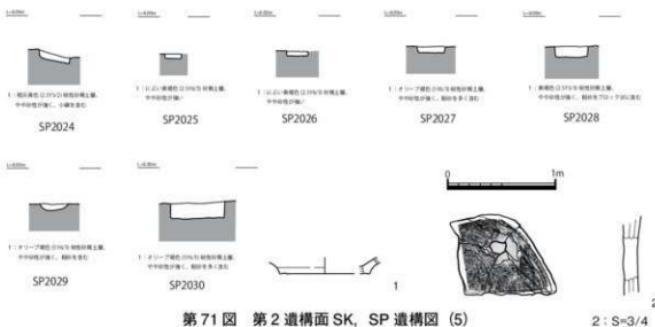
N20グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.22m、深度8cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや砂性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

19号柱穴 SP2019（第70図）

N20グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.3m、深度9cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや砂性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

21号柱穴 SP2021（第70図）

N19グリッドにて検出。長軸0.26m、短軸0.16m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は粘性がやや強



第 71 図 第 2 遺構面 SK, SP 遺構図 (5)

い暗灰黄色粘性砂質土層である。

22 号柱穴 SP2022 (第 70 図)

N19 グリッドにて検出。長軸 0.24 m、短軸 0.22 m、深度 6cm を測る柱穴である。遺構覆土は、砂性が強く粗砂礫を含む黄褐色粘性砂質土層である。

23 号柱穴 SP2023 (第 70 図)

M19, 20 グリッドにて検出。長軸 0.28 m、短軸 0.26 m、深度 16cm を測る柱穴である。遺構覆土は、粘性がやや強い黄褐色粘性砂質土層である。

24 号柱穴 SP2024 (第 71 図)

N17 グリッドにて検出。長軸 0.26 m、短軸 0.22 m、深度 6cm を測る柱穴である。遺構覆土は、やや砂性が強く小礫を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

25 号柱穴 SP2025 (第 71 図)

N17 グリッドにて検出。検出長軸 0.32 m、短軸 0.22 m、深度 4cm を測る柱穴である。遺構覆土は、やや砂性が強いにぶい黄褐色砂質土層である。

26 号柱穴 SP2026 (第 71 図)

N17 グリッドにて検出。長軸 0.26 m、短軸 0.22 m、深度 4cm を測る柱穴である。遺構覆土は、やや砂性が強いにぶい黄褐色砂質土層である。

27 号柱穴 SP2027 (第 71 図)

N16 グリッドにて検出。長軸 0.28 m、短軸 0.22 m、深度 6cm を測る柱穴である。遺構覆土は、粗砂を多く含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

28号柱穴 SP2028 (第71図)

N16グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.24m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや砂性が強く粗砂をブロック状に含む黄褐色粘性砂質土層である。

29号柱穴 SP2029 (第71図)

N15グリッドにて検出。長軸0.32m、短軸0.26m、深度16cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや砂性が強く粗砂を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

71-1は土師質土器杯である。復元底径は8.3cmを測る。底面はナデが施されている。覆土正面より出土した。流れ込みもしくは第1遺構面に伴う遺物である。

30号柱穴 SP2030 (第71図)

N14グリッドにて検出。長軸0.5m、短軸0.24m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや砂性が強く粗砂を多く含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

31号柱穴 SP2031 (第72, 73図)

N14グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.22m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土は、粗砂を多く含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

32号柱穴 SP2032 (第72, 73図)

N10グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.34m、深度23cmを測る柱穴である。遺構覆土1層はや砂性が強く、微量の炭化粒と焼土ブロックを含む暗褐色粘性砂質土層、2層は小型炭化物を含む暗灰黄色粘性砂質土層、3~5層はやや粘性が強く微量の炭化粒や焼土ブロックを含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

71-2は土師質土器杯の底部である。小片であり径は復元できない。底面には回転糸切り痕が観察される。13世紀代の年代を与えることができる。流れ込みに伴う遺物である。

33号柱穴 SP2033 (第72, 73図)

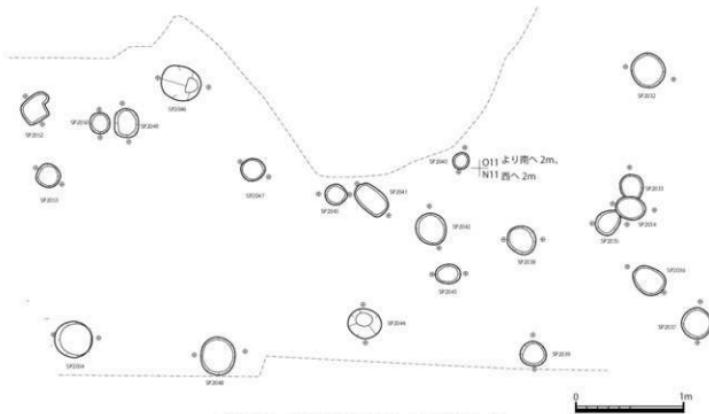
N10グリッドにて検出。検出長軸0.24m、短軸0.22m、深度13cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色（25Y4/2）粘性砂質土層である。

34号柱穴 SP2034 (第72, 73図)

N10グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.22m、深度20cmを測る柱穴である。遺構覆土上層はやや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層、下層はやや粘性が強く微量の炭化粒を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

35号柱穴 SP2035 (第72, 73図)

N10グリッドにて検出。検出長軸0.25m、短軸0.2m、深度20cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。



第72図 第2造構面 SK, SP 造構図 (6)

36号柱穴 SP2036 (第72, 73図)

N10グリッドにて検出。長軸0.32m、短軸0.26m、深度20cmを測る柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

37号柱穴 SP2037 (第72, 73図)

N10, 11グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.3m、深度23cmを測る柱穴である。造構覆土上層はやや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層、下層はやや粘性が強く微量の炭化粒を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

38号柱穴 SP2038 (第72, 73図)

グリッドにて検出された柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

39号柱穴 SP2039 (第72, 73図)

N10グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.22m、深度6cmを測る柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

40号柱穴 SP2040 (第72, 73図)

N10グリッドにて検出。長軸0.16m、短軸0.14m、深度14cmを測る柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く、微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層。

41号柱穴 SP2041（第72, 73図）

N10グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.22m、深度0.18mを測る柱穴である。造構覆土はやや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

42号柱穴 SP2042（第72, 73図）

N10グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.28m、深度22cmを測る柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

43号柱穴 SP2043（第72, 73図）

N10グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.18m、深度20cmを測る柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

44号柱穴 SP2043（第72, 73図）

グリッドにて検出された柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

45号柱穴 SP2045（第72, 73図）

グリッドにて検出された柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

46号柱穴 SP2046（第72, 73図）

N10グリッドにて検出。長軸0.38m、短軸0.32m、深度12cmを測る柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

47号柱穴 SP2047（第72, 73図）

N10グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.22m、深度20cmを測る柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

48号柱穴 SP2048（第72, 73図）

N10グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.32m、深度22cmを測る柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

49号柱穴 SP2049（第72, 73図）

N9グリッドにて検出。長軸0.28m、短軸0.24m、深度20cmを測る柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色（25Y4/2）粘性砂質土層である。

50号柱穴 SP2050（第72, 73図）

N9グリッドにて検出。長軸0.2m、短軸0.18m、深度10cmを測る柱穴である。造構覆土は、やや粘性が強



第73図 第2遺構面SK, SP遺構図(7)

く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

51号柱穴 SP2051（第72, 73図）

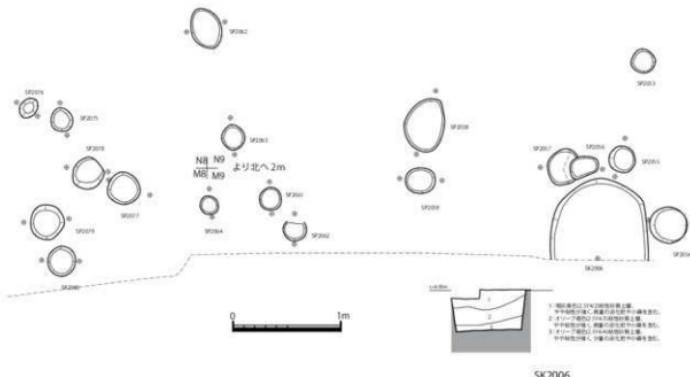
N10グリッドにて検出。検出長軸0.14m、短軸0.26m、深度25cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

52号柱穴 SP2052（第72, 73図）

N9グリッドにて検出。長軸0.32m、短軸0.28m、深度20cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

53号柱穴 SP2053（第72, 73図）

N9グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.22m、深度6cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや粘性が強



第74図 第2埋構面 SK, SP 埋構図 (8)

く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

54号柱穴 SP2054 (第72, 73図)

N9グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.34m、深度22cmを測る柱穴である。埋構覆土は、やや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

55号柱穴 SP2055 (第74, 75図)

N9グリッドにて検出。長軸0.18m、短軸0.14m、深度16cmを測る柱穴である。埋構覆土上層はやや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層、2層はやや粘性が強く微量の炭化粒を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

56号柱穴 SP2056 (第74, 75図)

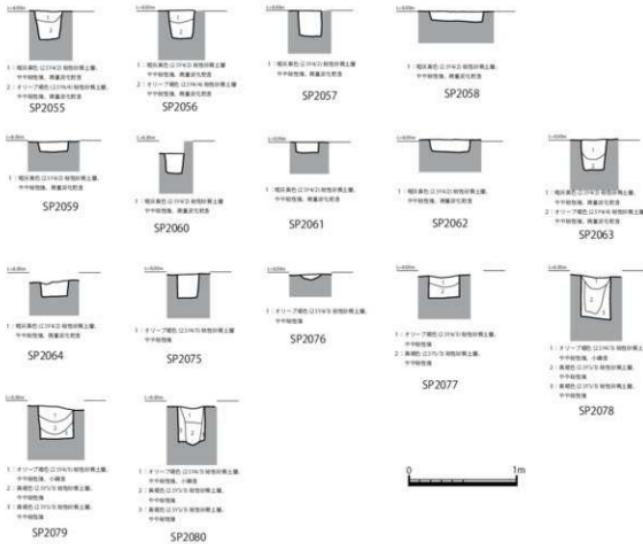
N9グリッドにて検出。長軸0.28m、短軸0.18m、深度16cmを測る柱穴である。埋構覆土上層はやや粘性が強い微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層、2層はやや粘性が強く微量の炭化粒を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

57号柱穴 SP2057 (第74, 75図)

N9グリッドにて検出。長軸0.34m、検出短軸0.22m、深度24cmを測る柱穴である。埋構覆土上層はやや粘性が強い微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

58号柱穴 SP2058 (第74, 75図)

N9グリッドにて検出。長軸0.5m、短軸0.38m、深度9cmを測る柱穴である。埋構覆土上層はやや粘性が強い微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。



第75図 第2造構面 SK, SP造構図(9)

59号柱穴 SP2059 (第74, 75図)

N9グリッドにて検出。長軸0.28m、短軸0.24m、深度10cmを測る柱穴である。造構覆土上層はやや粘性が強い微量の炭化鉱を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

60号柱穴 SP2060 (第74, 75図)

N9グリッドにて検出。長軸0.22m、検出短軸0.2m、深度18cmを測る柱穴である。造構覆土上層はやや粘性が強い微量の炭化鉱を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

61号柱穴 SP2061 (第74, 75図)

N9グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.22m、深度10cmを測る柱穴である。造構覆土上層は微量の炭化鉱を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

62号柱穴 SP2062 (第74, 75図)

N8, N9グリッドにて検出。長軸0.4m、短軸0.28m、深度12cmを測る柱穴である。造構覆土上層はやや粘性が強い微量の炭化鉱を含む暗灰黄色粘性砂質土層、下層はやや粘性が強い微量の炭化鉱を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

63号柱穴 SP2063（第74、75図）

N9グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.22m、深度17cmを測る柱穴である。遺構覆土上層はやや粘性が強い微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層、下層は微量の炭化粒を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

64号柱穴 SP2064（第74、75図）

N8、N9グリッドにて検出。長軸0.18m、短軸0.16m、深度6cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強く微量の炭化粒を含む暗灰黄色粘性砂質土層である。

75号柱穴 SP2075（第74、75図）

N8グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.2m、深度22cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

76号柱穴 SP2076（第74、75図）

N8グリッドにて検出。長軸0.2m、短軸0.16m、深度4cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

77号柱穴 SP2077（第74、75図）

N8グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.3m、深度20cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

78号柱穴 SP2078（第74、75図）

N8グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.28m、深度40cmを測る柱穴である。遺構覆土上層は小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

79号柱穴 SP2079（第74、75図）

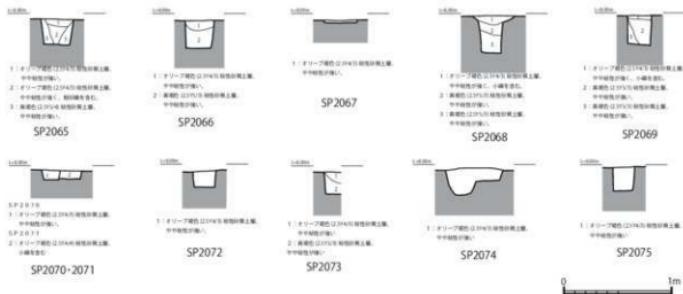
N8グリッドにて検出。長軸0.32m、短軸0.32m、深度30cmを測る柱穴である。遺構覆土上層はやや粘性が強く小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

80号柱穴 SP2080（第74、75図）

N8グリッドにて検出。長軸0.28m、短軸0.26m、深度32cmを測る柱穴である。遺構覆土上層はやや粘性が強く小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

65号柱穴 SP2065（第76図）

O8グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.28m、深度0.23mを測る柱穴である。遺構覆土上層はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層。中層は粗砂礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層、下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。



第 76 図 第 2 遺構面 SK, SP 遺構図 (10)

66 号柱穴 SP2066 (第 76 図)

N8 グリッドにて検出。長軸 0.26 m、短軸 0.22 m、深度 26cm を測る柱穴である。遺構覆土上層はオリーブ褐色粘性砂質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

67 号柱穴 SP2067 (第 76 図)

N8 グリッドにて検出。長軸 0.032 m、短軸 0.26 m、深度 2cm を測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

68 号柱穴 SP2068 (第 76 図)

N8 グリッドにて検出。長軸 0.46 m、短軸 0.38 m、深度 34cm を測る柱穴である。遺構覆土上層は小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

69 号柱穴 SP2069 (第 76 図)

グリッドにて検出された柱穴である。遺構覆土上層は小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

70 号柱穴 SP2070 (第 76 図)

N8 グリッドにて検出。長軸 0.2 m、短軸 0.18 m、深度 7cm を測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

71 号柱穴 SP2071 (第 76 図)

N8 グリッドにて検出。長軸 0.18 m、短軸 0.18 m、深度 7cm を測る柱穴である。遺構覆土は小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層である。

72号柱穴 SP2072（第76図）

N8グリッドにて検出。長軸0.24m、短軸0.22m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

73号柱穴 SP2073（第76図）

N8グリッドにて検出。検出長軸0.2m、短軸0.2m、深度20cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

74号柱穴 SP2074（第76図）

N8グリッドにて検出。長軸0.62m、短軸0.32m、深度24cmを測る柱穴である。遺構覆土は、やや粘性が強くオリーブ褐色粘性砂質土層である。

81号柱穴 SP2081（第77図）

N8グリッドにて検出。長軸0.4m、短軸0.28m、深度14cmを測る柱穴である。遺構覆土上層はやや粘性が強く小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

82号柱穴 SP2082（第77図）

N8グリッドにて検出。長軸0.28m、短軸0.28m、深度6cmを測る柱穴である。遺構覆土上層はやや粘性が強く小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

83号柱穴 SP2083（第77図）

O7グリッドにて検出。長軸0.3m、短軸0.22m、深度22cmを測る柱穴である。遺構覆土上層はやや粘性が強く小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

84号柱穴 SP2084（第77図）

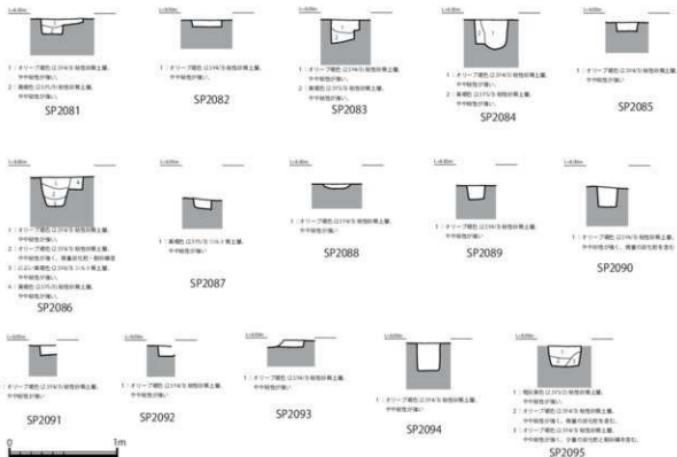
N7グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.3m、深度27cmを測る柱穴である。遺構覆土上層はやや粘性が強く小礫を含むオリーブ褐色粘性砂質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。

85号柱穴 SP2085（第77図）

N7グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.22m、深度6cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

86号柱穴 SP2086（第77図）

N7グリッドにて検出。長軸0.42m、短軸0.32m、深度26cmを測る柱穴である。遺構覆土上層は微量の炭化粒と粗砂礫を含むやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層。中層はやや粘性が強いにぶい黄褐色シルト質土層。下層はやや粘性が強い黄褐色粘性砂質土層である。



第 77 図 第 2 遺構面 SK, SP 遺構図 (11)

87号柱穴 SP2087（第 77 図）

N7 グリッドにて検出。長軸 0.2m、短軸 0.18m、深度 8cm を測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強い黄褐色シルト質土層である。

88号柱穴 SP2088（第 77 図）

N7 グリッドにて検出。長軸 0.28m、短軸 0.22m、深度 4cm を測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

89号柱穴 SP2089（第 77 図）

N7 グリッドにて検出。長軸 0.16m、短軸 0.16m、深度 13cm を測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

90号柱穴 SP2090（第 77 図）

N7 グリッドにて検出。長軸 0.2m、短軸 0.18m、深度 18cm を測る柱穴である。遺構覆土は微量の炭化粒を含むやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

91号柱穴 SP2091（第 77 図）

N7 グリッドにて検出。長軸 0.18m、検出短軸 0.14m、深度 10cm を測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

92号柱穴 SP2092（第77図）

N7グリッドにて検出。長軸0.2m、検出短軸0.14m、深度10cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

93号柱穴 SP2093（第77図）

M6グリッドにて検出。長軸0.28m、短軸0.24m、深度6cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

94号柱穴 SP2094（第77図）

M6グリッドにて検出。長軸0.22m、短軸0.22m、深度26cmを測る柱穴である。遺構覆土はやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

95号柱穴 SP2095（第77図）

N7グリッドにて検出。長軸0.34m、短軸0.34m、深度18cmを測る柱穴である。遺構覆土は上層はやや粘性が強い暗灰黄色粘性砂質土層、下層は微量の炭化粒や粗砂礫を含むやや粘性が強いオリーブ褐色粘性砂質土層である。

第2包含層出土遺物（第78～82図）

78-1はO16グリッドにて出土した弥生土器壺の底部である。底径は3.7cmを測る。底部外面は板ナデ、胴部下半部には縱方向のハケが、内面にはケズリが施されている。やや凹底であるが端部には明瞭な棱線は無く、丸底化の過程である。胎土中には結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鯖喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

78-2はN19グリッドにて出土した弥生土器壺の底部である。大型壺の可能性もある。底径は4.4cmを測る。底部及び胴部にはハケが、内面には板ナデが施されている。胎土中には結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鯖喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

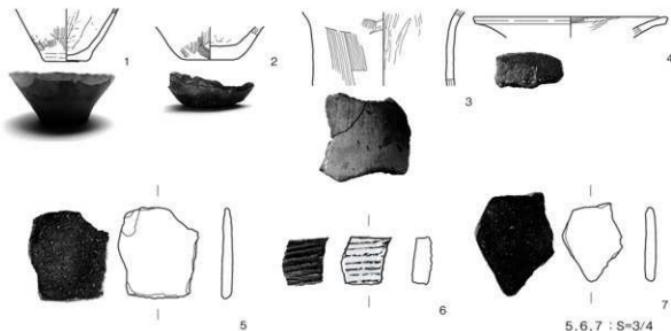
78-3はN20グリッドにて出土した弥生土器広口長頸壺の頸部である。頸部径は13cmを測る。外面にはハケが、内面には棒状工具によるミガキが施されている。胎土中には結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鯖喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

78-4はN19グリッドにて出土した弥生土器壺の口縁部である。口縁部には凹線状沈線が1条、内面にはハケ施後にヘラミガキが施されている。胎土中に結晶片岩粒を含む。高杯脚壺部の可能性もある。

78-5はN21グリッドにて出土した弥生土器壺の胴部である。外面にはハケが、内面にはケズリが施されている。胎土中には角閃石粒と雲母片粒が含まれており讃岐地域からの搬入品であるが、下川津B類土器であるかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

78-6はN20グリッドにて出土した須恵器壺の胴部である。外面にはタタキが、内面にはユビナデが施されている。13世紀～15世紀の年代を与えることができる。

78-7はN18グリッドにて出土した弥生土器壺の胴部である。外面にはハケが、内面にはケズリが施されている。胎土中には角閃石粒と雲母片粒が含まれており讃岐地域からの搬入品であるが、下川津B類土器であるかは不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。



第78図 第2包含層出土遺物図(1)

79-8はN14グリッドにて出土した陶器壺の胴部である。内外面共にナデが施されており、備前焼である。14世紀～15世紀の年代を与えることができる。

79-9はN18グリッドにて出土した弥生土器壺の底部である。外面にはタタキ施後にユビナデが、内面にはナデが施されている。内面のナデは丁寧でミガキに近い。底径は5.5cmを測るが緩く丸底化している。大型壺の可能性もある。胎土中に粗い結晶片岩粒を含む。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

79-10はN18グリッドにて出土した弥生土器鉢である。残存高5.3cm、口径25.4cmを測る。外面にはタタキ施後にユビナデ瓦、内面はハケ施後にユビナデが施されている。胎土中にやや粗い結晶片岩粒を含む。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

79-11はN17グリッドにて出土した弥生土器壺の底部である。底径4.0cmを測る平底底部であるが、胴部との境は丸みを帯びている。胴下半部外面にはタタキ施後にハケが、内面にはケズリが施されている。結晶片岩粒を含み、船岡川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

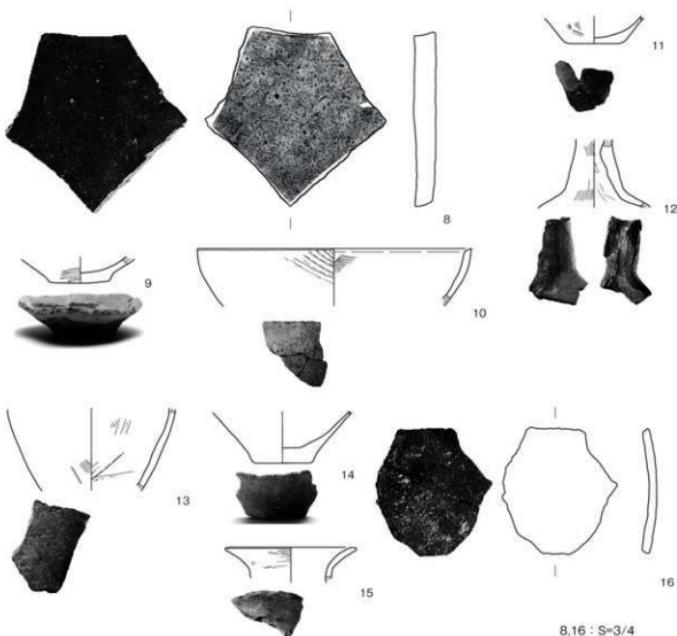
79-12は弥生土器高杯の脚部である。外面にハケ施後にユビナデが、内面にはユビナデが施されているが、絞り痕も観察される。2mm以下の結晶片岩粒を若干含む。

79-13はN19グリッドにて出土した弥生土器壺の胴部である。外面はタタキ施後にタテハケとナデを施す。胎土中には2mm以下の結晶片岩粒を若干含む。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

79-14はN19グリッドにて出土した弥生土器壺の底部である。底部径は5cmを測り、胴部との境に明瞭な接はない。胎土中に3mm以下の結晶片岩粒をやや多く含む。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

79-15はN19グリッドにて出土した弥生土器壺の口縁部である。緩やかに外反する頭部外面にはハケ施後にミガキが施される。胎土中に3mm以下の結晶片岩粒を微量に含む。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

79-16はN19グリッドにて出土した弥生土器壺の胴部である。内面にはケズリが施されている。胎土中に2mm以下の角閃石粒と雲母片粒が含まれており讃岐地域からの搬入品であるが、下川津B類土器であるかは



第79図 第2包含層出土遺物図(2)

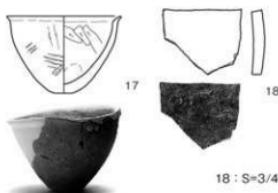
不明である。弥生時代後期後半の年代を与えることができる。

81 - 19はO16グリッドにて出土した瓦質土器捏ね鉢である。復元口径27.6cmを測る。

81 - 20はN11グリッドにて出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は17.6cmを測る。直線状の体部肩から円弧を描いて強く外反する口縁部には2条の擬四線状沈線が施され、口唇部は強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がる。体部内外面共に摩減により調整は不明瞭である。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

81 - 21はO10グリッドにて出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は16.1cmを測る。直線状の体部肩から円弧を描いて強く外反する口縁部には2条の擬四線状沈線が施され、口唇部は強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がる。胎土中には直径2mm以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

81 - 22はO10グリッドにて出土したサヌカイト製石礫である。緩い弧を描く凹基で、縁身側縁はふくらを



第80図 第2包含層出土遺物図(3)

81 - 24 は O10 グリッドにて出土した弥生土器甕の口縁部である。復元口径は 14.8cm を測る。直線状の体部肩から円弧を描いて外反する口縁部口唇部は強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がり、明瞭な稜を有する。肩部内外面には細かいハケが施されている。胎土中には直径 2mm 以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品の可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4 の年代を与えることができる。

81 - 25 は P9 グリッドにて出土した弥生土器甕の口縁部である。復元口径は 13.9cm を測る。緩い弧を描く体部から円弧を描いて強く外反する口縁部には 2 条の擬四線状沈線が施される。体部外面にはハケが、内面にはケズリが施されている。胎土中には直径 3mm 以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4 の年代を与えることができる。

81 - 26 は P9 グリッドにて出土した弥生土器甕の底部である。復元底径は 4.6cm を測る。不整形ながらも平底の底面にはハケが、内湾して立ち上がる体部外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径 3mm 以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4 の年代を与えることができる。

81 - 27 は P8 グリッドにて出土した弥生土器甕の口縁部である。復元底径は 5cm を測る。明瞭な稜を有する平底底部である。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径 3mm 以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4 の年代を与えることができる。

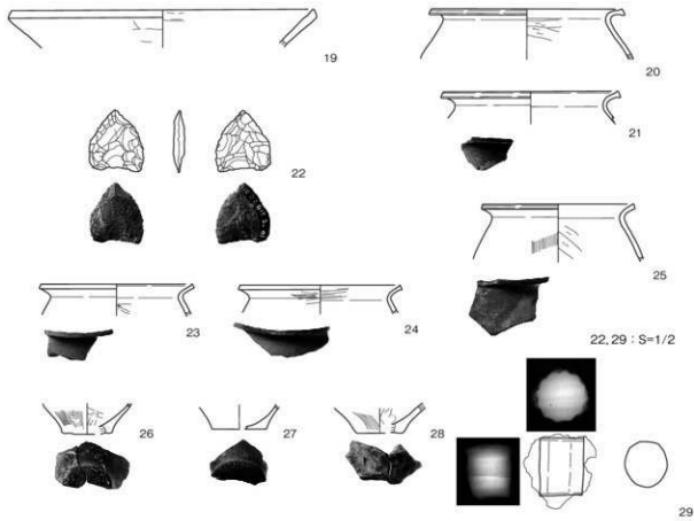
81 - 28 は P9 グリッドにて出土した弥生土器甕の底部である。復元底径は 4.2cm を測る。やや凹み状の平底底面にはハケが、外反気味に広がる体部の外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施されている。胎土中には直径 4mm 程度の結晶片岩粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4 の年代を与えることができる。

81 - 29 は P8 グリッドにて出土した不明鉄製品である。長さ 25cm、直径 1.45cm、重さ 27.12g を測る円柱状を呈する鉄製品で、用途は不明である。上下端を欠損しており、鑿の基部の可能性もあり、中世もしくは近世遺物の混入の可能性がある。

82 - 30 は P9 グリッドにて出土した弥生土器甕である。復元口径は 13.7cm を測る。やや楕円形を呈する体部に円弧を描いて外反する口縁部が伴う。口唇部は強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がり、明瞭な稜を有する。体部外面にはハケが、内面には頭部直下よりヘラケズリが施されている。胎土中には直径 3mm 以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4 の年代を与えることができる。

有する。全長 2.1cm、重さ 1.9g を測る。弥生時代の石鏃と推定される。

81 - 23 は O10 グリッドにて出土した弥生土器甕の口縁部である。復元口径は 13.9cm を測る。直線状の体部肩から円弧を描いて直線状に外反する口縁部の口唇部は強いヨコナデにより摘み上げ状に立ち上がる。胎土中には直径 2mm 以下の極小結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である。弥生時代後期後半・矢野様相4 の年代を与えることができる。



第 81 図 第 2 包含層出土遺物図 (4)

82 - 31 は P9 グリッドにて出土した弥生土器壺である。緩い弧を描く体部に緩い弧を描いて外反する口縁部が伴う。体部外面にはイタナデ^ガ、内面にはヘラケズ^ガが施されている。胎土中には直径 3mm 以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

81 - 32 は P9 グリッドにて出土した壺の口縁部である。復元口径は 14.6cm を測る。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径 5mm 程度の結晶片岩粒や雲母片粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

81 - 33 は P9 グリッドにて出土した弥生土器壺の口縁部である。復元口径は 15cm を測る。口縁端部には 2 条の凹線状沈線が施されている。口縁部内面には細かいハケが施されている。胎土中には直径 3mm 以下の細かい結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれており、鮎喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

81 - 34 は P9 グリッドにて出土した壺の口縁部である。復元口径は 13.6cm を測る。口縁端部には 2 条の凹線状沈線が施されている。口縁部内面には細かいハケが施されている。内外面共に摩滅により調整は不明瞭である。胎土中には直径 4mm 程度の結晶片岩粒や雲母片粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相 4 の年代を与えることができる。

82 - 35 は P9 グリッドにて出土した弥生土器鉢の口縁部である。復元口径は 35.4cm を測る大型鉢である。内湾しだいに開く体部の外面にはイタナデ^ガ、内面にはミガキ^ガが施されている。体部から短く外反する口縁部に

はナデが施されている。胎土中には直径5mm程度の結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

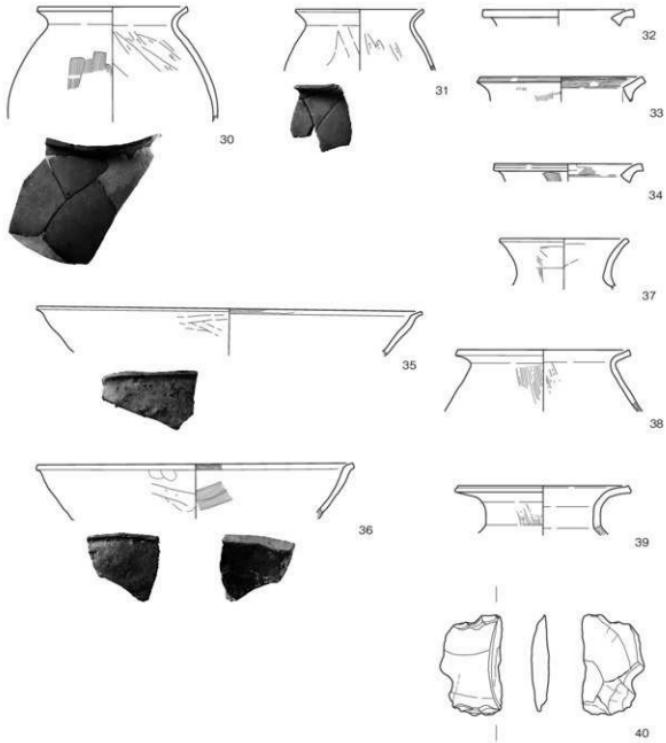
82-36はP9グリッドにて出土した鉢の口縁部である。復元口径は29.3cmを測る大型鉢である。内湾しだく聞く体部の外面にはユビオサエ施後にケズリが、内面にはハケ施後にナデが施されている。体部から短く外反する口縁部にはナデが施されている。胎土中には直径4mm程度の結晶片岩粒や雲母片粒が僅かに含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

82-37はO16グリッドにて出土した弥生土器壺の口頭部である。口径は11.6cm、頭部径は8.8cmを測り、頭部から口縁端部に向かって緩やかに外反する。外面はハケの後にナデが、内面には板ナデが施されている。鶴喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

82-38はN17グリッドにて出土した弥生土器壺の上部である。復元口径は15.8cmを測り、口頭部外面にはナデが、胴部外面にはハケ施後にユビナデが、口縁部内面にはユビナデが、頭部より下半はヘラケズリが施されている。口唇部は明瞭な摘み上げは施されていないが、内面に強いユビナデが施されているためにやや上方への立ち上がりが観察される。胎土中には2mm以下の微量の結晶片岩粒と雲母片粒を含む。鶴喰川流域からの搬入品である可能性がある。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

82-39は覆土中層より出土した弥生土器広口壺の口頭部である。復元口径15.7cmを測る。口唇部は上方に摘み上げられ、口縁端部には1条の擬凹線が施されている。口頭部内面にはハケ施後にナデが施されているが、摩滅のため不明瞭である。胎土中には直径6mm以下の粗い結晶片岩粒が含まれている。弥生時代後期後半・矢野様相4の年代を与えることができる。

82-40が遺構底面より出土した。サスカイト製楔形石器である。全長3.35cm、幅2.15cm、厚0.6cm、重量4.89gを測り、下端一部に階段状剥離が観察される。



第82図 第2包含層出土遺物図(5)

V まとめ

1. まとめ

渋野遺跡の発掘調査は約 980 (延 1960) m² という限られた範囲ではあったが、本遺跡では弥生時代後期、鎌倉～室町時代の文化層を層位的に確認した。

(1) 第1遺構面：鎌倉～室町時代

当該期の本遺跡を特徴付ける遺構は、2基の炭窯である。徳島県内における炭窯遺構は主に吉野川流域の河岸段丘上において確認されており、勝浦川流域や沖積地における確認という点では、希少な例となり、当該地における開発過程・形態を考える上での好資料となる。円通寺遺跡の分析を通じて辻佳伸は、土地開発にあたって短期間の築窯・稼働・廃棄のサイクルを繰り返したことを探している（辻 2000）。吉野川河岸段丘上では、森林の一地点から粗朶類の伐採を始め、形成された空闊地に築窯・製炭しながら伐採を繰り返すことにより 50 ～ 100m 規模の空闊地ができる時点までその空闊地端所へ移動し同サイクルを繰り返すことにより、土地開発の端所とされた。

今回の調査地点で確認された1号炭窯と2号炭窯は、隣接（遺構間約3m）して築窯されていること、多々羅川水系沖積地（埋没自然堤防上）に立地し、炭原材料となる樹木の入手に不適当であること、隣接して自然流路や落ち込み状況構が展開していたと推定され地質的に不適であったと推定されることが指摘される。これらの要因から多々羅川水系沖積地における土地開発に伴い空闊地端所に築窯された炭窯とは考えがたい。むしろ、13世紀以前に渋野遺跡北側の三ッ時岩山塊に炭原材料を求めて築窯・操業された炭窯と捉えることが妥当であろう。

渋野遺跡周辺には、12世紀後半の中世村落関連遺構が確認された丈六境内遺跡や、京都仁和寺領篠原庄・勝浦庄や国衙領方上保が展開する。渋野遺跡において確認された13～15世紀代の年代が与えられる遺構・遺物は、先述した中世莊園に間違もしくは同時代に展開した遺構群と位置付けることができよう。なお、渋野遺跡西方約1 km の地点には、渋野城跡と居館が展開する。『阿波誌』によれば渋野城主は、牛岐城主新聞遠江守忠之の一族である新聞兼安とされる。牛岐城は南北朝期より新聞氏が居城しており、新聞遠江守忠之は16世紀後半の人物とされている。渋野城及び居館の形成時期は不明であり、渋野遺跡との間連は不明である。当該地における中世莊園の成立・展開過程を考慮に入れて検討すべき課題である。

(2) 第2遺構面：弥生時代後期後半

当該期に該当する遺構は、自然流路や落ち込み状況構を中心となり、堅穴住居等の集落を構成する遺構は未検出である。しかし自然流路内からは多数の土器が出土していることから、隣接して発掘調査対象地南側の多々羅川水系沖積地上には居住に関連する遺構が展開する可能性が高い。出土した土器類は鮎喰川流域における矢野遺跡様相4段階に該当する一群が多いのが特徴である。勝浦川流域における当該期集落遺跡の発掘調査事例は少なく、土器様相の実態は不明であり、在地土器様式は設定されていない。今回出土した土器には、東阿波型土器成立以前の土器に認められる特徴や鮎喰川流域における土器様式に特徴的な胎土が認められる土器の一群が存在する。吉野川下流南岸地域・鮎喰川流域製作土器群や東阿波型土器の搬出は、徳島県内においては吉野川流域の拠点集落を中心に確認してきた。県南域では僅かに、阿南市若杉山遺跡、海陽町芝遺跡、同町大

里松原所在包藏地が確認されてきたのみである。渋野遺跡は、吉野川下流南岸地域・鮎喰川流域からは半径約10 km圏内に位置し、1日の往復も比較的容易な地域である。また搬入状況は「複器種・一括型」に該当し、徳島県内における搬入パターンでは比較的通有の形態である。また、特徴的な土器としては胎土中に角閃石を含有する讃岐地域からの搬入品が、圓化可能遺物数で20点含まれている。これらが下川津B類土器に該当するかは詳細な検討が必要であるが、讃岐地域から一定量の土器が搬入されたことは留意すべきである。吉野川流域においては讃岐地域からの土器搬入は一定程度認められるが、勝浦川流域や那賀川流域においては、阿南市若杉山遺跡や徳島市多家良地区包藏地において、下川津B類土器や讃岐からの搬入土器片が確認されているにすぎない。今回の調査地点においては渋野遺跡の機能を類推する遺構は未確認であることから、弥生時代後期においての機能は判別が困難である。

しかし、当該地の地理的要因を考慮すると小松島湾と吉野川下流南岸地域・鮎喰川流域を結ぶ交通の要所としての評価ができる。近畿地方と徳島を結ぶ海上ルートとしては、播磨灘南岸を利用する瀬戸内海ルートと紀伊水道横断ルートが想定される。吉野川河口域北岸地域に該当する撫養ノ瀬戸を基点に紀伊水道を横断するルートは、潮流の影響が大きく渡海可能時間も制限される。潮流影響が少ないルートとしては、淡路島潮岬から津田浦や小松島湾を結ぶルートである。このルートでは、複雑な河道である吉野川ラグーン内を通じる必要が無く、0.4kmと比較的緩い潮流と年間を通じて吹く西北西の風を利用して紀伊水道を横断することが可能である。津田浦は園瀬川水系の堆積作用により水路が不安定であるが、津田山付近は安定した港湾地である。なにより、津田浦からは、園瀬川河口を利用して鮎喰川流域に到達することが容易である。この津田浦最奥部には寺山遺跡や広田遺跡が展開する園瀬川微高地が存在する。津田浦ルートは弥生時代後期には成立し古墳時代中期には盛期を迎えたと推定される。更に、津田浦から根井ノ鼻を廻ると、日の峰山塊により北西の風も避けられ、水深が安定した小松島湾に至る。湾奥部には勝浦川沖積地や自然堤防が発達しており、この地点に形成されたのが渋野遺跡である。小松島湾北側の勝浦川河口城からは、三ツ山時の西側を迂回し、小谷平野を通過後にあずり越えを超えると園瀬川流域に到達する陸ルートが想定され、容易に鮎喰川流域に到達することが可能である。なお、あずり越えを抜け園瀬川方面に降ると、園瀬川水系の水路とあずり越え陸路との2つのルート結節点に位置する岩山古墳が立地する。小松島湾奥部に抜ける勝浦川沖積地から勝浦川ラグーンや支流（現多々羅川）を利用して園瀬川河口域（津田浦）に到達する事は可能であるが、水深は浅く喫水の深い船の航行は困難であろう。寧ろ、あずり越え山稜山麓の陸ルートが安定していたと推定される。なお、小松島湾からは勝浦川を通り支流の本沼江川を経由して兀山越えを通じて那賀川左岸に到達し、那賀川沿いもしくは南岸沖積平野を通じて若杉山遺跡へ比較的容易に至るルートが想定される。

渋野遺跡は、こうした海上ルートと陸上ルートや河川ルートの結節点に立地する遺跡と位置付けることができ、吉野川下流南岸地域・鮎喰川流域や讃岐地域からの搬入土器が一定量を占めることも遺跡の性格が反映していると位置付けることが可能である。しかし、今回の発掘調査ではその実態を示す遺構は確認されておらず、周辺の多々羅川水系沖積地上に展開すると想定される遺構の検討が必要である。

栗林誠治 2004「四国島出土の東阿波型土器」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』4 （財）徳島県埋蔵文化財センター

辻 佳伸 2000「まとめ」『四国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 15 円通寺遺跡』徳島県教育委員会・（財）徳島県埋蔵文化財センター

第1表 土器觀察表

件 因 番 号	規 則 番 号	実測 番 号	出土遺構	器 種	高 さ	口径	底径	頸部径	残存率	体部径	粗 粒 度	土			
												組成	色調		
9 1	6	SD1001	こね鉢(瓦質土器)	3.7	30.8	—	—	1/24	31.8	3	中	石・雲・結・赤	内：灰 外：浅黄褐		
9 2	7	SD1001	こね鉢	3.9	17.4	—	—	1/15	18	1	少	石・青	内：灰 外：褐色		
9 3	8	SD1001	小圓(杯?) 土質土器			—	—	1/6	—	1	少	石・雲	内：棕 外：灰		
11 1	84	SK1001	器種不明(瓦質土器)			—	—	—	—	0.5	少	石	内：灰白 外：灰		
11 2	85	SK1001	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・雲	内：少い黄 外：棕		
12 1	86	SK1006	杯(土質質土器)	2	—	6.6	—	1/5	—	1	少	石・雲	内：棕 外：棕		
13 1	4	SP1049	甕(中世：瓦質土器)					—		1	少	雲・白色粒	内：灰白 外：明黃褐		
14 1	5	SP1055	小鉢?	(近世：陶器)	4.1	10	—	—	1/8	—	1	少	長	内：灰褐 外：灰褐	
20 1	73	SD1003	杯(土質質土器)	3.75	11.7	—	—	1/5	11.8	7	中	石・雲・結・赤	内：少い黄褐 外：少い黄褐		
20 2	75	SD1003	甕(陶器)			—	—	—	—	3	少	石・雲・角	内：灰 外：灰		
20 3	77	SD1003	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・角	内：褐 外：灰褐		
20 4	79	SD1003	甕(須恵器)			—	—	—	—	1	少	石・角	内：灰 外：灰		
20 5	80-1	SD1003	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・角	内：褐 外：黒褐		
20 6	80	SD1003	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・角	内：灰褐褐 外：少い赤褐		
20 7	78	SD1003	甕(陶器)			—	—	—	—	5	少	石・角	内：少い黄褐 外：赤		
20 8	76	SD1003	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・長	内：少い褐 外：棕		
21 1	83	SD1004	瓦器	1.8	11.6	—	—	1/12	—	1	少	石・雲	内：青灰 外：灰黄褐		
21 2	82	SD1004	杯(土質質土器)	1.8	—	—	—	1/6	—	1	少	石・雲	内：棕 外：棕		
21 3	81	SD1004	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・角	内：灰 外：灰		
22 1	89	SK1006	こね鉢(須恵器)	1.2	—	9.7	—	1/9	—	1	少	石・雲	内：灰 外：灰		
22 2	88	SK1006	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・雲・角	内：少い黄褐 外：少い赤褐		
22 4	87	SK1006	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・雲・角	内：少い黄褐 外：赤褐		
22 4	91	SK1006	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・雲・角	内：褐 外：少い赤褐		
22 5	90	SK1006	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・雲	内：少い黄 外：棕		
25 1	9	SD1005	杯(土質質土器)	2.4	—	6.8	—	1/7	—	2	少	石・雲・結	内：少 外：少い黄褐		
25 2	72	SD1005	青磁			—	—	—	—	0.5	少	黑色粒	内：褐 外：褐灰		
25 3	72-1	SD1005	甕(陶器)			—	—	—	—	2	少	石・赤	内：浅黄 外：棕		
25 4	55	SD1005	壺	12.85	—	—	—	1/4	—	4	中	石・雲・結・赤	内：少 外：少い棕		
27 2	94	SP1080	杯(土質質土器)			—	—	—	—	1	少	石・雲・赤	内：棕 外：棕		

件番	規範番号	実測番号	出土遺構	器種	調整 - 成形				備考
					口縁部	頸部	胴上部	胴下部	
9	1	6	SD1001	こね鉢(瓦質土器)	外:ナデ 内:ナデ	外:ナデ 内:ナデ	-	-	14C~15C?
9	2	7	SD1001	こね 鉢	外:ナデ 内:ナデ	外:ナデ 内:ナデ	-	-	東播系(魚住窯)か? 13C~14C?
9	3	8	SD1001	小皿(杯?) 土踏實土器	-	-	-	-	外:静止条件 内:ナデ 13世紀?
11	1	84	SK1001	器物不明 (瓦質土器)	-	-	-	-	-
11	2	85	SK1001	甕(陶器)	-	-	外:板ナデ 内:ハケ	-	備前焼? 実測番号90と胎土、 調整が似ている。
12	1	86	SK1006	杯(土踏實土器)	-	-	-	-	外:ナデ 内:ナデ 13~14C? 断面回転済切り。
13	1	4	SP1040	甕(中唇:瓦質土器)	-	-	外:椅子目輪 タキヨ 内:ナデ	-	内面はてき度を消している。 13後C~14C?
14	1	5	SP1055	小鉢?(近世:陶器)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	-	-	-	-
20	1	73	SD1003	杯(土踏實土器)	外:ハケ(12 mm/cm) 内:ハケ(12 mm/cm) →ナ デ	外:ハケ(12 mm/cm) 内:ハケ(12 mm/cm) →ナ デ	-	-	反転復元。内外面ハケは板ナ 子に近い。赤色焼締よく見入 る。
20	2	75	SD1003	甕(陶器)	-	-	外:ハケ 内:ナデ	-	-
20	3	77	SD1003	甕(陶器)	-	-	外:ハケ	-	備前焼? 14C~15C ? 1/20回有
20	4	79	SD1003	甕(漁器)	-	-	外:椅子目輪 タキヨ 内:ナデ	-	6C?
20	5	80・1	SD1003	甕(陶器)	-	-	外:ハケ 内:ハケ	-	備前焼? 14~15C?
20	6	80	SD1003	甕(陶器)	-	-	外:ナデ 内:ナデ	-	備前焼? 14~15C?
20	7	78	SD1003	甕(陶器)	-	-	外:板ナデ 内:ハケ	-	備前焼? 14~15C ? 1/20回有
20	8	76	SD1003	甕(陶器)	-	-	外:板ナデ 内:板ナデ	-	備前焼? 5~1/20回有
21	1	83	SD1004	瓦器柄	-	-	-	-	13C? 後半?
21	2	82	SD1004	杯(土踏實土器)	-	-	外:ナデ 内:ナデ	-	内面削減のため調整不明な 部分が多い。
21	3	81	SD1004	甕(陶器)	-	-	外:ハケ 内:ハケ	-	備前焼? 14~15C?
22	1	89	SK1008	こね鉢(瓦質土器)	-	-	外:ナデ 内:ナデ	-	東播系。
22	2	88	SK1008	甕(陶器)	-	-	外:板ナデ 内:ハケ	-	備前焼? 14~15C?
22	4	87	SK1008	甕(陶器)	-	-	外:板ナデ 内:ハケ	-	備前焼? 14~15C?
22	4	91	SK1008	甕(陶器)	-	-	外:板ナデ 内:板ナデ	-	備前焼? 14~15C?
22	5	90	SK1008	甕(陶器)	-	-	外:ハケ 内:ハケ	-	14~15C?
25	1	9	SD1005	杯(土踏實土器)	-	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:回転系切 り? 内:ナデ	備前焼? 14~15C?
25	2	72	SD1005	青磁碗	-	-	-	-	13~14C? 麻屋家系。
25	3	72-1	SD1005	甕(陶器)	-	-	外:ハケ 内:ナデ	-	14~15C? 備前焼?
25	4	55	SD1005	香	-	-	外:タキヨ 内:板ナデ	外:ナデ 内:ナデ	内面削減のため調整不明な 部分が多い。
27	2	94	SP1080	杯(土踏實土器)	-	-	-	外:ナデ 内:ナデ	13C~14C? 断面に回転系切 り?

検出 番号	測定 番号	実測 番号	出土遺構	器種	高さ	口径	底径	頸部径	残存率	体部径	胎土		
											粒径 mm	密度 g/cm³	組成
33 2	3	第1包含層	甕(中世:瓦質土器)						—	1	少	雲・白色粒	内:灰白 外:青黒
33 3	95	第1包含層	円筒埴輪					—	—	1	少	石・雲	内:浅黄褐 外:灰白
33 4	2	第1包含層	土管(近世)						1	3	中	石・長・雲・結	内:棕 外:棕
33 5	96	第1包含層	甕(須恵器)					—	—	1	少	石・雲・角	内:青灰 外:灰
35 1	99	SR2001	甕(土師質土器)	2.1	—	8.6	—	1/6	—	1	少	石・雲	内:棕 外:棕
39 1	65	SR2002	甕	8.3	19.9	—	—	1/4	—	2	中	石・長・雲・結	内:赤褐色 外:明赤褐
39 2	68	SR2002	甕	5.4	18.9	—	12	1/7	—	2	少	石・雲・結・赤	内:に赤い黄褐 外:棕
39 3	71	SR2002	甕	8.6	13	—	9.5	2/5	—	4	少	石・雲・結	内:淡褐 外:に赤い棕
39 4	56	SR2002	甕	7.9	—	—	11.3	1/4	—	7	中	石・雲・結・赤	内:に赤い黄褐 外:棕
39 5	58	SR2002	甕	11	—	—	4.3	2/5	—	2	少	石・雲・結・赤	内:灰黃褐 外:明赤褐
39 6	63	SR2002	甕	4.5	16	—	—	1/5	—	4	中	石・雲・結・赤	内:棕 外:棕
39 7	62	SR2002	甕	4	16.2	—	—	1/6	—	2	少	石・雲・結・赤	内:に赤い黄褐 外:棕
39 8	64	SR2002	甕	3.3	—	4.9	—	4/5	—	16	多	石・長・雲・結・赤	内:に赤い黄褐 外:棕
41 9	67	SR2002	甕					—	—	3	中	石・雲・結	内:灰 外:に赤い黄褐
42 10	66	SR2002	甕(?)					—	—	2	少	石・長・雲・角	内:に赤い褐 外:に赤い棕
42 11	70	SR2002	甕(?)					—	—	3	中	石・長・雲・角	内:明褐 外:に赤い褐
42 13	59	SR2002	高杯	10.1	—	—	—	4/5	—	8	中	石・雲・結・赤	10YR8/4
43 12	57	SR2002	高杯	10.5	—	—	—	1/2	—	3	少	石・雲・結・赤	内:に赤い黄褐 外:に赤い黄褐
43 14	60	SR2002	高杯	5.5	—	—	—	1/2	—	3	少	石・雲・結・赤	内:棕 外:棕
43 15	61	SR2002	鉢	15	24.4	—	—	1/5	—	3	少	石・雲・結・赤	内:に赤い黄褐 外:に赤い黄褐
43 16	69	SR2002	甕(須恵器)					—	—	1	少	石	内:灰 外:灰
44 1	52	SR2003	鉢	7.5	—	1.1	—	4/5	—	3	中	石・長・雲・結	内:明黄褐 外:棕
44 2	53	SR2003	甕	2.9	—	5	—	2/3	—	3	中	石・雲・角・結	内:に赤い黄褐 外:に赤い黄褐

辨認 番号	規範 番号	実測 番号	出土遺構	器種	調 整 - 成 形				備 考
					口縁部	頸 部	肩上部	肩下部	
33 2	3	第1 包含層	甕(中世:瓦質土器)	-	-	外:格子目紋 内:タキ?	-	-	内外面磨耗のため調整不明。 内面あて具をナデ消しているものと思われる。13後C~14C?
33 3	95	第1 包含層	円筒埴輪	-	-	外:ナデ?	-	-	内外面磨滅のため調整不明。
33 4	2	第1 包含層	土管(近世)	-	-	外:板工具 によるハケ(3 条/cm)	-	-	19世紀以前か?
33 5	96	第1 包含層	甕(須恵器)	-	-	外:格子文タ キ? 内: ナデ?	-	-	6C?
35 1	99	SK2001	杯(土質質土器)	-	-	-	-	-	反転律元、底面凹板無切り。 内:ナデ 13~14C?
39 1	65	SR2002	甕	外:ミガキ? 竹管 文、刻目文 内:ハケ?	-	-	-	-	内外面磨滅のため調整不明
39 2	68	SR2002	甕	外:ナデ 内:板ナデ	外:ハケ (9 条/cm) → 板 ナデ 内:ナデ	-	-	-	
39 3	71	SR2002	甕	外:タキ (4 条/cm) → ナ デ 内:板ナデ	外:ハケ (12 条/cm) 内:ナデ	-	-	-	
39 4	56	SR2002	甕	外:ナデ 内:ナデ	外:ミガキ (3mm) 内:ハケ (14 条/cm) → ナ デ	-	-	-	内面ハケ調整は粗くケズリに 近い
39 5	58	SR2002	甕	-	外:ミガキ (3mm) 内:板ナデ	-	-	-	内面磨滅のため調整不明な 部分が多い。
39 6	63	SR2002	甕	外:ナデ 内:ナデ	外:ハケ? 内:ケズリ?	-	-	-	内外面磨滅のため調整不明
39 7	62	SR2002	甕	外:ハケ? → ナデ 内:ナデ	外:ハケ (10 条/cm) 内:ケズリ	-	-	-	
39 8	64	SR2002	甕	-	-	-	-	外:ナデ 内:ナデ	底面はハケ (4条/cm) を施す。
41 9	67	SR2002	甕	-	-	外:ミガキ (3mm) → ナ デ 内:ハケ (9 条/cm)	-	-	後期後半~古墳時代前期初期 腰帯部下平と思われる。
42 10	66	SR2002	甕(壺?)	-	-	外:ハケ (9 条/cm) → ミ ガキ (2mm)	-	-	重さ 65.73g.
42 11	70	SR2002	甕(壺?)	-	-	外:ハケ (8 条/cm) → ナ デ 内:指サエ →ケズリ	-	-	重さ 9.15g. サスキ
42 13	59	SR2002	高杯	-	-	ミガキ (3mm)	外:ミガキ (3mm) 内:ケズリ	-	
43 12	57	SR2002	高杯	-	-	外:ミガキ? 内:ミガキ?	外:ミガキ (4mm) 内:ケズリ	調整ミガキ	
43 14	60	SR2002	高杯	-	-	外:ミガキ? 内:ミガキ?	外:ミガキ (2mm) 内:ケズリ	-	
43 15	61	SR2002	鉢	外:タキ (3 条/cm) 内:ハケ (12 条/cm)	外:ハケ (12 条/cm) 内:ハケ (12 条/cm)	外:タキ (12 条/cm) 内:ハケ (9 条/cm)	-	-	
43 16	69	SR2002	甕(須恵器)	-	-	外:タキ? 内:ナデ?	外:タキ? 内:ナデ?	-	
44 1	52	SR2003	鉢	-	-	外:タキ? 内:ナデ? 内:板ナデ?	外:タキ? 内:ナデ? 内:板ナデ?	底面穿孔。穴の直径 1.1cm, 内:板ナデ?	
44 2	53	SR2003	甕	-	-	-	-	外:タキ (4 条/cm) 内:ハケ (7 条/cm) → 板 ナデ 内:ケズリ	底面:ハケ (7条/cm) タタ キ調整の痕跡がわずかに残る。 角閃石を含むが、結晶片岩粒 を含む

検出 番号	測定 番号	実測 番号	出土遺構	器 種	高さ	口径	底径	側面性	残存率	体部性	胎 土		
											粒径 mm	密度	組成
46	1	32	SR2004	壺	6.5	—	15	10.2	1/6	—	3	少	石・雲・結・赤 内: 標 外: 標
46	2	51	SR2004	壺	7.6	—	—	—	1/3	—	3	少	石・雲・結・赤 内: に赤い黄褐 外: に赤い黄褐
46	3	47-1	SR2004	壺	5.8	3.8	—	—	2/3	—	4	中	石・雲・結・赤 内: に赤い黄褐 外: に赤い黄褐
46	4	31	SR2004	壺	4.3	—	5.5	—	4/5	—	2	少	石・雲・結 内: に赤い黄褐 外: に赤い黄褐
46	5	34	SR2004	壺	2.3	—	5.1	—	1	—	3	少	石・雲・結 内: に赤い黄褐 外: に赤い黄褐
47	6	45	SR2004	壺	26	14	5.2	—	1/2	—	4	多	石・長・雲・角 内: 明赤褐色 外: に赤い赤褐色
47	8	48	SR2004	壺	6.1	14.8	—	—	—	—	4	中	石・長・角 内: に赤い標 外: に赤い標
47	9	39	SR2004	壺	6.55	15.8	—	—	2/3	—	2	少	石・雲・結・赤 内: に赤い黄褐 外: 標
47	10	46	SR2004	壺	11.8	14.2	—	—	3/4	20.4	3	中	石・雲・結・赤 内: 灰 外: オリーブ墨 内: 標 外: 標
47	11	43	SR2004	壺	5.9	17.6	—	—	1/8	—	2	少	石・雲・結 内: 標 外: 標
47	12	47	SR2004	壺	4.8	17.6	—	—	1/6	—	3	中	石・長・雲・角 内: 標 外: に赤い標 内: に赤い黄褐 外: に赤い黄褐
47	13	35	SR2004	壺	3.5	20.2	—	—	1/12	—	2	少	石・雲・結 内: に赤い黄褐 外: に赤い黄褐
48	14	36	SR2004	壺	4	17	—	—	4/5	—	2	少	石・雲・結 内: 標 外: に赤い標 内: 標 外: 標
48	15	38	SR2004	壺	3.8	14.2	—	—	1	—	2	少	石・雲・結 内: 標 外: 標
48	16	42	SR2004	壺	3.7	15.8	—	—	1/9	—	2	少	石・雲・結 内: に赤い黄褐 外: 灰黃褐色 内: 標 外: 標
48	17	44	SR2004	壺	1.9	15.2	—	—	1/8	—	2	少	石・雲・結 内: 標 外: 標
48	18	50	SR2004	壺	14.8	—	4.2	—	—	—	4	中	石・雲・結・赤 内: に赤い黄褐 外: に赤い赤褐色
48	19	37	SR2004	高杯	6.6	—	—	—	4/5	—	3	中	石・長・雲・角 内: 明赤褐色 外: 明赤褐色 内: 黄褐色 外: 標
48	20	33	SR2004	壺(鉢?)	3.15	—	—	—	—	—	6	中	石・長・雲・結 内: 黄褐色 外: 標

件目 番号	記載 番号	実測 番号	出土遺構	器種	調整 - 成形				備考
					口縁部	領部	胴上部	胴下部	
46 1	32	SR2004		壺	外：ハケ (7 条/cm) →板 ナデ 内：ハケ (7 条/cm)	-	-	-	
46 2	51	SR2004		壺	-	-	外：ハケ (3 条/cm) 内：指オサエ →ハケ (3 条/cm)	-	外面ハケは丁寧でミガキに近 い。
46 3	47-1	SR2004		壺	-	-	外：ハケ (9 条/cm) 内：ケズリ	-	47と同一個体の可能性がある。
46 4	31	SR2004		壺	-	-	外：ハケ (6 条/cm) 内：ケズリ	-	
46 5	34	SR2004		壺	-	-	外：ハケ (9 条/cm) 内：ケズリ	-	
47 6	45	SR2004		壺	外：ナデ 内：ハケ (8 条/cm)	-	外：ハケ (8 条/cm) →ナ デ 内：指オサエ →ケズリ	-	
47 8	48	SR2004		壺	外：ナデ 内：ナデ	-	外：ハケ (10 条/cm) →ナ デ 内：指オサエ →ケズリ	-	サヌキか？角せん石の量は比 較的少ない。結晶片岩は含ま ない。
47 9	39	SR2004		壺	外：ナデ 内：ナデ	-	外：ハケ? → ナデ 内：ケズリ	-	内外面剥離のため調整不明な 部分が多い。
47 10	46	SR2004		壺	外：ナデ 内：ナデ	-	外：ハケ (6 条/cm) 内：指オサエ →ケズリ	-	口縁部と腹部の接合部分の内 面に絞りによる粘土の痕しが あり
47 11	43	SR2004		壺	外：ナデ 内：ナデ	-	外：ハケ? 内：ケズリ?	-	内外面剥離のため調整不明な 部分が多い。
47 12	47	SR2004		壺	外：ナデ・凹 線状文 内：ハケ (7 条/cm) →ナ デ	-	外：ハケ? 内：ケズリ?	-	外表面難成のため調整不明な 部分が多い。
47 13	35	SR2004		壺	外：凹線状文 内：ハケ (7 条/cm)	-	外：ハケ (5 条/cm) 内：ハケ (9 条/cm)	-	
48 14	36	SR2004		壺	外：ナデ・凹 線状文 内：ハケ (8 条/cm) →ナ デ	-	外：ハケ (8 条/cm) →ナ デ 内：ケズリ	-	
48 15	38	SR2004		壺	外：ハケ (12 条/cm) →ナ デ 内：ハケ (12 条/cm) →ナ デ	-	外：ハケ (7 条/cm) →板 ナデ 内：ケズリ	-	
48 16	42	SR2004		壺	外：ナデ・凹 線状文 内：ナデ	-	外：ハケ (7 条/cm) →板 ナデ 内：ケズリ	-	
48 17	44	SR2004		壺	外：ナデ・凹 線状文 内：ナデ	-	-	-	
48 18	50	SR2004		壺	-	-	外：ハケ (5 条/cm) 内：ケズリ	外：ハケ (5 条/cm) 内：ナデ	
48 19	37	SR2004	高杯		外：ハケ (8 条/cm) →ナ デ 内：ミガキ (3 mm)	-	外：ハケ (8 条/cm) →ナ デ 内：ミガキ?	-	サヌキ?角閃石の量は少々有 である。磨滅のため内外面調 整不明な部分が多い。
48 20	33	SR2004	壺(鉢?)		外：ナデ 内：ナデ	-	-	-	復元口径 35cm 前後の土師器 ですか？

検出 番号	測定 番号	実測 番号	出土遺構	器 種	高さ	口径	底径	縁部様	残存率	体部様	胎 土		
											粒径 mm	密度	組 成
48	21	40	SR2004	甕	2.65	15.4	—	—	1/10	—	1	少	石・黄・青・角 内:に少し黄 外:に少し黄 緑・赤
48	22	30	SR2004	甕	4.2	—	4.8	—	1	—	2	少	石・青・緑 内:に少し黄 外:に少し黄 緑
49	7	49	SR2006	甕	8	23.2	—	—	—	26.6	4	中	石・青・緑・赤 内:に少し黄 外:に少し緑
51	1	151	SR2006	壺	11.5	14.8	—	—	4/5	—	8	多	石・黄・青・緑・赤 内:黄褐色 外:橙
53	3	155	SR2006	甕	13.4	15.8	—	—	1/4	24.7	2	少	石・黄・青・角 内:明赤褐色 外:明赤褐色
53	4	111-1	SR2006	甕	4	16	—	—	1/9	—	3	少	石・青・緑・赤 内:橙 外:橙
53	5	111	SR2006	甕	4.4	15.2	—	—	1/8	—	3	少	石・青・緑・赤 内:橙 外:橙
54	6	118-1	SR2006	甕	5.8	18.2	—	—	1/8	—	2	少	石・青・緑 内:に少し黄 外:に少し黄 緑
54	7	122-1	SR2006	甕	0.8	14.2	—	—	1/10	—	1	少	石・黄・青・角 内:に少し黄 外:に少し黄 緑
54	8	144-1	SR2006	甕	4.3	15.6	—	—	—	—	2	少	石・青・緑・赤 内:に少し黄 外:に少し黄 緑
54	9	111-2	SR2006	甕	2.55	15.6	—	—	1/8	—	2	少	石・青・緑・赤 内:明赤褐色 外:橙
54	10	144-2	SR2006	甕	1.55	19.4	—	—	—	—	2	少	石・青・桔・赤 内:橙 外:橙
54	11	145	SR2006	甕	3.35	18	—	—	1/7	—	3	少	石・青・緑・赤 内:橙 外:橙
54	12	149	SR2006	甕	3.45	14.2	—	—	1/6	—	2	少	石・青・緑 内:に少し橙 外:橙
55	13	139	SR2006	甕	7.1	15.1	—	—	1/4	—	3	少	石・青・緑・赤 内:に少し黄 外:橙
55	14	162	SR2006	甕	6.2	16.4	—	—	1/12	—	3	少	石・青・緑 内:橙 外:明赤褐色
55	15	109	SR2006	甕	3.6	15.8	—	—	1/6	—	2	少	石・青・角 内:灰黃褐色 外:橙
55	16	137	SR2006	甕	7	16.6	—	—	1/6	—	2	少	石・黄・青・角 内:綠 外:綠
55	17	181	SR2006	甕	2.3	18.2	—	—	1/7	—	3	少	石・青・緑 内:に少し橙 外:明赤褐色
55	18	187	SR2006	甕	3.7	16.6	—	—	1/6	—	2	少	石・青・緑 内:に少し黄 外:明赤褐色
55	19	180	SR2006	甕	3.2	18.2	—	—	1/10	—	1	少	石・青・緑 内:橙 外:橙
55	20	182	SR2006	甕	4	14	—	—	1/12	—	3	少	石・青・緑・赤 内:に少し橙 外:に少し橙
55	21	185	SR2006	甕	2.8	20.2	—	—	1/6	—	2	少	石・青・緑 内:橙 外:に少し橙

件目 番号	記載 番号	実測 番号	出土遺構	器種	調整 - 成形					備考
					口縁部	領部	胴上部	胴下部	底部	
48	21	40	SR2004	壺	外:ナデ 内:ナデ	-	外:ナデ 内:ナデ	-	-	
48	22	30	SR2004	壺	-	-	-	-	-	外:ハケ(6 条/cm) 内:ケズリ
49	7	49	SR2006	壺	外:ナデ 内:ナデ	-	外:ハケ(4 条/cm) 内:ケズリ	-	-	
51	1	151	SR2006	壺	外:板ナデ 内:板ナデ 指オサエ	外:ミガキ (3mm) 内:板ナデ 指オサエ	-	-	-	
53	3	155	SR2006	壺	外:ナデ? 内:板ナデ?	-	外:ハケ(8 条/cm) 内:指オサエ ナデ	外:ハケ(8 条/cm)→板 ナデ	-	重さ 856.0g.
53	4	111-1	SR2006	壺	外:ナデ?・鉛 線状文様文 内:ナデ	-	外:ハケ(8 条/cm) 内:ケズリ	-	-	
53	5	111	SR2006	壺	外:ナデ?・鉛 線状文様文 内:ナデ	-	外:ハケ? 内:ケズリ?	-	-	内外面磨滅のため調整不明。
54	6	118-1	SR2006	壺	外:ナデ?・鉛 線状文様文 内:ナデ	-	外:ハケ? 内:ケズリ?	-	-	内外面磨滅のため調整不明。
54	7	122-1	SR2006	壺	外:ハケ? 内:ハケ?	-	-	-	-	重さ 8.23g。内外面磨滅のため調整不明。ナヌキ。
54	8	144-1	SR2006	壺	外:板ナデ 内:板ナデ	-	外:ハケ(8 条/cm) 内:ケズリ	-	-	内外面磨滅のため調整不明な部分が多い。
54	9	111-2	SR2006	壺	外:ナデ?・鉛 線状文 内:ナデ	-	-	-	-	
54	10	144-2	SR2006	壺	外:板ナデ 内:板ナデ	-	-	-	-	
54	11	145	SR2006	壺	外:ハケ?・ 鉛線状文様文 内:ハケ?	-	外:ハケ? 内:ケズリ	-	-	内外面磨滅のため調整不明な部分が多い。
54	12	149	SR2006	壺	外:ナデ 内:ナデ	-	外:ハケ?~ 万キ? 内:ケズリ	-	-	外表面磨滅のため調整不明な部分が多い。
55	13	139	SR2006	壺	外:ナデ 内:ナデ	-	外:ハケ(5 条/cm) 内:指オサエ -ケズリ	-	-	
55	14	162	SR2006	壺	外:ナデ 内:ナデ	-	外:ハケ? 内:ケズリ	-	-	内外面磨滅のため調整不明な部分が多い。
55	15	109	SR2006	壺	外:ナデ?・鉛 線状文 内:ナデ	-	外:ハケ(7 条/cm) 内:ケズリ	-	-	角閃石の量は少ない。
55	16	137	SR2006	壺	外:ナデ 内:ナデ	-	外:ハケ(8 条/cm) 内:ケズリ	-	-	反転復元。サヌキ。重さ 86.1g.
55	17	181	SR2006	壺	外:ナデ 内:ハケ(5 条/cm)	-	外:ハケ? 内:ケズリ	-	-	内外面磨滅のため調整不明な部分が多い。
55	18	187	SR2006	壺	外:ナデ?・鉛 線状文 内:ナデ	-	外:板ナデ 内:ケズリ	-	-	
55	19	180	SR2006	壺	外:ハケ(6 条/cm) 内:ハケ(4 条/cm)	-	外:ハケ(6 条/cm)→ナ シ	-	-	
55	20	182	SR2006	壺	外:ナデ 内:ナデ	-	外:ハケ(12 条/cm)→ナ シ	-	-	
55	21	185	SR2006	壺	-	-	外:ハケ(6 条/cm) 内:ケズリ	-	-	

検出 番号	測量 番号	実測 番号	出土遺構	器 種	高さ	口径	底径	縁部様	残存率	体部様	胎 土		
											粒径 mm	密度	組 成
55 22	165	SR2006		甕	2.5	16.4	—	—	1/4	—	3	少	石・長・雲・結 内：橙 外：橙
55 23	183	SR2006		甕	3.3	17	—	—	1/12	—	3	少	石・雲・結 内：橙 外：橙
56 24	176	SR2006		甕	6.8	18.6	—	—	1/10	—	3	少	石・雲・結・赤 内：明赤褐 外：橙
56 25	160	SR2006		甕	5.2	16.8	—	—	1/4	—	3	少	石・長・雲・角 内：明褐色 外：明褐色
56 26	175	SR2006		甕	4.6	19.2	—	—	1/8	—	3	少	石・雲・結 内：明褐色 外：に赤い橙
56 27	171	SR2006		甕	3.7	16.6	—	—	1/5	—	2	少	石・雲・結 内：に赤い黄褐 外：に赤い黄褐
56 28	172	SR2006		甕	4.2	13.4	—	—	1/12	—	2	少	石・長・雲・角 内：明赤褐 外：明赤褐
56 29	170	SR2006		甕	2.2	13.4	—	—	1/8	—	2	少	石・長・雲・角 内：に赤い赤褐 外：に赤い赤褐
56 30	124	SR2006		甕	6.45	11.2	—	—	1/6	—	2	少	石・雲・結・赤 内：に赤い赤褐 外：に赤い赤褐
56 31	117	SR2006		甕	4.1	9.2	—	—	1/5	—	5	中	石・雲・結 内：褐 外：褐
57 32	177	SR2006		甕	6.8	—	—	—	1/8	—	4	少	石・雲・結 内：褐 外：橙
57 33	154	SR2006		甕	17	—	—	—	1/3	30	5	中	石・雲・結・赤 内：橙 外：浅黄褐
57 34	143-1	SR2006		鉢(壺?)					—	—	4	少	石・雲・結・赤 内：明赤褐 外：明赤褐
57 35	173	SR2006		甕					—	—	2	少	石・長・雲・角 内：明赤褐 外：明赤褐
57 36	115	SR2006		甕					—	—	2	少	石・長・雲・角 内：褐 外：に赤い赤褐
57 37	129	SR2006		甕					—	—	3	少	石・雲・結 内：オリーブ褐 外：に赤い黄褐
57 38	130	SR2006		甕					—	—	2	少	石・長・雲・角 内：黒 外：に赤い黄褐
57 39	136	SR2006		甕					—	—	2	少	石・長・雲・角 内：に赤い褐 外：灰褐
57 40	128	SR2006		甕					—	—	2	少	石・長・雲・角 内：明褐色 外：褐
58 41	134	SR2006		甕	6.4	—	4.4	—	3/4	—	4	中	石・雲・結・赤 内：橙 外：橙
58 42	140	SR2006		甕	4.9	—	5.8	—	1/4	—	2	少	石・雲・結 内：灰褐 外：に赤い橙
58 43	168	SR2006		甕	6	—	4	—	2/3	—	3	中	石・雲・結 内：に赤い黄褐 外：に赤い黄褐

件 国 番 号	規範 番 号	実測 番 号	出土遺構	器 種	調 整 - 成 形					備 考
					口縁部	領 部	肩上部	肩下部	底 部	
55 22	165	SR2006		甌	-	-	-	-	-	内外面削減のため調整不明。
55 23	183	SR2006		甌	外:ナデ? 内:ナデ?	-	外:ハケ? (8 条/cm) →ナ デ	内:ケズリ	-	-
56 24	176	SR2006		甌	外:ナデ? 内:ナデ?	-	外:板ナデ? 内:ケズリ?	-	-	
56 25	160	SR2006		甌	外:ハケ (8 条/cm) + ナ デ	-	外:ハケ? (8 条/cm) 内:指オサエ+ ケズリ?	-	-	サヌキ。87.1g
56 26	175	SR2006		甌	外:ナデ? 内:ナデ?	-	外:板ナデ? 内:指オサエ+ →板ナデ	-	-	
56 27	171	SR2006		甌	外:ナデ・凹 線状沈線文 内:ナデ	-	外:ハケ (8 条/cm) 内:ケズリ	-	-	
56 28	172	SR2006		甌	外:ナデ? 内:ナデ	-	外:ハケ (10 条/cm) 内:ケズリ+ 指オサエ	-	-	サヌキ。重さ 70g。
56 29	170	SR2006		甌	外:ナデ? 内:ナデ?	-	-	-	-	サヌキ。口縁裏内面に米粒形 状の压痕?あり。記号文? 9.6g。
56 30	124	SR2006		甌	外:ナデ・ハケ (10 条/cm) →ナ デ	-	外:ハケ (6 条/cm) 内:ケズリ→ ナデ	-	-	
56 31	117	SR2006		甌	外:ナデ? 内:ナデ?	-	外:ハケ (7 条/cm) 内:ケズリ	-	-	
57 32	177	SR2006		甌	-	-	外:ハケ (7 条/cm) 内:指オサエ →ケズリ	-	-	
57 33	154	SR2006		甌	-	-	外:タガキ (3 条/cm) →ナ デ 内:ケズリ	-	-	
57 34	143- 1	SR2006	鉢 (蓋?)	-	-	-	外:ハケ (4 条/cm) 内:ナデ 記号文?	-	-	外面記号文?絵画?
57 35	173	SR2006		甌	-	-	外:ハケ (11 条/cm) 内:ナデ・指 オサエ	-	-	サヌキ。 重さ 14.0g。
57 36	115	SR2006		甌	-	-	外:ハケ (7 条/cm) 内:ケズリ	-	-	サヌキからの購入品。重さ 30.3g。
57 37	129	SR2006		甌	-	-	-	外:ハケ (11 条/cm) 内:ケズリ	-	
57 38	130	SR2006		甌	-	-	外:ミガキ 内:ケズリ	外:ミガキ? 内:ケズリ	-	重さ 50.7g サヌキからの購入 品。内面お朱け付。
57 39	136	SR2006		甌	-	-	外:ハケ (12 条/cm) 内:指オサエ →ナデ・ケズ リ	-	-	サヌキ。15.9g。
57 40	128	SR2006		甌	-	-	外:ハケ (7 条/cm) 内:指オサエ →ナデ	-	-	サヌキ。13.3g。
58 41	134	SR2006		甌	-	-	-	外:ハケ? 内:ハケ?	外:ハケ? 内:ハケ?	内外面削減と量減のため調整 不明。
58 42	140	SR2006		甌	-	-	-	外:ハケ (9 条/cm) 内:ケズリ	外:ハケ (9 条/cm) 内:ケズリ	内外面差異のため調整不明な 部分が多い。
58 43	168	SR2006		甌	-	-	外:ハケ (6 条/cm) 内:ケズリ	外:ハケ (6 条/cm) 内:ケズリ		

検査番号	測量番号	実測番号	出土遺構	器種	高さ	口径	底径	縁部様	残存率	体部様	胎土		
											粒径mm	密度	組成
58 44	142	SR2006	甕	7.3	—	4.3	—	1/3	—	8	中	石、雲、結、赤 内:に赤い黄鐵 外:橙	
58 45	123	SR2006	甕	6.5	—	3	—	1/3	—	2	少	石、長、雲、角 内:に赤い黄鐵 外:に赤い鐵	
58 46	144	SR2006	甕	6.5	—	4	—	2/3	—	3	少	石、雲、結、赤 内:に赤い黄鐵 外:灰黃褐	
58 47	186	SR2006	甕	6.35	—	5	—	1/3	—	2	少	石、長、雲、角 内:鐵 外:暗灰	
58 48	132	SR2006	甕	4.1	—	4.6	—	2/5	—	5	少	石、雲、結、赤 内:に赤い黄鐵 外:に赤い鐵	
58 49	178	SR2006	甕	2	—	5	—	4/5	—	2	少	石、雲、結 内:に赤い黄鐵 外:橙	
58 50	120	SR2006	甕	1.6	—	4.4	—	3/5	—	2	少	石、雲、結 内:に赤い黄鐵 外:灰黃褐	
58 51	146	SR2006	甕	3.55	—	4.8	—	1/6	—	3	少	石、雲、結、赤 内:に赤い黄鐵 外:橙	
58 52	179	SR2006	甕	3.05	—	5.8	—	7/12	—	3	少	石、雲、結 内:橙 外:橙	
58 53	135	SR2006	甕	3.2	—	4.6	—	1/4	—	8	中	石、雲、結、赤 内:橙 外:明赤褐	
58 54	121	SR2006	甕	2.5	—	4.2	—	1/3	—	3	少	石、雲、結 内:に赤い黄鐵 外:黒鐵	
58 55	150	SR2006	甕	6.9	—	5.6	—	1/4	—	7	多	石、雲、結 内:黃灰 外:に赤い黄鐵	
58 56	114	SR2006	甕	2.8	—	4.1	—	1/2	—	2	少	石、雲、結、赤 内:橙 外:に赤い橙	
58 57	119	SR2006	甕	2.4	—	3.7	—	4/5	—	3	少	石、雲、結 内:に赤い黄鐵 外:に赤い黃鐵	
59 58	184	SR2006	高杯	3.8	34	—	—	1/20	30.6	5	中	石、雲、結、赤 内:橙 外:明赤褐	
59 59	147	SR2006	高杯	3.55	30.4	—	—	1/12	—	3	少	石、雲、結、赤 内:に赤い黄鐵 外:橙	
59 60	163	SR2006	鉢	3.4	25.4	—	—	1/12	—	9	中	石、雲、結、赤 内:に赤い黄鐵 外:に赤い黄鐵	
59 61	169	SR2006	甕	11.35	—	3.7	—	1/3	18	6	中	石、雲、結、赤 内:橙 外:橙	
59 62	156	SR2006	鉢	9.1	—	5.3	—	1/3	—	7	中	石、雲、結、赤 内:に赤い鐵	
60 63	125	SR2006	鉢	10.9	20.15	4.5	—	1/4	—	3	少	石、雲、結、赤 内:橙 外:橙	
60 64	157	SR2006	鉢	3.45	16.7	—	—	1/6	—	2	少	石、雲、結、赤 内:橙 外:橙	
60 65	158	SR2006	鉢	7.8	16.7	—	—	1/8	—	3	少	石、雲、結、赤 内:に赤い黄鐵	
60 66	133	SR2006	鉢	4.4	20	—	—	1/6	—	3	中	石、雲、結、赤 内:橙 外:に赤い黄鐵	
60 67	174	SR2006	鉢	5.56	18	—	—	1/10	15.8	3	少	石、雲、結、赤 内:橙 外:橙	

件目 番号	規範 番号	実測 番号	出土遺構	器種	調整 - 成形					備考
					口縁部	領部	肩上部	肩下部	底盤	
58 44	142	SR2006	壺	-	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ?	外:ハケ? 内:ケズリ?	内:ハケ? 内:ケズリ?	内外面削減のため調整不明
58 45	123	SR2006	壺	-	-	-	外:ミガキ (2cm) 内:ケズリ	外:ミガキ (2cm) 内:ケズリ	外:ミガキ (2cm) 内:ケズリ	サスキからの搬入品。257.5g。
58 46	144	SR2006	壺	-	-	-	外:ハケ(5 条/cm) 内:ケズリ	外:ハケ(5 条/cm) 内:ケズリ	外:ハケ(5 条/cm) 内:ケズリ	サスキ、重さ29.0g。
58 47	186	SR2006	壺	-	-	-	外:ミガキ (3mm) 内:ケズリ	外:ナデ 内:ケズリ	外:ハケ? 内:ケズリ	サスキ、重さ29.0g。
58 48	132	SR2006	壺	-	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ	外:ハケ? 内:ケズリ	外:ハケ? 内:ケズリ	外面削減のため調整平明。
58 49	178	SR2006	壺	-	-	-	-	外:ハケ(7 条/cm) 内:ケズリ	外:ハケ(7 条/cm) 内:ケズリ	内外面削減のため調整不明な 部分が多い。
58 50	120	SR2006	壺	-	-	-	-	外:ハケ(7 条/cm) 内:ケズリ	外:ハケ(7 条/cm) 内:ケズリ	内外面削減のため調整不明。
58 51	146	SR2006	壺	-	-	-	外:ハケ(10 条/cm) 内:ケズリ	外:ハケ(10 条/cm) 内:ケズリ	外:ハケ(10 条/cm) 内:ケズリ	内外面削減のため調整不明。
58 52	179	SR2006	壺	-	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ	外:ハケ? 内:ケズリ	外:ハケ? 内:ケズリ	内外面削減のため調整不明な 部分が多い。
58 53	135	SR2006	壺	-	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ?	外:ハケ? 内:ケズリ?	外:ハケ? 内:ケズリ?	内外面削減のため調整不明。
58 54	121	SR2006	壺	-	-	-	外:ハケ(7 条/cm) 内:ケズリ	外:ハケ(7 条/cm) 内:ケズリ	外:ハケ(7 条/cm) 内:ケズリ	内外面削減のため調整不明。
58 55	150	SR2006	壺	-	-	-	外:ミガキ (4mm) 内:ケズリ	外:ミガキ (4mm) 内:ケズリ	外:ミガキ (4mm) 内:ケズリ	内外面削減のため調整不明。
58 56	114	SR2006	壺	-	-	-	-	外:ハケ(10 条/cm) 内:指オサエ →ケズリ	外:ハケ(10 条/cm) 内:指オサエ →ケズリ	内外面削減のため 調整不明。
58 57	119	SR2006	壺	-	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ?	外:ハケ? 内:ケズリ?	内外面削減のため 調整不明。	底面にハケ。内外面削減のため 調整不明。
59 58	184	SR2006	高杯	外:ハケ? 内:ハケ?	-	外:ハザマ 内:ケズリ? →ミガキ?	-	-	-	内外面削減のため調整不明な 部分が多い。赤色斑状の典型。
59 59	147	SR2006	高杯	外:ナデ・ミ ガキ? 内:ナデ・ミ ガキ?	-	外:ミガキ? 内:ハケ(10 条/cm) →ナ デ	外:ミガキ? 内:ハケ(10 条/cm) →ナ デ	-	-	内外面削減のため調整不明な 部分が多い。
59 60	163	SR2006	鉢	外:ナデ 内:ハケ(9 条/cm) →ナ デ	-	外:ハケ? 内:ハケ(9 条/cm) →ナ デ	外:ハケ? 内:ハケ(9 条/cm) →ナ デ	-	-	外面は削除のため調整不明。 163
59 61	169	SR2006	壺	-	-	外:タタキ(3 条/cm) →ナ デ 内:ケズリ →ナ デ	外:タタキ(3 条/cm) →ナ デ 内:ケズリ →ナ デ	外:タタキ(3 条/cm) →ナ デ 内:ケズリ →ナ デ	外:タタキ(3 条/cm) →ナ デ 内:ケズリ →ナ デ	縫合時の歪みのため体部最大 径の誤差は大きい。
59 62	156	SR2006	鉢	-	-	-	外:タタキ(2 条/cm) 内:板ナデ	外:タタキ(2 条/cm) 内:板ナデ	外:タタキ(2 条/cm) 内:板ナデ	外:タタキ(2 条/cm) 内:板ナデ
60 63	125	SR2006	鉢	外:ナデ 内:ハケ(12 条/cm) →ナ デ	-	外:板ナデ? 内:板ナデ	外:板ナデ? 内:板ナデ	外:板ナデ? 内:板ナデ	外:板ナデ? 内:板ナデ	内外面削減のため調整不明な 部分が多い。
60 64	157	SR2006	鉢	外:ナデ 内:ナデ	-	外:ハケ? 内:ハケ?	-	-	-	内外面削減のため調整不明な 部分が多い。
60 65	158	SR2006	鉢	外:ナデ 内:ナデ	-	外:板ナデ 内:ナデ	外:板ナデ 内:ナデ	外:ナデ 内:ミガキ (3mm)	外:ナデ 内:ミガキ (3mm)	外表面下半は乾燥時のがれ 痕あり。
60 66	133	SR2006	鉢	外:ナデ 内:板ナデ	-	外:板ナデ? ハケ? 内:板ナデ?	-	-	-	内外面削減のため調整不明。
60 67	174	SR2006	鉢	外:ナデ 内:ナデ	-	外:タタキ → ナデ? →ミガ キ? 内:ミガキ (3mm)	-	-	-	

検出 番号	測定 番号	実測 番号	出土遺構	器 種	高さ	口径	底径	頸部径	残存率	体部径	胎 土		
											粒径 mm	密度	組 成
61	68	152	SR2006	鉢	7.3	15	4.6	—	3/5	—	4	少	石・雲・結 内: 棕 外: 棕
61	69	166	SR2006	鉢	7.5	12.9	2	—	4/5	13.5	7	中	石・雲・結・赤 内: 棕 外: 棕
61	70	143	SR2006	鉢	7	10.6	—	—	1/2	9.5	4	少	石・雲・結・赤 内: 棕 外: 棕
61	71	153	SR2006	高杯	3.8	19.8	—	—	1/4	—	2	少	石・雲・結 内: 棕 外: 棕
61	72	127	SR2006	高杯	3.25	20.8	—	—	1/8	—	4	中	石・雲・結・赤 内: 棕 外: 棕
61	73	110	SR2006	鉢	5.5	—	3.1	—	1/2	—	3	少	石・雲・結・赤 内: 棕 外: に赤い黄鐵
61	74	164	SR2006	鉢(高杯?)	4.5	15.6	—	—	1/8	—	2	少	石・雲・結・赤 内: に赤い黄鐵 外: 錫灰
61	75	131	SR2006	鉢	4.4	11.8	—	—	1/8	—	4	少	石・雲・結・赤 内: 棕 外: 棕
61	76	188	SR2006	甕	6.2	—	4.6	—	1/8	—	3	少	石・雲・結 内: 錫灰 外: 棕
62	77	112	SR2006	鉢(甕?)	17.4	—	9.6	—	1/5	18.3	3	中	石・雲・結・赤 内: に赤い褐 外: 棕
62	78	116	SR2006	鉢	10.4	—	1.4	—	1/4	—	4	中	石・雲・結・赤 内: オリーブ褐 外: 棕
62	79	159	SR2006	高杯	8	—	—	—	1/3	—	4	中	石・雲・結・赤 内: 棕 外: 棕
62	80	126	SR2006	高杯	1.8	—	17.2	—	1/6	—	5	少	石・雲・結 内: 棕 外: 棕
64	84	106	SR2006	杯(土師質土器)	1.3	6.8	6	—	1/2	7.1	5	少	石・雲・結 内: 黄灰 外: に赤い黄鐵
64	85	161	SR2006	甕				—	—	—	4	少	石・雲 内: 灰 外: 灰
64	86	108	SR2006	甕(陶器)				—	—	—	1	少	石・雲・角 内: 錫灰 外: 錫灰
64	87	141	SR2006	甕(陶器)				—	—	—	2	少	石・黄・雲・角 内: に赤い黄鐵 外: 錫灰
64	88	138	SR2006	甕(陶器)				—	—	—	3	少	石・雲・角 内: 灰黄 外: 錫灰
64	89	107	SR2006	こね鉢(消泡質土器)				—	—	—	2	少	石・雲・赤 内: 底白 外: 白灰
66	1	98	SR2007	甕	5.5	16	—	—	1/7	—	3	少	石・黄・雲・角 内: に赤い黄鐵 外: に赤い黄鐵
66	2	97	SR2007	甕	2.7	—	5	—	1/2	—	2	少	石・雲・結 内: に赤い黄鐵 外: 明礬褐
71	1	100	SP2029	杯(土師質土器)	1.5	—	8.3	—	1/8	—	1	少	石・雲 内: 明礬褐 外: 明礬褐
71	2	101	SP2032	杯(土師質土器)				—	—	—	1	少	石・雲・結・赤 内: に赤い黄鐵 外: 明礬褐
78	1	14	第2包含層	甕	4.8	3.7	—	—	4/5	—	2	少	石・雲・結 内: 明礬褐 外: 明礬褐

件目 番号	測量 番号	実測 番号	出土遺構	器種	調 整 - 成 形					備 考
					口縁部	領 部	肩上部	肩下部	底 部	
61	68	152	SR2006	鉢	外:ナデ 内:板ナデ	-	外:タタキ(3 条/cm) →ミ ガキ(3mm) 内:ナデ	外:タタキ(3 条/cm) →ナ デ 内:板ナデ	外:タタキ(3 条/cm) →ナ デ 内:板ナデ	外:面観方向に成形時のひび割 れ痕あり。
61	69	166	SR2006	鉢	外:ミガキ? 内:ミガキ?	-	外:ミガキ? 内:ミガキ?	外:ミガキ? 内:ミガキ (2mm)	外:ミガキ? 内:ミガキ (2mm)	内外面削離のため調整不明な 部分が多い。
61	70	143	SR2006	鉢	外:ナデ 内:ナデ	-	外:タタキ(3 条/cm) →ナ デ 内:ケズリ→ナ デ	外:タタキ(3 条/cm) →ナ デ 内:ケズリ→ナ デ	外:ナデ 内:指オサエ →ナデ	底の裏にケズリ有
61	71	153	SR2006	高杯	外:ナデ 内:ナデ	-	外:ミガキ (3mm) 内:ミガキ (1mm)	-	-	-
61	72	127	SR2006	高杯	外:ケズリ→ナ デ 内:ケズリ→ナ デ	-	外:ケズリ→ナ デ 内:ケズリ→ナ デ	-	-	-
61	73	110	SR2006	鉢	-	-	-	外:ナデ 内:板ナデ	外:ナデ 内:板ナデ	外面ひび割れ痕有
61	74	164	SR2006	鉢(高杯?)	外:ハケ(9 条/cm) →ミ ガキ(3mm) 内:ナデ?	-	外:ハケ(9 条/cm) →ミ ガキ(3mm) 内:ナデ?	-	-	-
61	75	131	SR2006	鉢	外:ナデ 内:ナデ	-	外:タタキ(3 条/cm) →ナ デ 内:板ナデ	外:タタキ(3 条/cm) →ケ ズリ→ナデ 内:板ナデ	-	反転復元。
61	76	188	SR2006	甕	-	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ?	外:ハケ? 内:ケズリ?	内外面削離のため調整不明
62	77	112	SR2006	鉢(瓶?)	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ	外:ハケ(7 条/cm) 内:ケズリ・ ハケ(7条/ cm)	外:ハケ? 内:ケズリ→ 瓶孔跡の可能性もある。	-
62	78	116	SR2006	鉢	-	-	-	外:ケズリ→ ハケ(6条/ cm) 内:ケズリ	外:ケズリ 内:ケズリ→ ナデ	底面穿孔径0.8cm、有孔跡
62	79	159	SR2006	高杯	-	-	外:ミガキ (3mm) 内:ミガキ (3mm)	外:ミガキ (3mm) 内:ケズリ	-	-
62	80	126	SR2006	高杯	-	-	-	外:ハケ(5 条/cm) 内:ハケ(5 条/cm)	外:ハケ(5 条/cm) 内:ナデ	底面回転舟切り? 12~13C?
64	84	106	SR2006	甕(土師質土器)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	-	外:ナデ 内:ナデ	外:ナデ 内:ナデ	外:ナデ 内:ナデ	底面回転舟切り? 12~13C?
64	85	161	SR2006	甕	-	-	外:タタキ 内:板ナデ	-	-	中世?古代?
64	86	108	SR2006	甕(陶器)	-	-	外:板ナデ 内:ナデ	-	-	備前焼? 14~15C?
64	87	141	SR2006	甕(陶器)	-	-	外:板ナデ 内:板ナデ	-	-	備前焼? 14~15C?
64	88	136	SR2006	甕(陶器)	-	-	外:板ナデ 内:板ナデ	-	-	備前焼? 14~15C?
64	89	107	SR2006	二輪鉢 (直唇質土器)	-	-	外:回転ナデ 内:ナデ	-	-	表面探鉢には片端のように見 えるものもあり。袖元座?
66	1	98	SR2007	甕	外:ナデ 内:ナデ	-	外:ハケ(6 条/cm) →ミ ガキ 内:ケズリ	-	-	内外面削離のため調整不明外 面ミガキも方向不明瞭。ナメ キ? 重さ26.86g
66	2	97	SR2007	甕	-	-	-	外:板ナデ 内:板ナデ	-	-
71	1	100	SP2029	甕(土師質土器)	-	-	-	外:ナデ 内:ナデ	-	-
71	2	101	SP2032	甕(土師質土器)	-	-	-	外:ナデ 内:ナデ	底面回転舟切り。13C?	-
78	1	14	第2号 含層	甕	-	-	外:ハケ(7 条/cm) 内:ケズリ	外:板ナデ 内:ケズリ	-	-

検出 番号	測定 番号	実測 番号	出土遺物	器 種	高さ	口径	底径	頸部径	残存率	体部径	胎 土		
											粒径 mm	密度	組 成
78 2	15	第2包含層	壺(甕?)		3	—	4.4	—	—	—	2	中	石・雲・結 内:に少い黄褐 外:に少い黄橙
78 3	16	第2包含層	壺		6.7	—	—	13	—	—	4	中	石・雲・結・赤 内:に少い黄褐 外:に少い黄橙
78 4	20	第2包含層	壺		1.7	17.8	—	—	—	—	2	少	石・雲・結 内:に少い黄褐 外:に少い黄橙
78 5	18	第2包含層	壺					—	—	—	3	多	石・長・雲・角 内:灰 外:に少い赤褐色
78 6	17	第2包含層	壺					—	—	—	0.5	少	石 内:灰 外:灰
78 7	19	第2包含層	壺					—	—	—	2	多	石・長・雲・角 内:暗褐色 外:深褐色
79 8	21	第2包含層	壺					—	—	—	2	少	石 内:に少い黄褐 外:灰褐色
79 9	24	第2包含層	壺(甕?)		2.2	—	5.5	—	1	—	7	中	石・雲・結・赤 内:に少い黄褐 外:に少い橙
79 10	25	第2包含層	鉢		5.3	—	25.4	—	1/12	—	4	中	石・雲・結・赤 内:に少い黄褐 外:浅黄色
79 11	22	第2包含層	壺		2.5	—	4.6	—	1/5	—	3	中	石・雲・結 内:黄灰 外:黑褐色
79 12	23	第2包含層	高杯(脚部)		6.2	—	—	—	1/3	—	2	少	石・雲・結・赤 内:棕 外:棕
79 13	26	第2包含層	壺		7.5	—	—	—	1/12	—	2	少	石・雲・結 内:棕 外:棕
79 14	27	第2包含層	壺		4.7	—	5	—	1/2	—	3	中	石・雲・結・赤 内:に少い褐 外:に少い黄褐
79 15	28	第2包含層	壺		3.2	11.2	—	7.6	1/6	—	3	少	石・雲・結 内:棕 外:棕
79 16	29	第2包含層	壺					重さ、 14.18g	—	—	2	中	石・長・雲・角 内:赤褐色 外:暗赤褐色
80 17	143	第2包含層	鉢		7	10.6	—	—	1/2	9.5	4	少	石・雲・結・赤 内:棕 外:棕
80 18	141	第2包含層	壺(陶器)					—	—	—	2	少	石・長・雲・角 内:に少い黄褐 外:灰褐色
81 19	190	第2包含層	こね鉢(瓦質土器)		3.5	27.6	—	—	1/14	—	2	少	石・雲 内:灰黃 外:に少い黄褐
81 20	189	第2包含層	壺		4.6	17.6	—	—	1/8	—	2	少	石・雲・結 内:明黄褐 外:棕
81 21	192	第2包含層	壺		3	16.1	—	—	1/14	—	2	少	石・雲・結 内:に少い黄褐 外:に少い黄褐
81 23	194	第2包含層	壺		2.85	13.9	—	—	1/8	—	2	少	石・長・雲・結 内:棕 外:棕
81 24	193	第2包含層	壺		2.6	14.8	—	—	1/5	—	2	少	石・雲・結 内:棕 外:棕

件目 番号	銘載 番号	実測 番号	出土遺構	器種	調整 - 成形				備考
					口縁部	領部	肩上部	肩下部	
78	2	15	第2号 金屬	壺(腹?)	-	-	-	外:ハケ(9 条/cm) 内:ミガキ(3 mm)	外:ハケ(9 条/cm) 内:ナデ・指 オサエ
78	3	16	第2号 金屬	壺	-	外:ハケ(5 条/cm) 内:ミガキ(3 mm)	-	-	-
78	4	20	第2号 金屬	壺	外:ナデ・指 紋状次緑文 内:ハケ(7 条/cm)→ミ ガキ(2mm)	-	-	-	高环脚器の可能性あり。
78	5	18	第2号 金屬	壺	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ	-	-
78	6	17	第2号 金屬	壺	-	-	外:タタキ(3 条/cm) 内:ナデ	-	13C~15Cか?
78	7	19	第2号 金屬	壺	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ	-	-
79	8	21	第2号 金屬	壺	-	-	外:ナデ 内:ナデ	-	側面施大型? 14C~15Cか?
79	9	24	第2号 金屬	壺(腹?)	-	-	-	外:タタキ(3 条/cm)→ナ デ 内:ミガキに近い。	-
79	10	25	第2号 金屬	鉢	外:タタキ(3 条/cm)→ナ デ 内:ハケ(12 条/cm)→ナ デ	外:タタキ(3 条/cm)→ナ デ 内:ハケ(12 条/cm)→ナ デ	-	-	反転復元。内外面剥離と兼滅 のため調整不明。
79	11	22	第2号 金屬	壺	-	-	外:タタキ? →ハケ(B条 /cm) 内:ケズリ?	外:タタキ? →ハケ(B条 /cm) 内:ケズリ?	外:タタキ? →ハケ(B条 /cm) 内:ケズリ?
79	12	23	第2号 金屬	高杯(脚附)	-	-	外:ハケ(6 条/cm)→ナ デ 内:ナデ・絞 り巻	外:ハケ(6 条/cm)→ナ デ 内:ナデ・絞 り巻	外:ハケ(6 条/cm)→ナ デ 内:ナデ・絞 り巻
79	13	26	第2号 金屬	壺	-	-	外:ハケ(7 条/cm)→ナ デ 内:ケズリ	-	ハケ調整の前にタタキ調整を 施している。
79	14	27	第2号 金屬	壺	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ?	外:ハケ? 内:ケズリ?	外:ハケ? 内:ケズリ?
79	15	28	第2号 金屬	壺	外:ミガキ (2mm) 内:ナデ	外:ハケ(6 条/cm)→ミ ガキ(2mm) 内:ナデ	-	-	-
79	16	29	第2号 金屬	壺	-	-	外:ハケ? 内:ケズリ	-	内外面剥離のため調整不明。 調査からの既入品か?
80	17	143	第2号 金屬	鉢	外:ナデ 内:ナデ	外:タタキ(3 条/cm)→ナ デ 内:ケズリ→ナ デ	外:タタキ(3 条/cm)→ナ デ 内:ケズリ→ナ デ	外:ナデ 内:ナデ 外:ナデ 内:指オサエ 内:ケズリ→ナ デ	内外面剥離のため調整不明。 此の裏にケズリ有
80	18	141	第2号 金屬	壺(陶器)	-	-	外:ナデ 内:板ナデ	-	-
81	19	190	こね跡(瓦質土器)	外:ナデ 内:板ナデ	-	外:板ナデ 内:ナデ	-	-	側面施大型? 14~15C?
81	20	189	第2号 金屬	壺	外:ナデ・指 紋状次緑文 内:ナデ	外:ハケ? 内:ケズリ	-	-	内外面剥離のため調整不明
81	21	192	第2号 金屬	壺	外:ナデ・指 紋状次緑文 内:ナデ	外:ハケ? 内:ケズリ?	-	-	内外面剥離のため調整不明
81	23	194	第2号 金屬	壺	外:ナデ 内:ナデ	外:ハケ? 内:ケズリ	-	-	-
81	24	193	第2号 金屬	壺	外:ハケ(7 条/cm) 内:ハケ(7 条/cm)	-	-	-	-

検出 番号	測量 番号	実測 番号	出土遺物	器種	高さ	口径	底径	縁部様	残存率	体部様	胎土		
											粒径 mm	密度	組成
81	25	198	第2包含層	甕	5	13.9	—	—	1/8	—	3	少	石、雲、結 内：桂葉灰 外：橙
81	26	197	第2包含層	甕	2.8	—	4.6	—	1/2	—	3	少	石、雲、結 内：桂葉灰 外：に少し橙
81	27	195	第2包含層	甕	2.25	—	5	—	2/5	—	3	少	石・黄・雲・角・赤 内：明赤褐 外：に少し赤褐
81	28	199	第2包含層	甕	2.3	—	4.2	—	1/3	—	4	中	石、雲、結・赤 内：浅黄褐 外：橙
81	32	203	第2包含層	壺(甕?)	1.5	14.6	—	—	1/4	—	5	中	石、雲、結・赤 内：明褐 外：明褐
81	33	202	第2包含層	甕	2.3	15	—	—	1/3	—	3	少	石、雲、結・赤 内：橙 外：橙
81	34	204	第2包含層	壺(甕?)	2.1	13.6	—	—	1/2	—	4	中	石、雲、結・赤 内：に少し黄褐 外：灰灰
82	30	201	第2包含層	甕	10.5	13.7	—	—	1/8	19.4	3	少	石、雲、結・赤 内：明赤褐 外：橙
82	31	200	第2包含層	甕	5.6	11.6	—	—	1/8	14	3	少	石、雲、結 内：橙 外：橙
82	35	206	第2包含層	甕	4.3	35.4	—	—	1/14	—	5	少	石、雲、結 内：に少し黄褐 外：明黄褐
82	36	205	第2包含層	甕	5.1	29.3	—	—	1/12	—	4	少	石、雲、結 内：黑 外：橙
82	37	13	第2包含層	甕	4.7	11.6	—	8.8	1/12	—	6	中	石、雲、結 内：明赤褐 外：明赤褐
82	38	41	第2包含層	甕	5.6	15.8	—	—	1/8	—	2	少	石、雲、結・赤 内：に少し黄褐 外：橙
82	39	54	第2包含層	甕	4.35	15.7	—	5.3	1/3	—	6	中	石、雲、結・赤 内：橙 外：橙

井戸 番号	掘削 番号	実測 番号	出土遺構	器種	調整 - 成形					備考
					口縁部	領部	肩上部	肩下部	底部	
81	25	198	第2号 含層	甕	外：ナデ・芭 縫状文様文 内：ナデ	-	外：ハケ (8 条/cm) →ナ デ 内：ケズリ	-	-	
81	26	197	第2号 含層	甕	-	-	-	-	外：ハケ (9 条/cm) →ミ ガキ (3mm) 内：ケズリ	
81	27	195	第2号 含層	甕	-	-	-	-	外：ナデ? 内：ケズリ?	重さ 14.47g。サヌキ? 内外面 磨成のため調整不明。
81	28	199	第2号 含層	甕	-	-	外：ハケ (6 条/cm) 内：指オサエ →ケズリ	外：ハケ (6 条/cm) 内：指オサエ →ケズリ	-	
81	32	203	第2号 含層	甕 (腹?)	外：ナデ? 内：ナデ?	-	-	-	-	内外面磨成のため調整不明。
81	33	202	第2号 含層	甕	外：ナデ・芭 縫状文様文 内：ハケ (11 条/cm)	外：ハケ (7 条/cm) 内：ナデ?	-	-	-	内面粘土結合面で剥離。
81	34	204	第2号 含層	甕 (腹?)	外：ハケ (9 条/cm)・芭 縫状文様文 内：ハケ (9 条/cm)・紙 ナデ	-	-	-	-	32とよく似ている。
82	30	201	第2号 含層	甕	外：ナデ 内：ナデ	外：ハケ (8 条/cm) 内：ケズリ	外：ハケ (8 条/cm) 内：ケズリ	-	-	
82	31	200	第2号 含層	甕	外：ナデ 内：ナデ	外：指ナデ 内：ケズリ	-	-	-	
82	35	206	第2号 含層	鉢	外：指ナデ 内：ハケ (3 条/cm)	外：指ナデ 内：ナデ・ミ ガキ?	-	-	-	内外面磨成のため調整不明な 部分が多い。
82	36	205	第2号 含層	鉢	外：ナデ 内：ハケ (6 条/cm) →ナ デ	外：指オサエ →ケズリ 内：ナデ 外：ハケ (6 条/cm) →ナ デ	-	-	-	
82	37	13	第2号 含層	甕	外：ナデ 内：ナデ	外：ハケ (6 条/cm) →ナ デ 内：板ナデ	-	-	-	
82	38	41	第2号 含層	甕	外：ナデ 内：ナデ	外：ハケ (8 条/cm) →ナ デ 内：ケズリ	-	-	-	
82	39	54	第2号 含層	甕	外：ハケ? → ナデ 内：ハケ? → ナデ	外：ハケ (7 条/cm) →ナ デ 内：ナデ?	-	-	-	内外面磨成のため調整不明な 部分が多い。

第2表 石器観察表

採団番号	規範番号	実測番号	遺構番号	種類・材質	基種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	時代
33	1	1	第1包含層	サスカイト	石器	3.6	1.8	0.6	324	フリーフレーキングによる剥離で刃部を作りだしていると考えられる。	弥生
17	2	11	SD1002	サスカイト	楔形石器	2.6	4.05	1.15	13.7	上面に階段状剥離がある。全体的に剥離が進んでおり、剥離面にはガジリと思われるものもある。	弥生
17	3	12	SD1002	砂岩	砥石	4.65	4.2	1.9	46.67	A・B両面と側面上に細かな線条痕があり。砥石と考えられる。	弥生
82	40	92	第2包含層	サスカイト	楔形石器	3.35	2.15	0.6	4.89	上下端一部に階段状剥離が見らる。	弥生
27	1	93	第2包含層	結晶片岩	刮片	2.8	3.33	0.95	9.6	示す。	弥生?
64	90	104	SH2006	砂岩	砥石	11.7	10.1	5.05	1121.6	図示したA・B両面のほかに左側面と下面に擦痕がある。	弥生
63	81	113	SH2007	緑色岩	台石	8.6	7.4	7.95	285.1	図示した面には図に表現できないほどの擦痕があり、台石もしくは、砥石と考えられる。	弥生
63	82	148	SH2008	砂岩	磨石	4.85	7.3	2.6	95	細かな擦痕が見らる。刃物傷のような部分もあり、砥石として使用か?	弥生
81	22	191	第2包含層	サスカイト	石器	2.1	2	0.4	1.49	鉈基無茎式	弥生

第3表 鉄器觀察表

神社 番号	規範 番号	実測 番号	遺構番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	時代
17	1	10	SD1001	釘	5.4	1.6	0.6	8.48g	頭は方形。断面は方形（短所）	中世後半～近世
20	9	74	SD1003	釘	3.5	1.78		8g		中世後半
32	1	102	SP1065	鍤	2.2	2.25	0.25	3.83g		中世
63	83	167	SR2006	鉄鎌	4.95	2.15	1.95	2.5g	棒葉形系。茎長：3.5cm、茎幅：0.6cm、鎌身幅：1.95cm	弥生後～終末
81	29	196	第2包含層	不明鉄器	2.5	2.55	1.45	27.12g		

報告書抄録

ふりがな	しぶのいせき							
書名	渋野遺跡							
副書名	県道八多法花線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第83集							
編著者名	栗林誠治、佐野義行、徳島県教育文化政策課							
編集機関	公益財團法人 徳島県埋蔵文化財センター							
所在地	〒779-0108 徳島県板野郡板野町大伏字平山186番2 TEL 088-672-4545							
発行年月日	2013年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
渋野遺跡	徳島県徳島市 渋野町宮前 139, 140 他	36201	201-553	34° 00' 23.0"	134° 31' 44.6"	平成21年度 2010年1月1日～ 2010年3月26日 平成22年度 2010年4月1日～ 6月30日	980m ² (延1,960m)	県単道路局 部改良事業 (八多法花線)
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
渋野遺跡	集落遺跡	弥生時代後期 中世	土坑 柱穴 溝状造構 炭窯	土器（弥生土器、須恵器、 土師器、須恵質土器、土 師質土器など） 石製品（砥石、磨石など）				
要約								

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第83集

渋野遺跡

県道八多法花線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 平成25(2013)年3月25日

編集 公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108 徳島県板野郡板野町大伏字平山86番2
TEL (088) 672-4545 FAX (088) 672-4550

発行 徳島県教育委員会
公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 徳島県教育印刷株式会社